

せられて、泣き乍ら再びこんな事はしまいとあらゆる尊いものをかけて誓つた。然し満一ヶ月立たない中にまた煩惱にまけて密輸入を始めた。又舊教を狂信してゐる或る老人は正教派に改宗せしめられんとするのを怒つて正教派の教會に火をつけた。そして妻や子供や家族を残して、自ら「信仰の爲に苦難をうけるのだ」と稱して流罪となつた。又、アライと言ふ若い強盗殺人の粗糲人は無智文盲で一丁字も讀むことが出来なかつた主人公に聖書を教へて貰つて、早くも之を讀むことを覺えた。そして主人公が獄を出て自由の身となるとき、心から別れを惜んで泣いた。又、ある時囚人達は傷いて半死半生になつてゐる鷺を捕へた。此鷺はあらゆる人に戦を挑み、荒毛立つて凶猛な様子をして、與へられたる物も食へず孤獨に隅に引込んでゐたが、遂に囚人は之れを憐んで逃がしてやらうと思つた。鷺は捕へられて死物狂ひで人の手を引掻いた。「あゝ、畜生よ、人は此奴に親切をかけてやらうと思ふのに、此奴は御禮のつもりで人の手を引掻いてくれる。」と斯う囚人は意地の悪い鳥と可愛いと言はぬばかりに言つて、自由の荒野の中に放してやつた。斯様な暖い情に満ちた挿話は、尙多く「死人の家」の中に見出される。絶望と恐怖との度を極めた暗黒の中にも、一筋の優しい愛の光が射してゐることをドストイェフスキイは直覺した。彼は深い觀察と解剖と寫實とを通して、人間の心の最も奥

深く隠れた底に達することが出来た。彼が眞に具體的に民衆を知ることが出来、愛することが出来たのは實に此恐しい經驗を経た後であつた。彼が民衆に對する深い同情、全人類を包括せんとする大いなる憐憫は、未だ熾烈な白熱とならず、暖く柔かに、此作の中に表はれてゐる。人生の暗い底知れぬ深淵の中に、消もせずに残つてゐる生命の反射、それこそ如何なる暴力を以てしても打ち碎く能はざる人間の力である。彼は此年に又「汚はしき話」と言ふ短篇を書いた。

ドストイェフスキイと彼の兄の經營した雑誌「ヴレミヤ」は「死人の家」の評判よかつた爲に、非常に成功して、一八六二年には四千二百人の講讀者を得た。彼は會計編輯は、凡て兄に任かして、落ち着いて制作に従事することが出来るやうに見えた。彼の物質上の生活は一時樂になつたけれども、未だ創刊當時の借金が残つてゐるので安心が出来なかつた。其上、ベテルスブルグの喧噪と不順な氣候と過度の勞作や雑務の爲に、彼の持病の癩癩がまた烈しくなつた。彼には幸福な時がなかつた。物質上は樂を得れば、直ぐに精神の苦みが之に代つた。彼は外國へでも旅行して心を慰め乍ら病氣を治すしかないと思つた。そして妻と一所に旅行する丈の金は得られないので、止むを得ず、彼は一人で旅をすることにした。此時、彼の繼子のボオルは中學校の入學試験を受けてゐた。

六月七日彼は外國漫遊の途に出かけた。此時の旅行の印象は、彼が次の年に雜誌に連載した、「夏の印象に於ける冬の記録」の中に詳しく書かれてゐる。始め彼はベルリンへ行つたが、雨と霧の悪い天候に悩まされた上に、極めて不快な印象を受け取つたので、彼はベルリンに二十四時間しか足を止めなかつた。ベルリンは彼に取つて町の有様や空氣の香がベテルスブルグと同じやうに見えて面白くない上に、ベルリン人が憲法のみを有難がつて最も此世の大切なものを凡て犠牲としてゐると思つた。それで、彼は有名であつたアウルバツハの畫も見ないで、直ちにドレスデンに逃げて行つた。然るにこゝでも亦彼はドイツ婦人を見て不快を催した。「ドレスデンの婦人のタイプよりも、もつと厭らしいものは何にもないやうに思はれた」と彼は言つてゐる。斯う何もかも不快に見えるのは、彼が肝臓を病んでゐたのと、神経が病的に荒んでゐた爲であつた。彼はむしゃくしやに腹を立てたが、キエスバアデンへ行つて、不愉快な氣分を換へる爲に球戯場へ行つて見た。數百の人がそこには盛んに賭博をやつてゐた。ふとした出来心からも彼も亦やつて見たくなつた。そして生れて始めて賭博をして、彼は一万四百法勝つた。彼はひどく興味を感じたが、もうこれつきりこんなことはやるまいと決心して次の日に早速こゝを立ち去つて了はうと思つた。然し、翌日になると、如何しても好奇心を抑へること

が出来なかつた。もう勝つ秘密は知つたから大丈夫だと思つて、彼は再び球戯をした、然し、今度は五百法ばかり負けて了つた。此最初の賭博の經驗に得た彼の好奇心は後に大なる失敗を齎すやうになるとは彼は夢にも悟らなかつた。この五百法残つてゐる勝つた金の爲に、彼は兄や妻に幾分か外國から仕送りをすることが出来た。此事は自分の義妹コンスタンチン夫人に送つた手紙に詳しく書かれてゐる。「ブルブラ、ドミトリエヅナ、此事は誰にも言つてくれるな。お前は誰にも會はないのが常だから、本當に誰にも言ふ筈はない。然し、俺は實際バアシヤ(繼子のポオルのこと)のことを言ふのだ。彼はまだ小さい鷺鳥だから、恐らく賭博をして生活することが出来ると思ふだらう。彼は最近番頭になつて金を得やうと考へてゐるのだ。だから僕は何にも覺える必要はない」と俺に報らせてよこした「だから、」彼が父親が賭博場に入つたことを知つては不可ないのだ。』神経が病的に傲立つて、息づまるやうな生活をしてゐた彼は、此最も不快な時に氣分を換へる爲に、外に心を慰めるものもないので、こんなことをして息を抜く必要があつた。彼は病的な氣紛れと好奇心との犠牲であつた。

キエスバアデンに四日間滞在した彼はバアデンに行き、更にコロオニエへ行つた。彼は其處に今迄想像してゐたやうな美しい寺院が澤山あるだらうと思つてゐたが、其寺院も亦彼にはつまらなく無趣

味に見えた。彼は自分が明に病氣の爲にさう見えたことを自覺した。此旅行の歸途に再びコロオニエの寺院を見た時は、彼は美しく氣高く以前と變つて見えたと言つてゐる。然し、此時は、此處の有名な大きな橋を見ても、彼は少しも感心せず、獨逸人は彼を馬鹿にしてゐると思つた「哀れなロシア人よ、我々の橋を御覽、此橋と凡ての獨逸人の前では、お前は蟲けらに過ぎないのだ。何故と言つてお前はこんな橋を持たないから」と斯う彼等はドストイェフスキイに囁いてゐるやうに思はれた。

彼は至る所に不愉快を感じて腹立しげに立ち去つた。彼の乗つてゐる汽車はライン河を渡つた。此河の兩岸の美しい夢みるやうな村落や、濕ひを含んだ樹木や、雨の中に濡れゆく幽幻な平原や、ブツサンの繪を展げたやうな風景を見て、彼は始めて息をついた。彼は漸く巴里についた。始め彼は巴里を見て満足を感じた。「是は世界で最も徳の高い道德的の町である。何と言ふ秩序、何と言ふ謙讓、何と言ふ正しいよく立てられた連絡であらう。凡ての物は何と言ふよく保たれ定められてゐることだらう。凡ての人々は何と言ふ嬉しげで幸福であるだらう」と彼は「夏の印象に於ける冬の記録」の中に書いた。然し、彼には直ぐに憂鬱と倦怠とが襲ひ始めた。彼は巴里の美術建築の傑れてゐるものを賞めてゐたが、巴里人には不快を感じた。殊に中流人が厭であつた。「巴里は最も悲觀すべき町である。

其處には眞に多くの驚くべきものがなかつたとしても、人々は其處で悲觀して死んで了ふ。誓つて言ふが、佛蘭西人は厭な人々である。……佛蘭西人は柔しく正直で丁寧である。然し彼は偽つてゐる。彼に取つて金錢が凡てなのである。理想もなく、確信もない。彼に思考を求めてはいけない。教育の程度も非常に低い。」

彼は更にロンドンを訪れた。此町は彼には重くるしく、暗く、陰氣で、只だどつびろく、夜も晝も器械の呻りやら、鐵道の響きやらで喧しく、博覽會には人浪がなみのやうに押し合ひへし合つてゐるので彼は怖毛を振つた。彼は八日間しか其處に留らなかつた。然し、ある晩、彼はカジノへ行つて見て、イギリス婦人の恐しく美しく、殆ど理想的な美を表はしてゐるのに驚いた。只、英吉利の男も女も舞踏をするのにも、殆ど義務をつくすやうに眞面目くさつて陰氣な顔をしてやつてゐるのが氣になつた。彼はロンドンでロシアを亡命してゐる社會主義者の小説家ヘルツェンに會つた。彼は始めドストイェフスキイに丁寧な態度を表はしたので彼は好意を感じた。然し數年後になつて、ヘルツェンがロシア人の魂を少しも理解してゐないのを見て彼は攻撃してゐる。

彼は再び巴里に引返して。そして、今年は少し長く滞在した。此時の佛蘭西のブルジョアに對する

感想を彼は可成長く、「夏の印象に於ける冬の記録」の中に書いてゐる。彼は佛蘭西人が自由博愛平等を説くが、眞の自由博愛は他人の爲に、自己の意志から犠牲をする爲に得られるものであつて佛蘭西のブルジョアの如く自己を犠牲にしないで、徒らに利己心のみ走つては得られないことを説いてゐる。更に彼は佛蘭西に於て悪印象を残した一事がある。彼はイタリアへ行く爲に通行券の署名をして貰はうとして佛國領事ヌンキオ僧正の所へ行つたが二度とも留守を食つた。三度目に訪ねて行つた時は、朝食を食つて珈琲を飲んでゐると言つた。彼は全く腹を立て、了つた。「珈琲の中に唾を吐いてやる通行券に署名しなければ、づう／＼しく飛び込んで行つてやると僧正に言つてくれ、」と彼は怒鳴つた。彼の神経は全く病的でいら立つてゐた。彼はあらゆるものに此時は腹を立てた。然し彼は遠く本國を離れ、外國に来て、益々ロシア人の獨創力のある人種なることを認めた。彼はロシアの西歐主義者が崇拜嘆稱しておかない佛蘭西人の必ずしもロシア人より傑れてゐるものではないことを益々自覺し、そして上から鳥瞰圖的に廣く世界を見下して、ロシアと他の國々とを比較することを學んだ。

少年時代から立派な國と夢みてゐた獨逸、佛蘭西、英吉利に多くの幻滅を感じた彼は、更に未知の美しい國、瑞西や伊太利に行つた。彼はリュセルヌ、ジエネヴァ、ジュノア、フロレンス、ミラノ、

ゼニスなどを訪ねた。「ヴレミヤ」誌で彼とグリゴリエフと共に三人の國土主義者とよばれてゐる評論家のストラホフが、丁度ジエネヴァにゐた。彼が訪ねて來たので、一所に旅行した。一八六三年九月、ロオマへ行つた時は、非常な感動を得た。サン、ペテロ寺院を見物して彼は背中に戦慄を感じた。フロラム、コリゼ、其他の遺跡を見ても強い印象を受感した。ゼニスではストラホフと共にゴンドラに乗つて絶景を眺め乍ら酒を飲んだ。然し、此時ストラホフは一足先きに歸つたものらしい。

其旅行中に彼は、ヴレミヤ誌が、ストラホフの「ポオランド問題」に關する論文で、發行禁止の命をうけたことを知つた。ヴレミヤの賣行が多少よくなつて、漸く困窮から逃れるやうになつたのが、再び彼等はロシア官憲から革命的傾向を帯びてゐると誤解されて發行を禁ぜられた。其はドストイェフスキイに取つてひどい打撃であつた。政府の機關紙や行政官や學者は、愛國と言ふ點に於てはヴレミヤ記者と一致してゐるにも係らず、理想、方法、出發點、一般觀念が不可であると言つて非難を加へた。彼等はドストイェフスキイが民衆を愛するのが氣に食はなかつた。「民衆の思想に何の新しい所があるか、」と彼等は口々に言つた。ドストイェフスキイは政府に反對し攻撃するものと思はれて、遂々雑誌は發行禁止となつて、又もや貧窮に苦しまなければならなかつた。ロオマに滞在中彼の財布に残

つてゐる金は少くなつた。『ロオマからナポリへ行き、(今日から十二日後)ナポリからトリノへ歸るとすると、十五日の中に其處へ着くわけです。トリノへ着けば、私の財布は空になつて了ひます。私は文字通りに「一錢」もなくなるのです。』斯う言つて、彼はストラホフに宛て、手紙をかき、金策をしてくれるやうに頼んでやつた。此同じ手紙の中に、彼は短篇「賭博者」を書く計畫を立てゝゐた。其は明かにキエスバアデンに於ける彼の秘密にやつた賭博の經驗を基としたものであつた。『私は單純な性質で、頗る修養があるが未だ完全でない人を描きます。信仰を失つたが、不信仰を敢てしない、そして權威に反抗するが其を恐れてゐる人を描くのです。一變した生涯を始めやうとして、彼はロシアに何も爲すべきことがない事を思ふ。こゝで私はロシア人を根こぎにする人々に對して殿しい批評をするのです。……大切なことは凡ての彼の生き生きした力、勇氣、大膽が球戯に費されることにあるのです。彼は賭博者です。然し、單純な賭博者ではない……』此手紙の中には多少自己に對する批評と反省があるのは面白いことである。

彼は旅費を手に入れると、大急ぎでロシアへ歸つて來た。ヴレミヤを如何かして復活させやうと骨折つたが、到底官憲では許ささうもなかつた。彼は再び政府から危険人物との誤解を蒙つて、先には

生命を危うくしたが、此度は財産を危くした。彼は再び破滅せんとした。加ふるに彼の病氣は進んで來て床につくやうになり、又彼の妻の肺病も再發し重くなつた。彼女は到底助からない運命を持つてゐたのであつた。一八六三年ドストイエフスキイが再び外國旅行を企てたことに就いて、今迄知られなかつた秘密があることを或人は物語つてゐる。彼の妻のマリア、ドミトリエヅナが、神經過敏な性格の破産者であつて、ドストイエフスキイが是爲に惱まされ、屢々喧嘩を起したことは前に述べた。此頃、田舎の富裕な地主の娘で、ペテルスブルグに勉強に來てゐたポオリンと言ふ輕挑な女に會ひ、彼が戀をするやうになつた。ポオリンは華かなことの好きな節操のない肉感的な女で、ドストイエフスキイを誘惑し、二人でフランスへ旅行をしやうと企てた。然し、ドストイエフスキイには急に用事が出來たので、ポオリンのみ先きに出發し、巴里で落ち合ふ約束をした。所がポオリンは巴里でフランスの或る青年と戀に落ち、ドストイエフスキイと斷然手を切ることを手紙で書き送つた。ドストイエフスキイが狂氣のやうに巴里に追ひかけてくると、『私の自由意志でああなたに身を任せたが、今度も自由意志で二人のあらゆる關係を絶ちます。』と言ふのが女の返事であつた。それで彼が絶望してロシアに歸つてくると、女は男に捨てられた爲めに、又ドストイエフスキイを誘惑して巴里に引返させた。

ドストイェフスキイは、女の青年に復讐しやうとするのを和めて、イタリヤの方に二人で旅に上つたが、間もなく、女が愛もなく翻弄してゐるのにも厭きて、女の方から別れたとのことである。又ストラホフが此時巴里で彼が再三賭博をしたことを言つてゐるのを見れば、此噂は本當かも知れない。彼の「賭博者」に表れてくる専制的な女主人公は此女をモデルとしたものと思はれる。

ドストイェフスキイが、ヒステリーの妻と喧嘩し乍らも愛してゐたが、その間に、彼の情熱が一時的に他の女性に向つて行つたことは、有り得べき事柄である。恐らく、其は彼の性慾の一時的發作であつて、彼が本當にポオリンなる女性を愛してゐたか如何かは疑問である。そして、かゝる性慾の誤ちは彼のやうに長い間病める妻を持つた夫には、許すべからざる罪惡として咎めることは出来ない。彼が晩年再び此ポオリンに會つた時、如何しても彼女を思ひ出すことが出来ず、女がヒステリックに、「私を覚えてゐられない筈はない。」と幾度も繰り返して絶望して去つた後に、始めて、その女が彼を翻弄した魔性の女であることに氣がついたと言ふ。これでも、彼が眞の夢を彼女に感じてゐなかつたことは證明される譯である。

## 十 み っ つ の 災

「エポカ」誌の刊行——「地下室」——妻の病死——兄の貧死——親友グリゴリエフの死——兩方面よりの迫害と失敗——外國旅行と賭博——ヴランゲル男爵との再會

「ヴレミヤ」を復活させやうと如何に努力しても許されなかつたが、ドストイェフスキイ兄弟は之で勇氣を失はなかつた。彼は困難と大厄の中を切り抜けて、再び雑誌を改題して發行しやうとした。始め「ブラヴダ」(眞理)と命名しやうとしたが、皆と相談の結果、「エポカ」(時)と名づけることにした。一八六四年三月二十四日再度の旗揚の準備を整へ、第一號を發刊した。

彼は稍長い短篇「地下室」を書いて「エポカ」へ載せ始めた。然し妻のマリア、ドミトリエヴナの肺病は益々進んで來て危篤に類しつゝあつた。其上彼自身も病氣がちで、心配と衰弱と交々至り、働くことも容易ではなかつた。「書くと言ふことは器械的の仕事では、りません。」と彼は兄にあて、書いた、「然し、私は常に毎朝書いてゐます。作物は始めるより仕方がありません。小説は長くなつて行きま

す。時として私は此作が何等の價值もないと思ふことがあります。然し、私は熱心に書いてゐます。私は其の結果如何なるか知りません。でも、これから多くの時を要することです。半分丈でも書き上げた印刷に附する爲に送りませう。然し、私は全部印刷に附したいと思つてゐます。一般に全く暇なのですけれど、私には書くべき時がないのです。今は書きたいと言ふ氣にならないで他のことを頭にしげくと思つてゐるから暇が少いのです。其は斯うです。私は妻の死が間もなく襲つて來はしまいかと心配してゐるのです。そうすれば屹度仕事が妨げられはしまいかと恐れてゐるのです。若し此障害が起らなかつたならば、完結するやうに思はれます。」

「地下室」は斯様な心配と困窮の中で書かれたものであつた。其處には鋭い神経と苦がい経験と傷けられたる威厳と怒りに隠れた愛とが描かれてゐる。彼は其處に暗い穴倉に呻吟してゐる貧しい半病人の感想と心持とを書いた。此主人公が苦しんでゐるのは實に近代の文明が齎した人類の病である。貧窮と神經の入り交つた苦しいにがい辛い病的な心持である。此人類の病氣を治すには何よりも親切な暖かい愛の手でなくてはならない。此主人公は愛を持たなかつた。彼は貧しい爲に一夜人から傷けられた威厳から、悲みと怒りと泥酔の出來心に任せて、淫賣婦と關係する。そして、酔が覺めると共に

自分の卑しい行爲をひどく恥ぢて悔いる。彼は哀れな墮落した此世から見棄てられた女に對して、憐憫と同情とを感じる。然し、其心持は貧窮と侮辱の爲に裏ざられることが屢々ある。彼は此時心から淫賣婦に愛の尊いことを語つて聞かせるのである。「お前は今は若く綺麗で善良で魂も感情もいっぱい持つてゐる。それで今俺が眼を覺した時は、直ぐにお前とこんな所にゐるのは卑しいことだと思つた。人々は酔つばらつていなければこんな所へ來はしない。若しもお前が善良な人々のやうに暮してゐて今と違つたことをやつてゐれば、多分俺はお前の氣に入るやうにしたりお前を愛するやうにもなるだらう。俺はお前から言葉一つ話しかけられても、一度見られた丈でも幸福になるやうになる。俺はお前を戸に待つてゐて、膝まづくかもしれない。お前を許嫁としてそして非常に幸福になるだらう。俺はお前を卑しいなどとは思ふことが出來ないだらう。然し、こゝへ來れば、俺は口笛を吹くだけで、お前は意志があるなしに係らず俺の言ふ通りにしなければならぬ。俺はお前の意志を考へる必要はなく、お前が俺の意志を考へなければならぬ。労働者として雇はれてゐる最もひどい百姓だつて、すつかり自分の身を使はせはしない、自分が使役されるには條件があるのを知つてゐるのだ。だにお前は何日そんな自由の身となれるのだ。よく考へて見ろ、お前が何をこゝで與へてゐるのか、何を使

つてゐるのか。お前の魂だ。お前の魂はお前に屬してゐず、肉體と一所に使はれてゐるのだ。酔つばらひは皆お前の愛を弄ぶのだ。あゝ、愛、これこそ凡ての物である、金剛石である、若い娘の實は愛なのだ。此愛を價ひする爲に、ある人々は生命を抛ち死ぬやうなこともするのだ。だのに、お前の愛の價は何であるか。お前は全く賣買されてゐる。愛がなくして凡てのことが可能の時は、人々は愛を得る必要はなくなる。若い娘に取つて、これ程残酷な侮辱はあるであらうか。」

「エボカ」は前の雑誌より賣れなかつたので、ペテルスブルグにゐて編輯してゐた兄のミハイルは非常に困つた。ヴレミヤ時代の講讀者には前金を拂つて雑誌を受け取らないものが多かつたので、其人達に只で配布せねばならず、雑誌の發行は遅れがちで、其上雑誌の敵が非常に多くなつて、攻撃が甚しいので尙更賣行が悪く新しい講讀者は少なかつた。當局者は虛無主義者革命主義者と見て、ドストイェフスキイの名を編輯人とすることを禁じ、自由主義者社會主義者はドストイェフスキイのロシア民衆を愛すること及び其信仰を攻撃し、政府の探偵であるかの如く言ひふらした。實際は、彼は西歐主義を否定せず、ロシアの傑れた魂を益々發達せしめるやうに西歐文明を取り、ロシアを淺薄に歐化して根こぎにしないやうに努め、ロシアの偉大な天才と使命を認るることによつて、スラヴ主義者と一

致し、愛の信仰により、凡ての他國の矛盾を調和して、完全なロシアの精神を自立せしめることを主張したのであつた。即ち、彼は最も深い意味の文明の綜合を唱導したのであつたが、彼の精神は此二つの主義者から却つて曖昧なものとして誤解されたのである。斯様な恐しい戦ひの中に唯一の助けとなるべき弟は、妻の病氣の爲にモスコウを一日も去ることが出来なかつた。彼も借金に借金を重ねてゐた。フィオドルは病氣を冒して書き、妻を看護し、其上ひどく困つてゐたので金策に奔走しなければならなかつた。マリア、ドミトリエヴナの病氣はだん／＼と悪くなつてゐて、助かる見込は逆もなかつた。フィオドルも他目に見てゐられないやうに苦しんだ。病人の咳、苦み、呻吟で彼の神経は恐しくいら立つて了つた。遂々最後の時は來た。『昨日マリア、ドミトリエヴナは最後の發作を起しました。』と彼は兄に書いた。『血は喉から迸つて、彼女の胸をいつばいにいたしました。それで呼吸困難を起したのです。我々皆は終りが近いのを期待し彼女の傍に行きました。彼女は皆にさよならと言つて、罪を許してくれるやうに願ひ、遺言を致しました。彼女は私にあなたの家族の幸福を祈つてゐると言ふ傳言を願ひました。殊にエミレイ、フィオドロヴナに宜しく言つてくれと言ひました。彼女はあなたと仲直りをしたいことを洩しました。(彼女はあなたがひそかに彼女の敵であると信じてゐた



のです。彼女は苦しい夜を明しました。アレクサンドル、バヴロヰツチは今日たつた今言ひました。彼女は今日死ぬだらうと。もう疑ひないことです。私は金を貸してくれるやう叔母の家へ行きました。然し彼女も金がないらしいから断るかも知れません。私は如何していいか解らない。どうぞ後生だから、私を捨て、下さるな。費用はかさみませう。凡ての爲に出来る丈送つて下さい。」斯かる貧困の中に、夫の二週間の手あつき看護をうけて、彼の妻は靜かに十分の意識を以て、遠くにゐる子供のポオルを祝福し乍ら四月十六日死んだ。遂々ドストイエフスキイをヒステリーの發作と病氣とで苦めた彼女は死んだ。『彼女は私を無限に愛してゐた。私も同じやうに愛してゐた。然し、二人の生活は幸福ではなかつた。』と彼はヴランゲル男爵にかいた、『あなたに會つてから、すつかり話させよう。彼女の性格が異常でヒポコンドリーの、病的に空想的であつたから、一所にゐて不仕合せであつたけれども私達は互に愛し合ふことを止めることが出来なかつた。我々が不幸であればある程益々我々はお互に結びついたので。如何に奇しく見えやうとも。斯う云ふ風だつたのです。彼女は私の一生の中で見た女の中で最も正直な高貴な寛大な女だつた。彼女が死ぬ時、私は一年の間彼女が死ぬ苦みを見てゐたのです。私は彼女と共に納棺する物を殆ど知らなかつたが、人々が愈々彼女を土中に葬る時となる

と、如何に我生涯が空虚で悲しかつたかを想像することも出来なくなりました。』ドストイエフスキイの不幸は之に止らなかつた。彼は妻の埋葬を終へ、漸く自由となつて、兄を助ける爲に、モスコウからペテルスブルグへと駆けつけたが、既に多くの借金と過度の苦勞とを小い肩に背負つた兄のミハイルは心身ともに衰弱してゐた。多くの家族を養ひ、弟を補助し勵まし、博愛と忍耐と勇氣との化身たる天使のやうな兄ミハイルも、今は力を失ひ、人生の烈しい戦ひの爲に、刀は折れ、矢は盡きた。彼は病氣になつて一月の間床に就いてゐた。凡ての人は餘り重い病氣だとは思はなかつたが、突然病革まつて三日間苦み乍ら六月十日に死んだ。彼の兄は常々言つてゐた『播種者が、自分の家にパンがなくなつても種をまくことを企てるならば、自分の家族のパンを奪つて、其を地中に投げこんだことを後悔してはいけない。あなたがさうしなければならぬと思ふやうにしなさい。何故と言つてさうしなければ何にも生へて來ず、收穫はなくなるでせうから、』と言つてゐたが、今彼は、種をまいてその收穫を得ない中に倒れて了つた。彼は弱い人のやうに見えたが、その性格の中に無限の強さをもつてゐた。彼は恰も天才たる弟を父のやうに母のやうに、慈愛を以て保護する爲に生れて來た人のやうであつた。然し、偉大な人格者の彼も遂に倒れた。『斯うして私は突然一人ぼつちとなりました。』とドスト

イエフスキイはヴランゲルに書いた、「そして、私は恐怖を感じました恐しくなりました。私の生涯は二つに割れました。一つは此等の凡ての人々の爲に生きて来た私の過去で、他の一つは私には此等の死んだ二人の人に代るべき人は一人もゐない未知のものです。全く私には生活すべき理由がなくなつたのです。新しい係累を作つたり、新生涯を始めるなんて、斯う考へた丈でも私は恐しい。そこで始めて彼等に代るべきものは私にはなかつたこと、此世で彼等のみ私が愛したこと、新しい愛は今後起らないのみならず起る筈がないことを感じました。私の周囲は凡て冷たい砂漠となりました。」

彼は落膽した。或時は彼の父ともなつて彼を助け、或時は親友となつて彼を勵まし、彼の爲にあらゆる犠牲を惜まなかつた兄が突然死んで了つた。或人は、フィオドルが兄に始終金を送つてくれと言つて、兄を苛め殺したのだとドストイェフスキイを責めた。彼は其を聞いて苦しんだ。其上、彼の友の或者は友情を裏切るものもあつた。又一所に雑誌を經營して一生懸命に彼等兄弟を助けて来た親友のグリゴリエフも十二月に死んだ。彼はぼんやりして了つて如何していゝか解らなかつた。兄の三百年ルウブルの遺産は葬式の爲に使つて了ひ、雑誌の爲に兄が残した二萬五千留の借金は彼の負擔となり其上に兄の寡婦と孤兒達は一文もないので、乞食のやうになつて弟に頼つて来た。彼は其を見てゐる

に忍びなかつた。今は只二つの道があるのみであつた。斷然雑誌をやめて凡ての動産を債權者に引渡し、文學のみを書いて兄の家族を養ふか、或は更に借金して雑誌を何處までも繼續して行くかであつた。第一の方法を取れば限定相續法に従つて、家族は借金を負ふ必要はなかつた。彼は然し長年、兄や其他の親友と共に計營して来た雑誌に名残が惜まれた上に、死んだ兄の名をかゝる方法で汚したくないと思つたので、第二の方法を取り、雑誌を繼續してゆくことに極めた。「これで私は全生涯朝から晩まで働くのを甘んじたら、彼等を養つて行けるだらう。」と彼は此時言つてゐる。彼は一八六五年四月モスコウへ行つて、金持の叔母から遺言を貰ふ筈になつてゐる一萬留を借りて、再びペテルスブルグへやつて来た。然し、雑誌を發行する爲に検閲官の許可を得るのに二ヶ月もかゝつたので、六月の雑誌が八月に出る始末なので講讀者は怒つて了つた。彼は三ヶ所の活版所で印刷させ、彼一人で校正を見たり、寄稿者や検閲官との交渉に當つたり、論文を訂正したり、金の心配をしたり、朝の六時から夜まで立ち續けで働いた。彼は五時間しか眠らないで、凡ての健康も精力も財産も雑誌の爲に消費して了つた。彼は創作をすることも出来なければ、文章一つ書く暇もなかつた、只、「非常事件」と言ふ短篇を一つ書いて載せたに過ぎなかつた。此作は、シベリアに流された自由主義者チエルニシエフス

キイを擲論したもので、主人公の罅に飲まれたことはシベリア流刑を諷示したものだとの噂が高く、彼がそんな悪意はないのに誤解されて、さらでも非難の多かつた彼は反對者から非常に攻撃された。然し其は冤罪であつた。ドストイェフスキイはチエルニシエフスキイとは一二度會つた丈で怨も何もなかつた。以前から「エボカ」誌は自由主義者から反感を以て憎視せられて居つたので、「民衆」だの「土地」だの、「組織的生活」だの獨立的の土地生活だのとドストイェフスキイが書く毎に人々は嘲弄し始めた。此頃は丁度農奴解放が許された最初で、病的な空氣がロシアに充滿し、自由主義者、社會主義者の鼻息が最も荒く、極端な虛無主義さへも屢々出た時代であつた。ドストイェフスキイは彼等の思想が抽象的であつて、善悪、利害、健全不健全の概念の區別を知らないことを反駁し、土地と民衆とを無視した自由は人間を徒らに根こぎにするものなることを説いて批難した。彼は自由主義者の思想は佛蘭西の社會主義的思想の淺薄な模倣であつて、ロシアの民衆、歴史、土地から出たものではないから却つて人間を害するものである、かゝることを止めて、我々は眞のロシア人とならなければならぬと宣言した。彼はロシア及ロシア人を徒らに排斥し批難する自由主義者の誤りを解いて、彼等がロシアを憎める故に批評する價值のない人間であると言つた。「我々が眞正のロシア人とならない以上は、我

々の社會に少しの進歩もないことを吾人は信じてゐる。さて、眞正のロシア人たる特徴はロシアに、嘲り難じ罪すべからざるもの、愛さざるべからざるものあるを知ることである。」と彼は發刊の辭に書いた。「これこそ眞正のロシア人の知る必要あるものである。實際、愛することの出来るもの、ロシアに愛すべきものあるを正しく知るものこそ、また批難すべきものあるを知つてゐるのである。彼こそ他の者より一層よく有益なる言葉を發するのを知つてゐるのである。偽の批難者よりも一層理解ある方法にて、また一層有益に知つてゐるのである。」そして、彼は眞理と信仰とによつて、民族の力を健全に發達せしめ、科學をして半面のみ眞理たらしめず、此進歩を害するやうなことなからしめる國民生活の獨立を主張した。此獨之こそ、我等の力の創造と活動とを發達せしむるものであつて、長年月の束縛から解放さるゝ道であることを力説した。彼は實に最近のモオリス、パレスの愛國思想の先驅者であつた。更に、彼は社會主義自由主義が科學のみに根據を置き、智識理性のみを尊んでゐるのを攻撃した。「一箇國と雖も嘗て智識や理性の中に立てられなかつた。」と後年「惡靈」の中でシャトフの口を藉りて言つた。「須臾にして亡びた愚かなものを外にしては嘗て世にそんな例はなかつた。社會主義はその性質よりして無神論たるを免れない。出發點から、それが社會の無神論的組織だの、専ら

智識と理性との基礎の上に立てらるべきものだと主張してゐるのでも解かる。智識や理性は有史以來、國民の生命としては、只二次の從屬的な役目を演ずるに止つた。又永久にさうあるべき筈である。國民はまるつきり違つた力により、彼等を支配し統御する力によつて打建てられ動かされてゐるのだ。其力の出所は未だ知られても説明されてもゐない。其は究極に達しやうとする、同時に究極を避けやうとする厭くなき慾望の力である。自己の存在の絶えざる肯定であつて、又死の否定である。其は生命の魂である。聖書に所謂「生命の河」である。……理性は決して善惡を決定する、否、區別する力さへ持たない。それ所か始終其等の物を不名譽な哀れな手段で混合して來たものだ。科學は拳骨で其解決を與へさせやうとした。此が科學の半真理の特徴である。此世紀まで知られなかつた人類の恐しい鞭である。疫病よりも饑飢よりも、はた戦争よりも恐しい鞭である。半真理は此世界になかつたやうな専制君主である。凡ての人が未曾有の愛と迷信とを以て服従する専制君主である。」

其頃ロシアに充滿してゐた自由主義者、社會主義者、虛無主義者其他多少政府に反感を有してゐるものは、かゝる反駁と批難の聲を聞いて如何して復讐せずにはゐられやう。彼等は、大勢よつて集つてあらゆる攻撃、惡罵、凌辱を敢てした。彼等はエポカの記者達を政府の阿諛者だ、警官の職を努める

三文文士だ、溝浚ひだなどゝ罵り嘲つて、勢力のない雑誌を苛めた。兄のミハイルもかゝる侮辱を受けて死んだのであるが、フィオドルも亦其以上の侮辱と迫害とを受けなければならなかつた。先きに政府が不當な發行禁止をして、ドストイェフスキイは政府の敵となつたが、今度は彼は政府の敵の敵ともなつたのである。今や全ロシアを舉げてドストイェフスキイを批難の的とした。彼は政府からは先の革命主義言で社會主義であると見做され、自由主義者から政府の探偵である、犬であると見做された。彼は此挾撃を受けて惡戦苦闘をし、遂に進退全く谷まつて了つた。そして、借金は益々殖え、讀者は益々減つた。債権者はしつきりなしに借金を拂ふやうに督促をした。彼は夜も晝も寧日がなかつた。

ドストイェフスキイは健康を害して神経を悩した。持病の癲癇の外にひどい熱と戦慄が起つて苦しんでゐた。彼は轉地療養の爲め外國へ再三逃げるやうにして行つた。此年の秋、彼は再び并エスバアデンに行つたが、此處で又亂れた神経の發作と絶望の苦から、球戯の賭博をして、今度は散々に負けて多くもない金を無くして了つた。此頃ヴランゲル男爵は、丁抹の公使の秘書官としてコウベンハーゲンに駐在してゐたが、ドストイェフスキイは男爵に窮狀を訴へて救ひを求めた。ヴランゲル男爵は

盛んに賭博の行はれてゐるシベリアにゐた時でさへ、ドストイェフスキイが之に眼もくれなかつたことを知つてゐるので、今更乍ら驚いたが、早速金を送つてやり、そしてコオベンハアゲンに一度訪ねてくるやうに言つてやつた。十月一日ドストイェフスキイは瘦せた青い顔をしてやつて来た。彼はヴランデル男爵の家族、即ち夫婦と二人の子供と仲よく暮して其處に一週間滞在した。彼は十一月ロシアに歸つて借金を返す爲に著作権を二年間出版者ステロフスキイに賣つた。小説「罪と罰」を書き始めたのは此頃からである。

## 十一 失戀と結婚

アンナ、コプレスカヤに對する戀——ソオニヤ、コプレスカヤの追想——「罪と罰」——アンナ、グリゴリエツナとの結婚——債權者の脅威——外國に逃亡

コプレスキイ將軍の姉妹アンナが小説を書いて、田舎からドストイェフスキイにエポカ誌へ載せてくれと言つて来たのは此頃であつた。彼女の處女作は割合に評判がよかつたので、彼女は第二の短篇を書いて又載せて貰つた。此時ドストイェフスキイのアンナに送つた手紙がコプレスキイ將軍の手に落ちたので、騒動が持ち上つた。昔のシベリア流刑囚が、上流社會の堅氣な娘と手紙の往來をしてゐると言ふので、コプレスキイ將軍夫妻は非常に心配した。此頃、ドストイェフスキイは「死人の家」以後から漸く認められ、また、「罪と罰」をルスキイ、并エストニク誌に連載し始めてゐたので、彼の名声は次第に高まらんとして居た。コプレスキイ姉妹は彼の崇拜者であつた。一八六六年の始頃、コプレスキイ將軍は一家族を連れて田舎からベテルスブルグへ來ることゝなつたが、姉のアンナは早くも之

を利用して、尊敬してゐるがまだ一度も會はないドストイェフスキイに會ひたいと思つた。彼女は何時何日に訪ねて来てくれと言つてやつた。妹のソオニヤは其頃まだ小さい少女であつたが、姉と一所に此大作家の來るのを一日千秋の思ひで待ちわびた。然し、彼女達の父は其を知つて不安に堪へなかつたので、出掛ける時に夫人にくれぐれも間違のないやうによく注意をしてくれと再三言つた。夫人は一時もアンナの傍を離れないやうにするやうに安心してくれと答へた。そして、ドストイェフスキイが來た時は、二人の獨逸人の叔母を娘の監督につけておいた。アンナは之を知つて、辱しめられたやうに厭に思つた。ドストイェフスキイも之を見て不快に思つて碌に話もしなかつた。彼は氣分が悪いと見えて髪をいぢつたり、髯を嚙んだり、恐しげな顔をしてゐた。アンナの母は此間に立つて交際社會の常套手段たる空々しい笑を浮べたりお世辭を言つたりして座を引き立てやうとしたが駄目であつた。第一の會見は失敗に終つて、ドストイェフスキイは皆と握手もせず三十分で立ち去つて了つた。數日の後彼は再びアンナを訪ねた。此度は母も叔母も出掛けて留守で、家にはアンナ姉妹丈だつたので、二人の男女は忽ち親友の如くに親しくなつて、手を取り合ひ乍ら、冗談を言つたり、笑つたりして、面白く時を過した。妹のソオニヤは最初に會つた時非常に老けて見えたドストイ

エフスキイが、今度は非常に若く見えたのに驚いた。「彼は本當に四十三歳であらうか」と彼女は思つた。「彼が私より三倍年も年取つて居りアニウタ（アンナチ愛稱）よりも二倍も年取つてゐると言ふのは本當であらうか。人々は彼がえらい作家であると言つてゐるのに、こんなに親しい友の如く話が出来るなんて。」所が突然彼女達の母が歸つて來て此有様を見て驚いて了つた。然し二人の姉妹が辯解に努めたので母も後には心を打ち解けて迎へるやうになつた。之からドストイェフスキイは公然交を結び毎日のやうに往來し、彼は自分の小説のこと。過去の生涯や彼の病氣のことなどを凡て打ち明けて話した。彼の話は興に乗つて來るに従つて雄辯となり、寫實が生きてくるので、或時夢中になつて小説の筋を話し、十歳の少女に對して男が暴力を用ひやうとする所までくると、將軍夫人は全く動顯して了つて、「フイオドルさん、どうぞ後生です、娘達が聞いてゐるのですから、」と言つて止めた。然し、此交際は短かつた。將軍の一家族は愈々ベテルスブルグから田舎へ歸らうとして、お別れの晩餐會を催うした。將軍夫人はドストイェフスキイを招待した。彼女は彼の斷るのを無理強ひに納得させた。ドストイェフスキイは貧窮なのを無理に都合して禮服を着て來た。燕尾服は彼の身體としつくり合つてゐなかつた。彼はこんな言に出て見知らぬ人と交際ふのを嫌つて厭な顔をしてゐた。彼はアンナ

を愛してゐたので、間もなく彼女との別離が来るのを悲しんでゐた。それで、彼女と別れを惜んで、大勢の客のゐる前を構はず、彼女の傍にばかり連いて行つて、其手をなつかしげに取つたり、小聲で耳に囁いだりした。アンナも將軍夫人も客の前を憚つて當惑して了つた。そして、母は娘をドストイエフスキイの傍から引き離さうとすると、「少し待つて下さい。未だ話があるんです」と彼はアンナの行くのを止めた。コヴレスキイ夫人は怒つて言つた、「フィオドルさん、どうぞ御免下さい、彼女は家の娘として他のお客様を接待しなければなりません。」ドストイエフスキイも怒つて了つて隅の方に引込んで行つた。暫く經つてアンナは遠い親戚に當る若い美しい獨逸の士官と親しげに話して笑つてゐた。ドストイエフスキイは之を見て腹を立て、了つた。彼は彼女の父母がアンナの嫌がるのを無理に此男と結婚させやうとしてゐるのだと思ひ込んだ。そして、將軍夫人が聖書や新教の話をして、新教は正教に比してもつと聖書に一致してゐる所があるなど、言つてゐるのを聞くと、ドストイエフスキイは黙つて聞いてゐる譯に行かなくなつた。「一體聖書は流行を追ふ貴婦人の爲に作られたものなのですか、」と突然彼は口を出した。「聖書の中にはそんな事でなく斯う言ふことが書かれて居ります、神は彼等を男と女とになさしめ給へり、」また、「其故に女は父母を見捨て、夫の下に入るなり、」と。是がキリ

ストの結婚に對する考へです。最も利益のある所に娘を片づけて了はうとのみ考へてゐる多くの母親達が、其に就てよく考へて見なければなりません。一座の客は皆驚いて了つた。其日からコヴレスキイ一家の者は妹娘のソオニヤを除いて皆彼を嫌ひ出した。今迄彼を崇拜してゐたアンナは俄に冷酷になつて、ドストイエフスキイが最も美しい天才的の啓示を言つても其を理解することが出来ないやうになつた。然るに小さい妹のソオニヤはひそかにドストイエフスキイを戀して、彼が姉とのみ話をするのを羨ましく思つたので一生懸命に努力してよく彼の言ふことを理解してゐた。ドストイエフスキイは姉のアンナが自分に冷淡になつたのをひどく苦にしていらゝした。「あなたのお妹さんはあなたと大違ひですね。未だほんのねんねだが、驚く程私の言ふことを理解してゐるぢやありませんか。ほんとに微妙な感受性のある人です、」と彼はアンナと喧嘩して妹をほめるのを常としたが、ソオニヤが彼を戀してゐるとは少しも知らなかつた、可憐な彼女は小さい胸を嫉妬の炎に燭してゐるので、ドストイエフスキイが姉と喧嘩をするのを見て却つてひそかな喜びを感じた。ドストイエフスキイは最後にアンナ、コヴレスカヤに結婚の申込をして拒絶されたが、然し、別れる時は寧ろ仲よく互に忘れな

いで交通をすることを約束した。彼は小さいソオニヤが初戀に心を苦めてゐるのも知らずに、彼女の未

來の幸福を祈り、彼女を接吻して別れた。以上は後年ソオニヤ、コヅレスカヤの物語る所である。

一八六五年の末から翌年まで「罪と罰」はルスキイ、井エストニク誌に連載された。災厄と貧困と疾病と失戀の苦しみを極めて、彼は、執念深い迄に人生に對する愛を以て努力した。創作は詩的の作物です、と彼は嘆いて書いた。『其は精神と想像の安靜を要します。然るに私は牢獄に入れやうと脅かしてゐる債權者に苦められてゐるのです。』兄の遺族に對する補助の苦勞、癲癩の外に新たに加つた熱病、絶えず脅迫してゐる債權者の督促の中に、彼は幾度も此小説を書き改めた。ソオニヤとラスコルニコフとが共に聖書を讀む所は虛無主義的で不道德であると言はれて、當局者から彼は書き直させられたこともあつた。彼は誤解され迫害された。彼は「虐げられ辱しめられし人々」の中に一つの小説を二日二晩で書き上げたり、期限を切つて前借をして郵便馬の様に働いたりしてゐること、又後には小説の巻首の方は既に印刷されてゐるのに其結末の方はまだ頭にこびりついてゐて、然も次の日までに原稿を渡してやらねばならぬやうな事が随分あると告白してゐる。然し、こんな事をして、彼は藝術的良心を決して失はなかつた。彼は期限が短ければ短い苦心をして徹夜して、書き上げた。彼は何遍となく同じ小説を書き改めた。之が爲に彼の精力は消耗し、苦惱が盡きる時が無かつた。斯かる

創作の苦みを嘗めても、五年十年に只一つの小説しか書かない底の作家と比較して彼は自分の良心に對して絶えず恥ぢてゐた。もつと自由で物質上の心配がなかつたならば、今迄書いたよりも、もつと美しい大きいものが出来るに違ひないと深く信じて、自分の忙しい境遇を悔いてゐた。彼はそれ程苦心してもまだ苦心が足りないと思つてゐたのだ。

「罪と罰」の如き傑作が斯かる極度の貧苦の中に出来たことは驚くべきことである。斯かる大作を通じて一字一句も苟しくもせず、細心の注意と藝術的良心が隅まで注がれてゐることは更に驚くべきことである。「罪と罰」は恐ろしい迄に深酷に犯罪の心理を描いた小説である。鋭い眼を以て、大都會の秘密を探つたのみならず、暗黒、秘密、罪惡を通じて、其中から暖かい光と愛とを汲み出すのを忘れなかつた。彼は聖人の心を理解してゐたと同じく、惡魔の心をも理解してゐた。信仰と不信仰、罪惡と純潔、光明と暗黒の兩方面を同じく洞察してゐた。實に彼は偉大なる靈の洞觀者たるのみならず、偉大なる肉の洞觀者でもあつた。主人公ラスコルニコフは後年の作、「馮かれし人々」のキリロフの如く、信仰を失つて、人神即ち超人に憧れてゐた人物である、彼はリカルガス、ソロン、モハメツト及ナポレオン等の人類の立法者、非凡人が、人類に恩惠をほどこさんとする目的を以て、傳習を破壊し



幾多の血を瀧のやうに流し罪惡を犯したことを是認するのみならず、彼自身も斯かる人類の立法者組織者たらんとするのである。彼は人間を凡人と非凡人との二種に分類し、凡人は非凡人の法律に柔順に服従し、種の繼續の役目をつとむるのみであり、非凡人にあつては、其天才と力とを以て改善の名の下に破壊殺戮を事としても、法律を超越する事が出来るものである。凡人は法律を犯せば直ちに残酷な刑罰をうくるが、非凡人は之を犯しても刑罰以外に超越してゐる。前者は世界を保存し、其數を増加する。後者は世界を動かし、其目的に導いてゆく。斯くして非凡人の手によつて未來に於て新しいエルサレムが建設されんとするのである。ラスコルニコフ自身も亦かゝる人類の完成者となる爲に、進歩の障礙となるべき人間を取り除いても差支へないと思つてゐた。斯くして、無數の貧民の零落と饑餓とを利用して暴利を貪り、其爲に因業と残酷の手段を辭さぬ利己的な金貨婆を彼は殺し、偶然其場に來合せた其妹をも殺して了ふのである。此殺す所は物凄い程深酷にうつされ、讀者は犯罪者の一舉一動に、胸の動悸の高まるのを禁じ得ない。然し、ラスコルニコフは誤つてゐた。彼は殺人を犯してから、日夜懊惱と苛責と神經とに苦められる。哀れなる彼は全人類の幸福を圖らうとして却つて自分の主義を殺して了つたのである。彼は幾度か自首をしようとしたが、其を果すことが出来な

つた。彼は斯かる煩悶と苦痛の中にも、生來の不幸な貧しい人々を救ふと言ふ考へを止めることが出来ない。彼は父の飲酒の爲に零したマルメラアドフ一家を乏しい中から助ける。此の父の爲に淫賣婦と迄なつて凡ての犠牲を捧げてゐる娘のソオニヤに無限の同情をよせる。又、彼は自分の妹ドウニヤが彼の身を心配するの餘り、愛してもゐないルウシンと言ふ男と結婚をして、兄を助けやうとしてゐるのを知つて苦しむ、「よしやルウシンが交りつけなしの金塊か、又は只一つの金剛石で出来てゐやうとも、彼女はルウシンの法律上の妾に甘んじてなる譯がない。其に何故彼女は承諾したか。其解答は何處にあるか、謎の鍵は何處にあるか、事實は明瞭だ——彼女は自分の爲、自分の安樂の爲には、又死から免れやう爲にも、自分の身を賣りはしない、然し他人の爲には身を賣る、愛するもの、崇拜する者の爲には身を賣る。之ですつかり謎は解ける。兄の爲母の爲ならば彼女は身を賣る、何でも賣るのだ、おゝ、其爲に止むを得ぬ場合には道德的の感情を殺して、自分の自由も安息も、のみならず良心まで、あらゆる持物を古物市に持ち出すのを辭せぬ。其愛する者が幸福になりさへすれば、生命だつて惜みはしないのだ。……ドウニヤよ、ソオニヤの運命が、ルウシン氏に身を任せるお前の運命よりも少しも惡くないことをお前は知つるか！「愛情があつての譯ではなく」と、母さんは手紙に

書いてゐる。どうだ、愛の外に尊敬は存在しないから、否其反對に嫌惡輕蔑嘔吐の念が早くも起つたら如何する。其上結果は同じことで、矢張り身だしなみに注意する必要が起つてくるのだ……ルシン夫の身だしなみはソオニヤの其こと同じことなのが解るかい、否、其より一層悪い卑しい汚い事かも知れない。……俺はお前の犠牲を望まない。……俺の生きてゐる限りは許しておけぬ。駄目だ、俺は承知しない。』斯くして彼はわざと妹とルウシンの結婚を破るのである。彼には斯かる卑劣な結婚より、寧ろ一家の爲に犠牲となつて淫賣婦にまで下つたソオニヤの境遇の方が望ましく思はれたのである。彼はソオニヤが是程汚れた恥辱を引すり、死か狂か此二つしか取るべき道がないやうなひどい境遇にゐながら、純潔な美しい感情を少しも失つてゐず、神を厭くまで信じてゐるのに驚いた。彼は彼女が賣淫と言ふ恥辱に只機械的に觸れてゐるに過ぎず、眞の賣淫は一滴も彼女の胸を犯してゐないのを見た。そして、彼は犯人のやうに彼女の足許に身を伏して其足に接吻し乍ら、『私にはあなたの前にひれ伏したのではないのです、全人類の苦みの前にですよ、』と言ふのである。歪んで消えかゝつた燭臺の下に、此呪はれた殺人犯は不幸なる此淫賣婦に聖書の中の「ラザロの復活」を讀んで貰ふ。彼はソオニヤの前に凡ての罪を告白して了ふ。遂に彼は自分がナボレオンではなく、人を殺

す権利のない人間であることを自覺する。彼は全く惡魔に魅られた人間であつた。彼は生きてゐて害のある虱を殺したつもりであつたが、彼自身も亦かゝる虱となつた。彼が殺したのはかの強慾な金貸婆ではなかつた。彼が殺したのは實に彼自身であつたのだ。人殺しをすることによつて彼は永久に自分自身を打ち殺して了つた。然も、尙彼は普通の金錢や情慾の爲に人を殺した犯罪人とは比較すべからざる程自分の價値が違ふことを信じて、厭くまでも世の中の敵と戦ひ障碍と戦ひ、自分が眞に非凡人であつたか如何かを試さうとする。ソオニヤは之に反對して悔悟と自白をすゝめる。『直ぐこれから表の四辻にいらつしやつて、かゞんで地面にキスをなさいまし。あなたを恥しめた地面を、これから四方に向つてお辭儀をなすつて、『私は人殺しです、』と大きな聲で仰います。さうすれば屹度神様はあなたのお命をお助け下さいます。さあ、お出でになりますか、お出でになりますか。』斯うすゝめて、男を愛してゐる彼女自身も亦犠牲となつてシベリアに行かんとする。彼女はひどい卑しい汚辱の淵に沈淪しても、決して信仰を失はず、却つて益々熱狂的に神を愛し、敬虔の心を深くして行つた。そこに、彼女が罪惡と自殺から救はれた道があるのである。然るに、ラスコルニコフは、神に見離された惡鬼に馮かれた人であつた。彼は彼女の言葉をきいて、心の中に彼女の深い大きな愛が滴り、其が、

重く重く胸を壓しつけるのを感じた。彼は爆烈弾を投げたり、暗殺したり、戦争したりして、血を瀧のやうに流したナポレオンが罪人でなく、自分のみ罪人だとは如何しても信ずることが出来なかつた。然し、解らない或物が、自首して出ると言ふ聲を彼は胸にきく。彼は最後に妹のドウニヤに會つて、「自分は例へ殺人罪を犯しても一生を勇ましく正直に送るつもりだ」と言ひ残して、ソオニヤのすゝめたやうに、人の澤山ある四辻の地面に接吻し、それから自首して出る。彼はシベリアに流刑される。ソオニヤも亦彼の後を追ひ苦痛を共にする。

「罪と罰」は深さの圖り知られざる大なる悲劇である。若しもトルストイの傑作を雲霧に隠れて頂きの見えない山嶽とすれば、ドストイェフスキの傑作は殆ど人力を以て底を探る能はざる深淵である。トルストイの大なる健全の力に反して、彼は大なる病的な力である。彼は微細な心理の推移、連続した神経の苦悶、渦巻のやうな都會の生活、肉體に隠れた靈魂の秘密を比類なき深酷と透徹を以て描いてゐる。彼は神と惡魔の戰場たる人間の心を、暗い光を透する潛勢的な愛を以て描き出した。其處には愛と憎みと怒りと喜びと悲しみとあらゆる人間の情の慄動を見出すことが出来る。ドストイェフスキイは、此作に於て人類の最終の目的に達せんとする人々の苦悶とを語り、更に此矛盾と撞着に満ちた

過渡時代を去つて、運命の秘密な謎に肉迫せんとしてゐる。彼は實に全人類の苦みを描いたのである。彼はラスコルニコフなる人物を借りて、超人の思想を表はし、ニイチエの先驅者となつたのみならず一方に深い神に對する信仰を以て、人々の心をうるほしたのである。彼は信仰を説かなかつた。然し至る所に暗示と直覺と以て、神に對する敬虔な愛と信仰とが溢れてゐる。彼はニイチエの如く、自ら人間たらんとしては人類の幸福を求むることが出来ず、神及び民衆を愛することによつてのみ、其を得られることを暗示してゐる。

斯くドストイェフスキイは「罪と罰」を書いて、借金の一部を返済したが、兄から受け継いだ山のやうにある借金を如何ともすることが出来なかつた。債権者は益々烈しく迫つて来て、絶えず牢獄の中へ打ち込むと脅かす。其上病氣は頻々と起り、四方八方からの攻撃で遂に雑誌の讀者は減る一方で、損益の平均が取れず、時間と精力とをあれ程に浪費した雑誌を廢刊しなければならぬの止むなきに至つた。彼は破産し、豫約購讀者に對する負債の外に抵當借財一萬留、信用借財五千留の負債が出来た。彼の苦みは漸く極度に達した。

債権者は益々烈しく督促を始めて、彼を創作も出来ない程苦しめた。彼は冬の間一度も芝居へも行

かす何人とも會はず働いてばかりゐたが、それでも冬を過すことは難しい位であつた。「あゝ友よそれで負債を拂つて了つて、再び自由の身となれるものなら、私は喜んでもう一度あれ位の年月監獄へ這入つてもいい位です。」と彼はヴランゲル男爵に書いた。「私は目下答の下にあつて、困苦の爲に急いで或小説を書き始めなければなりません。力と精力とが全く私に残つてゐないので、自分の心中には只絶望に近い暗い苛々した心持がある丈です。此苛々しと憂愁と重い心配と凡ての異常な事が私の上に押しかゝつてくるのです。そればかりではない。私は孤獨です。四十年の過去も自分に取つては死も同様です。」

彼は「罪と罰」を終つて、先に計畫したことのある「賭博者」を書き始めた。彼は先きにステロフスキイと言ふ出版者に三千ルブルを借りて、借金の一部を返へし、その爲め二年間今迄の作の著作権を賣り、更に十帖の新らしい小説を書いて與へることを約したが、期限が來ても此小説を一行も書けなかつた。ステロフスキイはドストイェフスキイに對して督促をし、到底彼が約束を守れないのを見て牢獄へ入れると脅かした。此時の模様をミリウコフが「追想」の中で物語つてゐる。一八六六年十月一日彼がモスコウからやつて來たばかりのドストイェフスキイと會ふと、ドストイェフスキイは非常に

困つた顔をして煙草をふかし乍ら室の中を大股で歩いてゐた。それはステロフスキイに約束した小説の期限が一ヶ月しかない時であつた。ミリウコフは、小説のプランが立つてゐるのだから、それを友達に話して、皆で代作したらよからうと言ふと、彼は、「否、私は決して他人の作に自分の名を署名しない」ときつぱりと答へた。それでは、速記者を雇つて、大急ぎで書かせたらよからうと言ふと、彼は速記者を雇つたことがないから、周薦してくれと言つた。それで、ミリウコフは知人に頼んで女速記者アンナ、グリゴリエヴナ、スニトキナを送つて貰つた。十月四日から同月三十日までかゝつて、「賭博者」を速記して書き上げ、ステロフスキイに送つたが彼が、不在だったので、危くドストイェフスキイは、契約によつて、未來の全著作をステロフスキイに奪はれる所であつた。然し、速記者のアンナが、氣を利かして、それを警察へ持つゆき、月日のついた受取證を貰つて、證明をして貰つたので、漸く危きを免れたのであつた。

ドストイェフスキイとアンナ、グリゴリエヴナは斯くして知合ひとなり、互に理解し合ふやうになり、愛し合ふやうになつた。ドストイェフスキイは、彼女に、財政上の苦痛や自分の不治の病氣を打ち明けて、結婚を申出た。アンナは二十二歳のうら若い娘であつた。彼女はドストイェフスキイの

苦しみを察し、彼を慰め、其の申出でを承諾した。一八六七年二月十五日、迫害と貧窮と苦痛の中を切りぬけて、ドストイェフスキイは、アンナと、イスマイロフスキイの三位一體大寺院で、結婚式を挙げた。彼女の愛と總明な性格は、ドストイェフスキイの淋しさを慰やした。アンナは、家政のうまい愛らしい妻で、夫の天才の崇拜者であつた。後年彼が生れて始めて財政上の整理を得て、物質的苦痛を免れたのは、全く利巧な妻の御陰であつた。彼の最初の結婚の不幸であつたのに反して、第二の結婚は幸福であつた。後に四人の子供を設けたが、二人は不幸にも夭死した。

結婚後二ヶ月、債権者達の追窮が益々急になり、訴訟を起し、牢に入れると脅かして、ステロフスキイ等の脅迫烈しく、遂々巡査が彼を捕縛せんとしてやつて來たので、彼は新婚の妻を連れて、ロシアを逃げて外國へ亡命しなければならなかつた。然し彼の名聲は本國に於て次第に高まりつゝあつた。一部に於ける「罪と罰」の影響は凄じいものであつた。モスコオに於ける學生は此小説の主人公を模倣して、同じやうな高利貸を殺したとさへ傳へられてゐる。明にかゝる行爲はドストイェフスキイの主義と反してゐたが、當時のロシアの社會状態は動搖して病的であつた爲に、青年學生にドストイェフスキイの眞意を誤解したものが多かつた。然し、彼は「二重人格」以後、長い間失つた名聲を今になつ

て漸く恢復しつゝあつたのである。

## 十二 亡命の客

望郷の念——ツルゲネエフと再び衝突——妻アンナの賢明——再三賭博の失敗——「賭博者」——マイコ  
フと文通——長女の死——「白痴」

一八六七年四月十四日ドストイェフスキイは債鬼に追はれて居堪らず、ドレストデンへ逃げて行つた。そして其處で、二ヶ月を過した。こゝで彼は早くも倦怠を感じて、望郷の念に堪へ切れなかつた。そしてロシアの空を望んで、郷愁と愛情の切ない苦しさを感じた。彼は外國へ亡命客となつて來たものの、ロシアなしに生きることの出来ない人であつた。彼はどんなことをしても母國を離れて暮すことが出来なかつた。彼は骨の髓からロシア人であり、ロシアの土に深く根ざしてゐる人であつた。實際彼がロシア國及び民衆を斯くまで愛したのは、彼自身の抽象的な理論から來たのではなく、靈の最も深い内部から發した本能であつたのである。彼は八月、ジエネヴから、親友のマイコフにあつて、ロシア及びロシア人を愛してゐないツルゲネエフと爭論したことを述べてゐる、「私は彼が人を接吻

する貴族的な偽善的なやり方を忍ぶことは出来ません。そして、接吻されやうと頼べたをつき出すのです。彼は奇怪な風を裝うてゐます。然し、私の彼に對する最も烈しい不平は、彼の本の「煙」なのです、此本の重なる觀念・出發點は、「ロシアが地震によつて破壊せられ、地球から消えさるとしても、それは人類には何らの損害をも意味しないだらう。——それは注意をひきさへもしないであらう」と言ふことだと彼は自分で私に話しました。』

外國に長く住んで本國に歸らないツルゲネエフが、全くロシアに對する理解と愛を失つたことを彼は嘆いてゐた。またマイコフに宛てた此手紙の前に、彼は自分の痛切な苦みを書いてゐる、『如何して人は外國に生涯を送ることが出来やう。祖國に居らないと言ふことは——苦痛です。其は慥かです。其處で六ヶ月か一年位行つてゐるのは——差支へないが、然し、自分のやうに何日歸れるか解らないで行くのは、非常に悪いことで又苦しいことです。其う考へたばかりでも切ない。自分の仕事及び作物の爲に、私には露西亞國が必要です。(一般に生活の事は言はないとしても)非常に必要です。人間は水のない魚のやうになります。力も方法も失つて了ひます。』

かゝる望郷の苦みの上に、彼の癲癩は益々ひどくなつて、毎週缺かさず起るやうになつた。頭は

亂れ、神経は荒れ、理性はゆるぎ、物を感じることも意識することも出来ないやうな状態に陥ることが屢々であつた。彼は信仰を失ひ精神が死ぬのではないかと思つた。斯様な苦痛の中にあつて、彼の若い妻の態度は雄々しかつた。彼女は食物も十分でない貧苦の中にあつて、喜んで其苦みを共にした。彼女は夫よりも非常な年少で無経験であつたが、幼稚ではあるが熱烈な愛情を以て苦みを忍んだ。「實際、アンナ、グリゴクエヅナは私が判じ推してゐたよりも、もつと強く、もつと深い精神を表はしてゐます、ドストイェフスキイは又マイコウに書いた、そして、多くの場合に私を保護する天使でした。然り、同時に彼女には二十代に相應した多くの子供らしい性質、美くしい自ら必要な性質があります。然し、其に應ずべき力と能力を私は殆ど持ちません。これは私に出發した際に心を浮んだことです。繰り返して言ふが、アンナ、グリゴクエヅナは私が信じてゐたよりも一層強く善良です。けれども私は未だ氣分が落ちません。」

此マイコフに宛てた長い手紙にはまた彼が以前に失敗したのにもこりずに、賭博をして、再び大失敗をしたことが記されてゐる。「バアテンの直ぐ近くに来て、私は其處に宿らうと思ひました。ある魅するやうな考が私に着き纏ひました。十ルイ(百法の金貨)を捨て、多分二千法儲けるとすればベテ

ルスブルグにゐる人々(兄の遺族及繼子のポオルのこと)と共に四ヶ月生活が出来たらうと。嘗て私が儲けたことがあるから、其考は非常に強かつたのです。そして私の性質が卑劣で餘り熱し易かつたから最も悪るかつた。凡てのことに於て凡てのことに向つて、私は最後の制限を飛び越すのです。一生私は制限を飛び越して來たのです。斯様にして三日間の中は始め百法の金から四千法を儲けた。妻のアンナは之位にして止めて早速出發した方がよからうと思告した。然し、彼は行く所まで突込んで行かねば落ち着くことの出来ない人であつた。彼は自分が言つたやうに最後の制限を飛び越して了つた。金持の人々が二萬法三萬法と儲けるのを見て、切ばつまつて金を必要としてゐた彼は、兄の遺族及び繼子を養はん爲にもつと儲けたいと思つた。「私は其以上の危険を冒して負けて了ひました。私はこれつきりの財産も失つて了ひ、熱つくなつた程逆せて了ひました。私は失はれました。私は自分の着物を質に入れ、アンナ、グリゴクエヅナは彼女に屬してゐるものを凡べて最後の飾品まで質に入れました。(何と言ふ天使でせう。如何に彼女は私を慰めたこととせう。私は鍛冶屋の上の二つの小ぼけな室に引越さねばならぬやうになり、そこで如何に彼女は此咀ふべきバアデンの中で悲觀したことでせう。)もう澤山だ、凡ては失はれて了つた。(おゝ、何と言ふ獨逸は卑しい人間でせう。彼

等は皆例外なしに高利貸で卑劣人で詐偽者です。家主は私達が金を手に入れる迄は、今は何處へも行くことが出来ないことを知つて家賃を高くしました。さて、身を救ひ、バアデンを去らなければなりませんでした。私はまたカトコフに手紙を書き五百留を調達してくれるやうに願ひました。(此仕末を話さなかつたけれども、手紙がバアデンから行つたので彼は感づいたに違ひありません。)さて、彼は其を私達に送つてくれました。彼は送りました。そして之で前借として私はルスキイ、并エストユク社から四千留受け取つた譯です。』

彼が何故にかゝる卑しい賭博に手を出して、萬一を僥倖せんとしたかは此頃出版した「賭博者」を見れば詳細に其心理を窺ふことが出来る。又始終貧窮に苦んでゐた彼は、之によつて金を得て生活の苦みから逃れ、嫂の一家を助けんと言ふ考があつたのは、疑ひもなかつた。彼も言つてゐる、『私が始めに自分で定めた十ルイの金を失つたら、すぐにすつかり止めて、立ち去つて了つたのです。然し、四千フラン儲けたことが、私の身を亡ぼしました。それ以上儲けて、(非常に容易に儲けられたのですから)一度に凡ての紛擾を一掃し、私と私の凡ての家族、エミリイ、フィオドロヴナ、ボオルなどの生活を暫くの間保証しやうと言ふ誘惑に、抵抗する方法はなかつたのです。』

彼は苦みの餘り、賭博をした。然し、金を得て、生活難から逃れんとする誘惑の外に、誘惑がないではなかつた。その大きな誘惑者は彼の好奇心であつた。彼はいら／＼した神経といろ／＼な心配を一掃する爲に、此好奇心を満足して、遂に神経と狂氣との犠牲となつた。彼は何事にも制限を飛び越えて行く所まで行かねば氣が濟まなかつた。『赤』と賭博監督者は叫んだ。私は長い息をついた、そして、熱い戦慄が私の身體をめぐつてゐた。私は銀行手形で勝つた金を受取つた。其頭は勿論四千フロリン即八百ガルデンに上つてゐた。私は今でも其額を算へることが出来る、』と斯う彼は「賭博者」の中に書いてゐる。『其後私は二千フロリンを十二の半數にかけたと記憶するが、負けて了つた。再び私は銀行手形で八百ガルデンと共に、ありつた金の金を皆かけたが、負けて了つた。それから狂氣が私を襲つて來た。私は最後のこれつきりの二千フロリンをつかんで、最初の數の十二に、——全く偶然に、手當り次第に、何等の考へもなしにかけた。』斯くの如くドストイェフスキイ自身も勝負事の狂熱と衝動とに囚はれて、凡てのことを忘れて了ひ、其から其へと度を過ぎて遂に危くも深淵の中に足を踏み外づさんとしたのである。「賭博者」は、斯かる彼の経験を基として描かれた作であつた、そこには、戀愛の爲に賭博に陥り、身を失ひ、破滅の底に沈んだ人の運命を惱ましい神経を以て描いてある。



此作に現はれた主人公は戀愛の爲に器械となつて働くが、然し單なる器械ではない。女主人公の專制的な命に服して惡事に没頭するのは、彼の中に永久の放浪者たる素質がある爲なのである。恰もプウシユキンの詩に現はるゝアレコの如く世界苦を抱いて流浪して行き自分の出來心の爲に浮世のどん底に陥つて了ふ。ドストイェフスキイも亦かゝる衝動の犠牲となつて、將に身の破滅を招かんとした。更に彼はマイコフに書いて言ふ、『私は溺れてゐる、全く溺れてゐるのです。二三週間の後には、全く一文なしとなるでせう。そして、溺れかゝつてゐるものは理性に訴へることなく手を差し延べるものです。私がすることは斯様なことです。私はあなたが私に對してすゝめぶん好意を持つてゐて下さることを知つてゐます。然し、また殆ど私を助けて下さることが出來ないと言ふことも知つてゐます。其にも係らず、其を知り乍らも、私はあなたを助けを願ふのです。何故と言ふに、あなたの外に人がゐないからで、若しあなたが助けて下さらなければ、私は失はれまして、全く失はれて了ひます。』

バアデンでは、彼は矢張賭博をしてゐたゴンチャロフに金を借りて賭博をしたこと、ゴンチャロフの仲介でツルゲニエフに會ひ再三ロシア問題で喧嘩をして分れたことを手紙で語つてゐる。彼は斯く賭博の爲め物質上に破滅せんとしたが此苦みも妻のアンナの親切の暖い手によつて慰められた。彼女

は夫の誤を少しも咎めないのみならず、却つて益々愛情を注いでドストイェフスキイの爲に盡した。二人は一八六七年から翌年の冬をジエネヴで過した。彼女は此時既に妊娠してゐて、ジエネヴの氣候は健康の爲に惡るかつたが、金のない爲に其處に辛抱して留らなければならなかつた。

ドストイェフスキイはジエネヴで、「如何にして余はベリンスキイを知りしか、」と言ふ論文を作つた。前借の爲に止むなく書かされたのであるが、彼は、厭々ながらもこんなことを書かねばならなくなつたのをひどく呪つた。ジエネヴの氣候が寒く變化が烈しく悪い上に、持病の癩癩が頻々として發作し、物質の缺亡に始終脅かされながら彼は書かなければならなかつた。彼は此時大作の一なる「白痴」を書き始めてゐたのである。彼は終日机に向つて働き、書き損ねては原稿を裂いたり、書き改めたりした。彼は苦心して漸く雑誌に載せる爲に郵送しやうとした時に、急に不満足を見出して、第一篇の大部分を抹殺して書き改めなければならなかつた。彼は此作を姪のソフィア、アレクサンドロヴナに捧げた。一八六八年一月一日彼女にやつた手紙に、彼は此作を描かんとする目的を書いてゐる。『三週間に前に俺は他の小説に取りかゝつて、今は日夜働いてゐる。此作の觀念は自分が常に非常に好んでゐる十八番のものである。然し、是迄其を實行しやうと言ふ勇氣のなかつた程、非常に難しい

ものだ。今其に取りかゝつてゐるのは、只俺が危うい人質となつてゐるからなのだ。基礎的觀念は眞に完全高貴なる人の實現にある。是は此世に於て難事中の難事である、殊に今日に於てさうである。絶對美を表はさんとする凡ての作家は獨り我國人のみならず外國人に於ても其仕事に適當してゐない。如何となれば、其は無限に難しい仕事であるから。美は理想である。然し、理想は文明の歐洲に於けると同じく我々の所でも久しく動搖してゐる。此世に於て絶對美の唯一の姿がある、即ちキリストである。かの無限に愛すべき姿は、事の當然の成行として、無限の驚異である。(聖ヨハネの全福音書は此思想でいつばいになつてゐる。聖ヨハネは化身の驚異、美の視覺的出現を見たのである。)斯くして、ドストイエフスキイは「白痴」に於て、人生の最高美を描かんとしたのである。セルヴンテスのドシキホオテ、デイケンスのピクキキアンス、ユウゴキのジャン、ブルジャンの如く、且つ更に新方面を開拓して、基督教的の性格を帯びた憐憫、同情、博愛の權化を描かんとしたのである。彼は十九世紀の物質文明に中毒した世界にも斯かる精神的の人物を描き出して失敗をし、人の物笑ひとなることを恐れてゐた。然し、今は十分の力の自覺と努力とを以て思ひ切つて書くことにした。彼は此作の成功するのを待つて凡て借金を返却して、再びなつかしきロシアの地を踏まんことを熱烈に希望

してゐた。其上、嫂のエミリイや其子フエチヤや繼子のポオルガベテルスブルグで困つてゐるのを知つては、氣が氣ではなく一日も早く歸つて彼等を助けたいと思つた。彼は親友でマイコフに再三彼等の面倒を見んことを依頼した。輕挑で浪費家で忘恩であつた繼子のポオルは、ドストイエフスキイが新たに結婚したので、もう繼父は自分を見捨てたのだらうと癖みを起してゐた。ドストイエフスキイは其に答へて自分の眞の子の如く愛するとマリア、ドミリエヴナの死ぬ前夜に約束したのだから、例へ、お前が職を見つけても一生涯補助するから、そんな癖みを起してくれるなと慰め、苦しい中から金を分けて與へた。彼は自分達夫婦の貧困に苦しむばかりでなく遠くからベテルスブルグの家族の貧困してゐるのを見てひどく苦しんでゐた。彼は癲癩の發作を起して將に氣狂ひになるやうな状態の中にあつても前借の爲にペンを捨てることが出来なかつた。加ふるに妻のアンナは苦しい中で女の子を生んだが、赤坊のソオニヤは生れて三月で肺炎に罹つて死んで了つた。『三ヶ月年を取つてゐた此愛らしい者は、斯様に哀れで小きかつたけれども、私に取つては既に一個の人格であり、性格であつた。』と彼は初子を失つた悲みに堪へ兼ねてマイコフに書いた。『此子は私を見知り愛し始めた、そして私が近いてゆく時はにこ／＼した。私はをかした聲を出して唄を歌つて聞かせると、彼女は其に聞き惚れ

た。私が接吻しても泣きもしなければ、厭な顔もしなかつた。私が近いてゆくと彼女は泣くのを止めた。そして今人々は私には未だ澤山子供が出来ると言つて慰めてくれる。然し、ソオニヤは何處にゐることだらう。此可愛い人間は何處にゐることだらう、彼女の爲に私は斷乎として言ふが、彼女が生存してゐれば、喜んで十字架につけられてもいいのです。『彼は其子の死を悲しんで迎も筆を取る氣になれなかつた。彼女の病氣から死ぬまで十五日の間彼は悲嘆の涙にくれて義理を缺き乍ら何にも書かなかつた。彼は子供はいくらでも出来るからなど、言つて慰めてくれる人を不快に思つて、何物にも換へ難い死んだ子を一層いとほしく何日までも思つてゐた。彼の子に對する愛は限りなく深かつた。彼は如何しても死んだ子を思ひあきらめることが出来なかつた。更に翌月になつても彼はマイコフに書いて言ふ、『僕は此間中程不幸な時は決してなかつた。僕はあなたに何にも描かないが、僕が暮して行けば行く程思ひ出は益々苦くなり、死んだソオニヤの姿は益々はつきりして來ます。僕には堪へ切れない時がある。彼女は既に僕を見知つてゐたのです。其死ぬ日になつて、二時間の中に彼女が死なうとは思ひませんでしたので、新聞を讀みに出かけた所が、彼女は何處までも僕を眼で追つてゐました。今になつても其様が眼に見え益々はつきりする程、彼女は斯うして僕を見つめてゐました。僕は

彼女を決して忘れないでせう、其で苦しむことを決して止めないでせう。若し僕が他の子供を持つたとしても、其を愛することが出来るとは思はない。何處で僕は愛情を見出すことが出来やう。僕に必要なのはメオニヤなのです。僕には彼女が此世にゐず、永久に再び見ることが出来ないとは如何しても呑みこめないのです。『妻のアンナも夫に劣らず苦しんだ。彼女は毎晩泣いて病氣に罹つた程であつた。彼女は神経が弱くて益々瘦せた。彼は彼女を慰める爲に氣候の悪いジエネフからゼイに移つたが、そこも住み心地の悪い物價の高い所であつた。それから他の變つた土地へ行かうとしても、貧窮の爲に動くことが出来なかつた。二人は屢々最後の一錢をも失はんとした。二人は今如何することも出来なかつた。それでも彼は契約に迫られて、頭の馬鹿になる程頭腦を使つて推蔽を重ねた。彼は幾ら推蔽しても不満足を感じた。彼は過度の努力の爲に病氣に罹つた。此時妻の母は彼等夫婦を助ける爲に來た。そして、彼等夫婦は各の健康を救はん爲に辛うじて伊太利のミラノに行くことが出來たのである。然しそれでも彼等は歸ることの出来ないロシアを空しく望み乍ら淋しい苦しい僧院のやうな生活を送つた。ロシアへ歸らうとすれば牢獄が彼等を脅かしてゐるし、外國に止れば彼等は孤獨に堪へ切れず、二人は殆どヒステリイになつて了つた。此時友に書いた彼の手紙は至る所哀れな言

ひ難き苦悶と呻吟の聲に満ちてゐる。斯様に苦み嘆き乍らもドストイェフスキイは何日かは山のやうな借金を返して、ロシアに歸れることを信じて疑はなかつた。彼は一日も努力を止めなかつた。此年の終りになつて彼は妻を連れてミラノに行き、フロレンスへ行き、こゝで彼は漸く長らく苦心してゐた「白痴」を脱稿することが出来たのである。

「白痴」は一八六八年にルスキイ、并ストニク誌に連載されたもので、ドストイェフスキイの作中最も傑れた深酷な美しい大作の一つである。彼は既に言つてゐるが如く、此の作に於て、現代のキリストも言ふべき愛と美との權化なる最高理想を體現した人物を描かんとしたのである。主人公ミニユイシユキン公爵は即ちかゝる人物であり、十九世紀の物質文明の中に生れた唯一の精神美の體現者である。彼は生れ乍らにして癲癇の發作に呪はれたる哀れな白痴の如き人間であつたが、只普通人の物質的の力を缺いてゐる代りに、彼等の到達すべからざる精神力を有してゐた。彼は子供の如き衝動の中に、普通人の見る能はざる鋭き直覺の透視力と、世にも稀な美しい愛と同情を備へて生れて來たのである。彼は餘りに人が好く、善良さが常軌に逸してゐる爲に、人々から輕蔑され、嘲弄され、利用される。然し、彼は自分の善良なることを少しも悔いない、彼は甘んじて悪人の利用する所となり、人

々の侮蔑に對しは却つて恩を以て報いる。彼は又世の中から踏みつけられた者、悪人から罵げられた者に對しては限りなき憐憫と同情の本能を感じる。彼が馬鹿で肺病で誰も省みるものゝないスキツルの女マリヤや、迫害されて半狂亂となつて狂つて歩く女主人公ナススタシヤに、深い熱い情を注ぐのは此本能から出たのである。彼はドンキホテの如く、單純と清淨と卒直との化身であり、凡ての罪惡に對しては寛大と信頼を以てし、其が爲に滑稽視され嘲弄されるのを意に介しないのである。「子供の如くあれ、」と聖書に書いてある句を實現する爲に、彼は、此世を支配してゐる皮肉、嘲弄、傲慢、貪欲、邪念等のあらゆる罪惡と無意識に暗に反抗しつゝあるのである。彼の潔白な正直な心は、自分に企まれた滑稽な計略や不當な誹謗よりもつと大きくもつと強い。彼は利己主義や物質主義者の最も腐敗した空氣の中に生活してゐるが、少しも自分は感化を受けずに、却つて始め彼を欺き嘲りしものを、次第々々に征服してゆくのである。彼は眞の理想的なロシア人としてドストイェフスキイによつて創られた始めての人物である。

女主人公ナススタシヤの虐げられた悲しい運命に至つては誰しも泣かずにはゐられないであらう。彼女は未だ十五六の少女で世の中の善も悪も解さぬ時分から利己的な金持のトツキイと言ふ男の肉慾

の犠牲となつて、久しい間其妾として生活して來た。然しある出來事の爲に、一朝自分の運命を自覺する。彼女は自分の無智を利用して、自分の純潔が卑劣な男の爲に長く潰され弄ばされたことを知つては、烈しい驚駭と屈辱と忿怒とを感じる。そのあまり性格に激變を來して、今迄の謙讓、謹慎、淑徳のたしなみを失ひ、傲慢な不貞腐れのあばずれ女と化し、遂に半狂亂となつて了ふのである。ミュイシユキン公爵は始めて彼女の寫眞顔を見た時から、彼女の薄命な生涯を直覺した。『彼は先刻自分の心を打たれた此顔の中に隠れてゐる謎のやうな或物を解きたいと思つた。先刻うけた印象が殆ど寸時も心を去らぬので急いで何物かを再び改めやうとすると言つた風があつた。美しい爲のみではなく未だ何かしら或物の爲に世の常ならず見える此顔は、今一層の力を以て彼に迫つた。丁度、量り知り難い誇りと輕蔑——殆ど憎惡に近い——の色が此顔の中にあつた。が又其と同時に、他人の心を信じ易いやうな、そして驚くばかり醇樸な或物があつた。此二つの物の對照は見る人の胸に何となく憐憫の情をそゝるやうに思はれた。此眩ゆい計りの美しさが見るに堪へないやうにさへ感じられる。落ち窪んだと言ひたい位瘦せた頬、燃えたつやうな双の瞳、悉く蒼白い顔が所有してゐる美である。不可思議な美である。』彼の容貌は公爵の心を驚ぶかみにして了ふ。彼は限りなき憐憫にそゝられる。彼女の

不貞くされた行爲が彼女の本心ではなく、自暴自棄の爲に精神の不具に陥つたことを彼は看破する。そして今は彼女を親切に看護するものが必要であり、自分自ら其役に當らんとするのである。利己的なトツキイはエバンチン將軍の長女アレクサンドラと結婚する爲に、邪魔者のナスタシヤの脅迫から逃れやうとして、將軍と相談の結果、持參金を七萬五千留ナスタシヤにつけて、利慾に迷つてゐる秘書官のガアニヤと結婚せしめようとする。ナスタシヤはガアニヤから結婚の申込みをうけたが、彼が眞の愛を持つてゐるか如何かを疑つて返事を延してゐた。遂にある晩夜會を催うして最後の返事を與へると約束する。然し彼女は遂にガアニヤが彼女を愛してゐる所か却つて烈しく憎んでゐながら、金の爲にのみ結婚しやうとする心を看破する。其上エバンチン將軍も亦ナスタシヤに迷つた野心から彼女に眞珠の頸飾を贈つて、ガアニヤと結婚させた上で思を遂げんとしてゐる心を洞察する。ガアニヤも此事を知り乍ら黙つて見てゐるのを彼女は益々卑むのである。『ラゴジンがあなたのことを、三留の爲にバシリエフスキイ島まで四つん這ひに這つて行く人だつて言つたのは、ありや一體本當なんですかね、』と彼女は狂人のやうにガアニヤに向つて嘲る。『ほんとにあなたのやうな人は餓ゑ死でもした方がいゝんだ。併し噂によると、あなたは大きい、月給を取つてゐるさうですね。それに搦て、加へで、

其厚かましが足りないで、自分の憎んでる女を家へ入れやうとするんですか。(何故つて、あなたは私を憎んでゐます。私はよく知つてゐます。)さうです、私今こそ信じます、こんな男は金の爲に人殺しでもします。御覧なさい、今時の人はみんな金の欲に渴いて、まるで馬鹿みたいになつて了つてゐるぢやありませんか。斯くして、地獄の火のやうな深酷な陰鬱な情熱を持つた物凄しい酒飲みのラゴオジンが、自分を狂ひ死にする程愛してゐるのを知つて、彼女は此男を蟲づの走る程嫌つてゐるけれども結婚しやうかと思ふ。彼女は多くの人の中で白痴と言はれてゐるミュイシキン公爵のみが眞に自分を尊敬し救つてくれる只一人なるを悟つた。公爵は此熱に浮かれてゐるヒステリックの女に尙多く純潔な清淨な心の残つてゐるのを知つて、限りなき同情と憐憫から、彼女を苦痛と虐げられた運命から救はうとして結婚を申込む。彼はナスタシヤに意志なくしてトツキイの妾となつたことを恥づるに及ばないことをよく解いて、ラゴオジンと駈落しやうとするのは一時の熱に浮かされたことで長續きのするものでないことを懇々とさすのである。然し、ナスタシヤは尙自分が一生汚辱に満ちた女であると言ふ考へを去ることが出来ない。彼女は公爵を愛し始めたけれども餘りに苦み過ぎて疑ひ深くなり、其上結婚して公爵の一生を臺なしにすることを欲しないので、公爵の適當な妻はエバンチン將軍

の未娘のアグラアヤなることを申出でて公爵の申込を拒絶する。彼女は矢張自分を愛してゐないラゴオジンと駈落しやうと思ふ。『公爵御覧なさい、』と唄はれた彼女は悲痛な聲で叫ぶ、『あなたの花嫁御はあばずれ女だから金を取りましたよ。それなのにあなたはこんな女を奥様にしやうとしたわねえ、まあ、如何したつて泣くの。悲しいとでも言ふの。下らない、御笑ひなさいよ、私みたいにくと語り續けるナスタシヤ自身の雙頬にも、大きな二滴の涙が輝いた。時を信じなさい——何でもなくなつて了ふわ。後になつてよか、今考へ直しておく方がいゝのよ……まあ、何だつてみんな泣き出すんだらつねえ。——あら、カアチャまでが泣いてるよ。カアチャ、いゝ子、何が悲しいんだえ。私はお前とバアシヤにとつさり色んな物を残しておいたよ。ちゃんと差圖してあるからね。だが今は之でお別れだよ。よくお前のやうな正直な子にこんなあばずれ女の世話をさせたわねえ。……公爵、斯うなる方がいゝのよ。全くいゝの。一緒になつた所で、直ぐにあなたが私を蔑み出して、幸福なんか得られなくつてよ。いゝえ、誓つたつて駄目、私本當にしないから。屹度馬鹿々々しい思をするに相違ないわ、ねえ、いつそ綺麗に別れませう。でないと私も空想家だから、どんな悪業を晒さないとも限らないわ。實を言へば私だつてあなたの事を空想しなかつた譯でもないの。其はあなたの言ふ通りなの、私が未

だあの男(トッキイを指す)に養はれて田舎に五年の間、ほんとの一人ぼつちで暮してゐた頃、私はよくあなたの事を空想したわ。考へて考へて考へて抜き、空想して空想して空想し抜くことがあるでせう。すると私正直で人のいゝ親切なそして矢張少々ゝのろまな人を想像するの。そんな人がやつて来て、「ナスタシヤさん、あなたには罪がない、僕はあなたを尊敬します。」と言ひさうな気がしてならなかつた。よくさうした空想に苦められて、気が狂ひさうになることがあつたわ……所へ此男がやつて来て、一年に二月づゝ返つて行つて、汚はしい、恥しい、腹の立つ、みだらな事をして歸つて行くんです。――私、何處か池へ身を投げやうと思つたけれど、未練な爲に思ひ切れなかつたの。』何と言ふ悲しい苦しい叫びであらう。彼女はラオジンから受取つた十萬留の金を、貪慾なガアニヤが尙一片の人間らしい威厳を残してゐるのを見て、彼に與へて、ラゴオジンと共にモスコオへ駆落をしてさふ。暫く經つてミュイシキン公爵もモスコオへ遠い親戚の遺産を相続しに行き、其處で再びナスタシヤに再び會ふ。ナスタシヤ、フイリツボヅナはラゴオジンと結婚の約束をしたものゝ、元々彼女が彼を愛してしたのではなく、却つて反對に心の底から彼を憎み嫌つてゐるので、そんな不自然な結婚の成り立つ筈がない。結婚式を擧げる間際になつて遂にミュイシキン公爵の所へ逃げて来る。ミュイシキンは深

い憐憫と同情の念から彼女を保護し看護する。心の錯亂した彼女には今は何よりも親切な看護婦の必要なることを知つて、自分から進んで其役に當らうとするのである。彼は彼女を強く、「戀で愛してゐるのではなく憐憫で愛してゐる」のであつた。其爲に火山の噴煙の如き恐しい狂熱を持つてゐるラゴオジンが戀敵たる公爵と會つて、「何よりも一番儲なことはお前の憐憫の方が俺の戀よりも強いつてことだ。」と毒々しく物凄い表情をし乍ら言ひ、又彼は公爵の一舉一動をつまわして、燃ゆるやうな嫉妬の餘り白刃をその頭に閃めかして殺さうと思つた程である。ナスタシヤは斯くして暫く公爵に隠まつて貰つたが、また狂的の發作から公爵の許を逃れて、ラゴオジンの手に歸る。彼女は公爵と結婚することは、その顔に泥を塗るものであり、公爵の一生を裏なしにするものであると言ふ考へら逃れることが出来ず、處女の純潔を失つた自分が其程汚辱に耻ぢてゐると自ら卑めてゐるのである。彼女の凡ての不幸は此自卑の心から來るものであつた。彼女は罪なくして、自分が世の中の最も悪い女になつたかと思ふと矢も楯も堪らないのであつた。彼女は公爵をば、ラゴオジンが彼女を愛してゐるに劣らず熱狂的に愛してゐた。愛の爲に、彼女は自分の戀を犠牲にし公爵の名譽を傷けないやうにし、エバンチン將軍末娘のアグラアヤとの結婚をとり持たうとする。且つ、彼女は最早自分はラゴオジンの猛

烈な追窮と情慾の犠牲であつて、ラゴオジンを捨てれば自分の命の危いことをよく知つてゐた。彼女は公爵と結婚すれば自分の身が危いのみならず、公爵の身の危いこともよく知つてゐた。彼女はいづれから見ても、公爵とアグラアヤとの結婚が最も愛する男の幸福なことを知つて、其間の接近を圖かるのである。此爲に、彼女はアグラアヤに求婚しやうとしてゐる金持地主のハイカラなエヴゲニイを公衆の前で侮辱して、二人の間の結婚を妨げ、そして自分はラゴオジンと犠牲的な結婚をして、ミユイシユキン公爵とアグラアヤの幸福を圖らんとする。

もう一人の女主人公アグラアヤ、イヴノブナに於ては、其傲岸な威厳と夢幻的な個性の中に限りなき美がある。彼女は實際の経験に於て何も知らない、然し、空想の中に於ては凡ての物を知り過ぎてゐる。彼女は一面に於て恐しく利巧であると共に、一面に於て恐しく片輪の所がある。彼女は公爵をナスタアシャにも劣らず愛してゐた。然し自ら公爵を愛してゐることを知つて、自分自身に腹を立て程其れ位が高く神経質でエクセントリックであつた。彼女は自分の愛してゐる公爵を幾度となく侮辱し嘲弄しては、「あなたとは決して結婚しない、」と言ふ。然し、心の底では明かに公爵の求婚しに來るのを待ちに待つて焦れてゐた。彼女は大きな純潔な赤坊であつた。其故に人々から「白痴」と稱せられ

てゐる人の善い正直過ぎる同じく赤坊のミユイシユキン公爵を選んだのである。彼女は自分の棲んでゐる虚偽の世の中に生活してゐることが出来ないまた。戀の爲には何物をも恐れない。そして、自ら求めて公爵と媾曳して、自分が十四の時から束縛の多い家を逃れやうと思つてゐたことを自白し、そして、二人で外國に行き、教育事業に盡さうと言ふのである。公爵が彼女の言ふことを冗談と取つて、外國に逃れることを肯ぜぬのを見て、遂に公爵を動かす爲に昔彼女を愛してゐたガアニヤと逃げてゆくと斷言するやうな事をする。彼女は嫉妬から公爵にナスタアシャを未だ愛してゐるかときくと、ミユイシユキン公爵は之に對して前からナスタアシャに對しては強い憐憫を感じるのみで、眞の戀は其中に少しもないこと、彼が彼女に對して結婚を申込んだのは只深い憐憫からであつて、二人が一所になることは不自然極るものであると答へた。彼はアグラアヤのみを前から戀してゐたのであるが、彼女の烈しい嘲罵に會つて彼女が自分を愛してゐないものと思ひ、結婚を申し込むことを憚かつてゐたのである。然し、遂に彼女が愛してゐることを知つて最後に彼女の手を求める。之を聞いて、アグラアヤは嬉しさの餘り母親の胸にすがつて、子供の如く泣いては笑ふ。二人の奇妙な幸福な婚約はこゝに成立したのである。然し、氣位の高いアグラアヤはナスタアシャから戀を譲られたと言ふ風になつて



ゐるのに満足することが出来ない。彼女は自尊と嫉妬から、公爵がナスタアシャを少しも愛してゐず自分のみを愛してゐると言ふ證據を明かに握る爲に、ナスタアシャと會見することゝなる。ミュイシユキン公爵は彼女の命令によつて立ち合ふことを餘儀なくされる。此二人の女は何れも神経質な女ではあるが、一方は空想の外世の中のことを少しも知らない傲兩な娘で、他はあらゆる辛い苦い經驗を嘗めつくした虐げられた女である。二人の會見は斯くして始つた。アグラアヤは始めから敵意と嫉妬を以てナスタアシャを罵り、彼女が餘りに利己的で虚榮心が強い爲に公爵を捨てたのだと言ふこと、自分は公爵が餘りに正直で寛大である爲に人を信じ易く欺かれ易く、其爲に自分が愛するやうになつたこと宣言し、何故にナスタアシャが自分の捨てた男と彼女との間に餘計な差出口をするのかとなじつた。今迄彼女と公爵の幸福を願つてゐたナスタアヤは始めは我慢をしてゐたが、だん／＼嘲罵の聲の烈しくなるにつれて遂に狂氣となつて了ふ。烈しい喧嘩は起る。アグラアヤは席を蹴つて去り、續いてミュイシユキン公爵も走り去らうとする時に、ナスタアヤの二つの腕は公爵を止め、彼女の重い身體は彼の胸に落ちて了ふ。絶望の光に満ちた蒼い彼女の顔を見て、公爵は再び限りない憐憫と同情を催うして、アグラアヤとの約婚を破つてナスタアヤと結婚することにした。然し、ナスタアヤ

ヤは愛する男を不幸にしたと言ふ悔恨に責められ、結婚式の間際に當つて再びラゴオジンと逃れ、彼の手によつて殺されて了ふ。ミュイシユキン公爵は又アグラアヤを自分の破約によつて不幸にしたことを嘆き、殺人の恐しき罪を犯したラゴオジンの爲に泣く。終りに彼は發狂して再び瑞西の精神病院に送られ、こゝに悲劇は幕を閉ぢる。

「白痴」はドストイェフスキイの多くの小説に見るが如く、其形式を形づくつてゐるものは悲劇的分子である。然も彼の悲劇の中で最も大なるものゝ一つである。此作の主調となつてゐるものは、浮世の虚偽に對する反抗の聲であり、苦痛に對する同情の叫びである。此作に表はれた人物は、純潔を潰されて半狂亂となつたナスタアシャは勿論、神経質で倨傲であつた爲に不幸に陥つたアグラアヤ、陰鬱と狂熱の致命的な性質を受ついだ物凄く深酷なラゴオジン、肺病に苦めるヒポリット、さては飲酒の爲に身を誤り一生を醉生夢死の間に暮すイデルギン將軍、瑞西の白痴の肺病な迫害された貧乏娘マリアに至るまで、皆物質的或は精神的に暗い不幸の淵に沈める人々である。ドストイェフスキイの理想的人物ミュイシユキン公爵の愛は是等の凡ての人々に向つて、太陽の光の如く暖い光を隅なく四方に投げるのである。世の中の毀譽、褒貶、讒謗、怨嗟、虚偽、憎惡、誹詐等の惡徳も、彼の寛大な心

を少しも傷けることが出来ない。殆ど暗礁や危険に満ちた海が、満潮に際して凡てのものを呑み盡し  
澎湃として見える所は只蒼い水と暖い光ばかり、彼方の水平線より太陽が靜かに登る光景にも比較す  
べきものである。彼の心理觀察は正確であり、寫實描寫は深酷である。彼は最も辛辣に肉を寫す。然  
し其肉の描寫には他の作家の企て及ばざる精神の反射がある。理想的に見る人は、ドストイェフスキ  
イの描く人物や社會は存在してゐないが如くに言ふ。例へばミュイシユキン公爵の如きは到底此世に  
生存してゐず、空想の産物なるが如く言ふ人がある。然し、其はドストイェフスキイが人間の中の人  
間を發見したからである。異常な天才を以て人間の中に人間の見るべからざる性質を發見したからで  
ある。彼の人間の中に見た所の美は金剛石の如く地中に深く埋没されてゐるので、皮相しか見ること  
の出来ない人は、其美を見ずに過ぎ去つて了ふ。其代り、一旦、其美を認めた人には、一生其燦爛た  
る美しい光を忘れることが出来ぬであらう。ドストイェフスキイは完全なる人間の魂の所有者である。  
あらゆる階級を通じて、高き者も卑き者も病的の者も健全の者も、凡ての精神は明かに彼の作に展開  
されてゐる。其作の内容をなすものは徹頭徹尾理想主義である。然し淺薄な安價な生命の肯定者では  
ない。彼は人生及び自然のあらゆる深みのみを描いたと言つて差支へない。彼は最深の意味に於ての

理想家である。彼の愛と憐憫とは、苦める者虐げられし者に對する愛に對してのみならず、世の中の  
悪しき人間、詐偽をしたもの、罪惡を犯したものに迄及ぼしてゐる。彼は此時、『自分  
の理想主義は他の人々の寫實よりも一層寫實的である』と言つたのは、決して自負の言ではなく、深  
く自分を知つた人の言であることは、彼の作を見れば容易く證明されるのである。『白痴』巻は、か  
ゝる深い寫實と高い理想から出来上つた小説であつて、其中にはドストイェフスキイの暖い美しい思  
想でいつはいに満たされてゐるのである。

此小説が、空想的であり、寫實的でないと言つた當時の批評は誠に愚かなものであつた。單に外形  
ばかり判斷して、ミュイシユキン公爵の如き人物は此世にゐないとするのは、人間の精神を理解しな  
い淺薄な似而非寫實主義者である。ドストイェフスキイは、かゝる非難をば承認することが出来な  
かつた。彼はストラホフにやつた手紙に、輕卒な、古くさい偽りや、鼻先のみしか見ない寫實を攻  
撃してゐる。そして、更に、斯う言つてゐる、『私の空想的な「白痴」は、寫實ではない、最もありふれ  
たものではないと言ふのですか。然し、今は、明かに、土地からもぎ取られた我國の社會の諸層に斯  
様な人々があるに相違ありません。——現實にて、空想的となる諸層に於てです。然し、何にも言ふ

がものはありません。此小説の中では、多くのものが、書き急がれ、長くひき延ばされ、成功しませんでした。然し、ある物は成功しました。私は小説に重きをおくのではなく、思想に重きをおくのです。』

ドストイェフスキイが斯う言つても、此小説を冗談である、書き急いだと言ふ人があれば、愚かなのである。作者の謙遜の言葉が解しないからである。よしんば、書き急ぎ冗漫の所があるとしても、此小説のやうに美しい思想と、深酷な寫實に満ちたものばかりとすれば、我々は尙一層冗漫に書き急いで貰へたいと此天才に要求したくなるであらう。

## 十三 悪靈との戦

無神論の研究——「ザリア」誌に寄稿——トルストイに対する批評——トルストイの賞讃——イタリアよ  
リドイツへ——妻の第二の妊娠——極度の貧困——「永久の良人」——「悪靈」

一八六八年の本、ドストイェフスキイは更に無神論に関する一大長篇を書く腹案を立てた。彼は圖書館へ這入つて、一生懸命に宗教を研究し、其に關する本を讀もうと思つた。翌年三月彼は姪のソフイヤ、アレクサンドロヴナに斯う書いてゐる、『親しき友よ、私が下の事實に力を入れて言ふ必要はなからう、(お前は屹度私を理解するだらうから)、其は、我全文學的活動は私に取つて只一つの決定的理想價值、只一つの目的、只一つの希望を台體したものであると言ふこと、——そして、私は名譽や金を求めてゐるのではなく、我想像と文學的理想の綜合をのみ只求めてゐるのだと言ふことである。其は、私が死ぬ前に、或る著作をなして自分の考へてゐることを出来る丈廣く表現し、言ひ盡さんと欲すると言ふことである。』

然し、かゝる遠大なる理想は本國のロシアに歸らねば逆も書きあらはせるものではないと彼は思つてゐた。彼は水に渴せる沙漠の人の如く本國を戀し求めた。また、差し當り五六千留の金がなくては到底ロシアに歸することは不可能であつた。「白痴」で成功して此金を作り、借財を返却して歸らうと思つたが、「白痴」は「罪と罰」程の成功を得なかつたので、彼の望みは遂げられなかつた。其で少くとも二年間の日月を要する見込の彼の無神論に關する一大長篇は計畫のみで此時は書き上げることが出来なかつたが、後に此抱負は彼の晩年の大作「カラマゾフの兄弟」となつて現はれたのである。

彼が此のフロレンスに滞在してゐた時分にザリアと言ふ新しい雑誌がロシアに出来た。親友のマイコフ、ストラホフも之に關係してゐた。ドストイエフスキイは此雑誌の中に出てゐるダニレスフキイの「歐洲及びロシア」と言ふ論文に感心した。そして此雑誌は彼の思想に共鳴してゐると思つた。此頃ツルゲネエフの「父と子」やトルストイの「戦争と平和」が文壇にあらはれた。ドストイエフスキイはツルゲネエフは外國にかぶれて自分の才能をすつかり失つて了ひ、ロシアを知らずしてロシアを攻撃してゐると始から非難してゐたが、トルストイの「戦争と平和」はストラホフの賞讃の論文を読んで、自分も取寄せて讀んで見た。彼はトルストイのいゝ所を認めることは認めたが人の餘り賞め過ぎるのに

感心することは出来なかつた。「トルストイに就て二行ばかり書きます」と彼はストラホフに書いた。

「私はあなたがトルストイが我々の文學の有する偉大なる凡てのものに匹敵してゐると言はれる事に同意することが出来ない。絶対にそう言ふことは不可能です。プウシュキンやロモノソフは天才です。其は「ペテロ大帝の黒奴」や「ベリキン」(プウシュキンの短篇集)を取り出してくれば、人々が今迄何處にだつて言はなかつた新しい天才の言葉を必ず取り出してくると言ふ意味なのです。然し「戦争と平和」を取り出してくれば其はプウシュキンによつて既に言はれた此新しい言葉の後に生じたものです。始めて彼よりは前に天才によつて言はれた此新しい言葉を、如何にトルストイが高く遠く表はしたにもせよ、どんな場合だつて矢張さうです。」此批難はドストイエフスキイの單なる嫉妬の言葉と取ることは出来ない。此同時に現はれた二大天才は互の藝術が異つた彩色を帯びてゐたのみならず、全く正反對の境遇に生れたので、ある部分に於て完全な理解の成り立たなかつたことは無理でもなかつた。其は文藝復興期に於ける二大藝術家レオナルド、ダ、ビンチとミケランジェロとが理解に於て一致する所がなかつたのとよく似てゐた。然し、ドストイエフスキイはトルストイをツルゲネエフの如くけなしたのではなかつた。彼はトルストイの弱點を認めたのみならず、又いゝ所をも十分認めてゐたの

である。只世人が餘りに盲目的な無理解な賞讃をする爲に、世人の旨を正し、誤りを教へてやらうと思つたのみである。彼がトルストイを認めてゐた證據は、彼の書簡集を見れば解る。即ち、ストラホフに宛てた手紙の中に、「あなたはレオ、トルストイを個人的に知つてゐますか。御存知ならどうぞ彼が如何してゐるのを知らせて下さい、私には、彼に就て何か知ることとは大變興味のあることです、」と言ひ、また後年クリスチナ、ダニロヴナに宛て、「私は藝術家は詩の外に最も低い詳細のことまで（歴史でも現今のことでも）表現する現實を知らねばならぬと言ふ結論に達した。私の考では我國では之に傑出してゐる作家は一人しかない。即ちレオ、トルストイ伯である、」と言つてゐる。トルストイも亦後年ストラホフに宛て、「斯う書いた、近頃私は病氣でドストイェフスキイの「死人の家」を読んだ。私は澤山讀み澤山忘れた。然し、私は凡ての近代の文學の中で、其中にブウンユキンを含み、こないゝ本のあることは知らない。態度のみならず、見地が非常に傑れたものである。其は大變誠で自然でキリストに似てゐる。美しい敬虔な本である。昨日私は讀んだ時に、私は長い間失つてゐた非常な愉快を覺えた。若しあなたがドストイェフスキイに會つたら、私が彼を愛してゐると傳言して下さい。」之を以て見れば、此二人の同時に現はれた天才は實際に於て互にいゝ所を理解してゐたと見る

ことが出来る。只、二人が一度も會つたことがなく、互に心持を打ち明けて語り合はなかつた爲に、十分の意志の疎通を見ることが出来なかつたものらしい。

ドストイェフスキイは、外國へ亡命して、始めは二年の間に長篇を書き其を賣つて借財を返却し、自由の身となつて歸るつもりであつたが、其が成功しさうもないので彼のノスタルジイは益々烈しくなり、外國生活の不自由に對する不満と懊惱は益々加はつた。後年彼は回想して言つた「自分は外國の瑞西、獨逸、伊太利に四年間暮したが、其は恐しく私を悲觀せしめた。怖しかつたことには、私はロシア國の習慣から脱け出て了ふのではないかと思ひ始めた。私はロシアの新聞を三つも讀みロシア人とも話をしてはゐたが、恰も何物か解らないやうになつて了つた。歸國して、自分の眼で見なければ駄目であつた。」斯様な烈しい郷愁に陥つたのみならず、一方には物質上の缺亡は益々加つて雜誌社には前借に前借を重ね、親友のマイコフやストラホフに多くの迷惑をかけた。彼は一時マイコフが手紙の返事をくれなかつたのを、自分が迷惑を餘りかけた爲に怒つて絶交したのではないかと思つて懊惱した。

「最近の六ヶ月は、私と妻とは非常な慘めに陥つて、これつきりと言ふ襦袢衣までも質に入れた程であ

つた。」と彼はストラホフに當て、書いてゐる。「此の事は人に話さないで下さい。エミリア、フィオドロヴァ(ペテルスブルグにゐる嫂)はまさに餓死しやうとしてゐます。私は如何しても助けにゆくことが出来ないのか。斯様な苦しい境遇にゐて、只一人の忠實な人さへ、私を捨て去ると考へたばかりでも私は非常に苦しい。』斯様な悲しい境遇にあつても、尙遠いペテルスブルグの嫂や繼子のポオルのことを心配してゐたことは、實に尊い心持であつた。彼は自分の苦しい境遇をも忘れて、屢々マイコフに頼んで嫂や繼子の面倒を見て貰つてゐた。マイコフは、餘りに追ひかけ／＼ドストイェフスキイから金策を頼んでくるので、奔走につかれて手紙を書かなかつたものらしい。然し、ドストイェフスキイを見捨てたのではなかつたことは、直ぐに後で手紙の交換が始まつたのでも解る。我々は幾多の傑作を書いてゐる天才がかゝる不幸な境遇に陥つたとは逆でも信ずることが出来ない。人並より以上の威嚴を重んじてゐた彼が、あらゆる恥を忍んで、厭な顔をする友達に再三再四金策を頼んだ心持は察するに餘りある。加ふるに妻のアンナは再び妊娠の身となつて、暑い伊太利の夏に住むに堪へなくなつた。ドストイェフスキイは妻の身を氣遣かつて、北部の獨逸に赴かうとしたが、物質の缺乏の爲に行くことが出来なかつた。二人は暫く止つて烈しい暑さを忍んだ。其年の八月、臨月の腹を抱へた妻を

連れて、漸く彼はドレスデンに暑さを避けることが出来た。翌月十四日、彼等の第二の女子リュムボフが其處で生れたのである。此時彼はザリヤ誌の發行者たるカシュビレフから金を借りる約束をしてゐたが、其金は中に立つた銀行員の怠慢の爲に中々送つて來なかつた。彼等親子三人は窮乏の極に達した。彼は産後の妻には十分滋養品をやることも出来ず。生れたばかりの子は醫者にもろく／＼見せることが出来ない爲に病氣になつて死にはしまいかと恐れた。勿論子供に洗禮を受けさせることも出来なかつた。彼はカシュビレフに至急金を送つてくれるやうに電報を打たうとしてズボンを買に入れて電報料の二タアレルを拂つた。「悪魔は飢餓と共に自分を引張つて行つてもいゝ、」と彼はマイコフに書いてゐる。然し、彼女は自分の赤坊を養つてゐるのです。其でも彼女は自分自身で毛の冬着のスカートを質に入れやうとしてゐるのです。そして、二日前から今は雪が降つてゐます。私は虚言をついてゐるのではない、新聞を御覧なさい。彼女は風邪に犯されるかも知解らない。如何して彼(カシュビレフ)は、私が凡てを打ち明けて言つてゐるので、困つてゐると言ふことをさとることが出来ないのだらう。そして、こればかりではない、困つてゐることはもつと澤山あるのです。今迄産婆にも家主にも金を拂つてゐないので。産後一ヶ月にしかならないのに全く此通りです。私が妻が困つてゐると

言つてやつたのにぐづくしてゐて、其で侮辱されるのは私のみならず妻も亦辱められてゐると言ふことを如何して彼は悟らないのだらう。彼は彼女を辱しめたのだ、辱しめたのだ、彼は多分、「彼はその要求と共に悪魔にさらはれる。彼はお願いしなければならぬのだ。要求する譯はない。俺は前借なんぞやる譯がないのだ、」などと言ふのでせう。それでも、彼が私の最初の請求に承知したと言ふ返事が、私に面と向つて約束したのだと言ふことを悟らないのだらうか……彼らは今自分から文學を要求してゐた。カシュビレフも(十二日目の手紙の中で)自分の短篇のことに就て手紙を寄越して、掲載の廣告をするのだから、題を知らせてくれなぞと言つてゐます。こんな時に書くことが出来るもんですか。私はあつちこつち歩いて髪の毛をむしつてゐるのです。そして夜もおち／＼眠ることが出来ません。私は始終考へ事をしてゐて、怒つてゐるのです。私は待つてゐるのです。お、私はあなたに誓ふ、誓つて言ふが、逆も私の貧困を凡て詳かにあなたに描き出すことが出来ない。私は其を描くのを恥ぢてゐます。あ、あなたがすつかり知つて居たならば……是は他人の境遇を知ることが欲しない人間の怠慢です。そして、そんなことをしてゐながら、彼等は私から藝術や、詩的な清らかなものを努力も熱心もなしに書けと強ひてゐるのです。そして彼等は私にモデルとしてツルゲネエフやゴンチャロ

フを持つてくるのです。彼等は私がどんな境遇にゐて仕事をしてゐるか見にくければいゝのに。」

ドストイェフスキイはカシュビレフが自分の貧困を嘲り、弄んでゐたのだと思つて、非常に怒つたが、後で自分の誤解であると解つてから、直ぐに恨みを解いて水に流した。そして、自分の激怒したことを後悔してマイコフに書いて、「あなたの言ふやうに人間はキリストのやうな感情を持たうとしても駄目だと私も考へてゐます。怒りに激するやうなことをすまいとしても不可能なことです。」と嘆いてゐた。

此年の十二月小説「永遠の夫」は愈々脱稿したが、其時は一錢の貯へもなく、之を郵送することが出来なかつた。彼は再び金を借りて漸く郵送することが出来た。然し、彼には借金があるので少しばかりの送つて来た金は、着くか着かない中になくなつて了つた。彼はクリスマス及び新年に返却すべき諸出費を如何して拂つていゝか解らなかつた。此の借財は拂はなければ宿を追ひ出されて町の中に寝なければならぬと彼は嘆いた。

「永遠の夫」は姦通せられた夫の心理と永遠の救はれざる放浪者の一生を描いた。主人公トルソツキイが妻の死後、其手紙から不貞を知つて、女の頼むべからざるを知り乍ら、尙妻を求め、女の前に跪

拜せざるべからざる性格から逃るゝことが出来ない。其は少し諧謔的に描いてあるが、尙深い所のあ  
るのを感ぜずにはゐられない。殊に姦夫エルチャコフと手を取つて和解しやうと思ひ乍らも其が出来  
ず、之を殺さんとする心理は極めて巧みに描れてゐる。エルチャコフは、矢張「賭博者」の主人公の如  
き世界の放浪者であり救はれざる人の苦悶を遺憾なく表はしてゐる人物である。此作はドストイェフ  
スキイの傑作とは言へないが、少くとも心理描寫に傑れてゐる作の一つと言ふことが出来る。殊に姦  
通者と被姦通者との心理の交錯、折衝于格は遺憾なきまでの精細を以て描寫されてゐる。ストラホフ  
は之を読んで非常に感心した。『あなたの短篇は最も烈しい印象を起した。そして疑なき成功を得るで  
せう。』と彼は書いてよこした。『私の考では、是はあなたの作の中で最も圓熟したものの一つである。  
筋は今迄お書きになつたものゝ中で最も面白い最も深刻なものゝ一つである。私はトルソツキイの性  
格に就て言つてゐるのです。衆人は殆ど理解しないかも知れないが、人々は其をよんでゐます。そし  
てこれからも一生懸命に讀むことでせう。』

ドストイェフスキイはひどい絶望の中にあつても、文學に對する創造力は少しも傷けられなかつた。  
彼は更にルスキイ、并エストニク誌の爲に「悪靈」を書き始めた。彼は餘りに續けて書き過ぎる爲に、

友達に金の爲に亂作するのだと疑はれるのを恐れて斯う言つてゐる。『私が新粉細工の如く小説を作つ  
てゐると思つてくれ給ふな。私の書くものが例へどんなに醜く嫌なものであるとしても、不幸なる  
私、作者たる私に取つては、此小説の觀念と其中に捧げた勞作とは世界に於ける如何なるものよりも  
最も尊ひものである。其は新粉細工ではない、最も親しき最も久しき以前より抱いてゐた觀念である。  
宜しい、私は其を拙いものにせんとしてゐるが、如何とも仕方がないのです。』境遇が彼を決して亂作  
せしめたのではなかつた。天才と想像力の豊富が境遇の必要に迫られて益々多く迸り出でたのに外な  
らなかつた。彼は絶對的な境遇の爲に創造力を沮まれることなく、却つて益々鼓舞され勇氣を倍加せ  
しめた。彼は殆ど無盡藏の力を有してゐたのである。彼はあれ程絶大の努力を以て、人々から亂作と  
思はれるまで書きに書いても、未だ凡ての自分の思想を吐き盡すことは出来なかつた。後にストラホ  
フは下の如く物語つてゐる。『實際小説に就ては、彼が腹案を立て、そして時によつては久しい間考  
へ續けてゐたものゝ十分の一しか書かなかつたのである。其中には彼が詳細に互つて然も非常な熱心  
を以て語り聞かせたものもある。加ふるに非常に多數に上つた草稿もあるが、彼は其を書き終る丈の  
時を有してゐなかつたのである。』と。ドストイェフスキイは又書簡集の中にストラホフに宛て、由白



してゐる。「私は一生涯金の爲に働いた。一生涯絶えず困窮して暮して来た。……然し、同時に打ち明けて言ひますが、私は金の爲に小説の主題を想像したことは一度もなかつた。前もつて定つた條件で一度書くことを承諾して、義務を満足せしむる爲めにしたことは一度もなかつた。私の主題が頭の中に既に出来上つた時、私が眞に書かうと思つた時、書く必要があると認めた時、前借で賣つて——そして、約束したのです。」

ストラホフはまだドストイェフスキイが一つの作に取りかゝる迄には非常に間があつて考へてゐる時間の長かつたことを言つてゐる。「ドストイェフスキイは仕事をいつも切端つまるまで引延してゐた。懸命に書いてやつて原稿を書き上ぐることの出来るだけの時間が辛うじて期日まで残つてゐると言ふ時になつて——彼は始めて仕事にかゝつた。其は一種の怠惰であつた。然も甚だ大きな怠惰であつたとも言へやう。然し其は世の常の怠惰ではなく、一種特別な正に「藝術家の怠惰」であつた。彼の心の中には、不斷の労働、小休みなき動搖、思想の生長が行はれてゐた。其故に此内面の仕事から身を離し、外面の仕事即ち執筆を始めるのが、彼には常に極めて困難なことだつたのが、元より其深い理由であつた。彼は打ち見た所忘れてゐながらも實際にあつては間断なく働いてゐたのだ。此内面の仕事

をしてゐないか、若くはほんの僅しかしてゐない人間は彼等が通常喜んで従事する、外面の仕事がないと退屈して了ふものである。——ドストイェフスキイは其れに反して、此彼の内心に波うつてゐる思想と感情との過剰の爲に、決して退屈することはなかつた。そして外面の怠惰を何よりも尊重してゐた。彼の精神の中には古い計畫が成熟し展開してゆく傍、絶えず新しい人物新しい作品の計畫が浮んで来たと言つていゝ。——彼は殆ど例外なしに夜分に筆を取つた。十一時後、家中が皆寢靜まつた時に、彼は一人サモワアルを持つて彼の書齋に止つて朝の五時六時まで書いた。」之を以て見てもドストイェフスキイが作をする毎に、如何に苦心する所があつたかと察せられる。彼が前借をして前日までに書き上げるのに推敲する暇がなく、彼の作を徒らに冗慢で錯雑であると批難する人々の正鵠を得てゐないのは之を見てもよく解るのである。子供が病み、其病氣が治つたかと思ふと、妻のアンナが郷愁に悩んでヒステリツクとなり、一難又一難、不幸の重り來つた時に、ドストイェフスキイは一日も早く本國へ歸らんとあせり乍ら仕事に熱中した。此間に立つて繼子のボオル及び親友のマイコフが債権者のステロフスキイに「白痴」の著作権を賣つてドストイェフスキイを歸國せしめんとしたが、債権者の強慾な爲に失敗に歸したことが書簡集の中に仄見えてゐる。一八七〇年の末の手紙に、彼は年

來心の奥底に藏つておいた大作「大罪人の一生」(晩年の作「カラマゾフの兄弟」の別名)の腹稿を立て乍らルスキイ・并エストニク誌の爲に「悪靈」を懸命に書き終らんとあせつてゐた。「私の生活は恐しい、」と彼は嘆いた、私が若し晝も夜も働くことを強ひられたら、私は悲觀して死んで了ふでせう。私の健康はいつもの通りです。一事件が起つて私を悩ましてゐます。其はアンナ、グリゴリエヴナが常に病氣に苦んでゐることです。私の娘は快活で健かです。……私は殆ど自分の力以上の仕事を背負はされてゐます。私は巨大な小説を書くことを考へつきました、(問題小説です、其は私に取つては大變難しいものです)で私は始めは脱稿するのは譯もないと信じてゐました。其でゐてもう二度以上も書き方を變へました。そして私は其問題が止む能はざるものだと言ふことを知りました。其理由からして私は自分の小説に非常に不満を感じるやうになつたのです。』

かゝる苦心をしながら、彼は一方に熱心に歸國の策を講じた。彼は第一に愛する妻の健康の爲に、第二は創作の努力を養ふ爲に、今は一日も外國に暮すことは出来なかつた。四年間の長い間外國にゐて、親しい友達や見馴れてゐる風物に接せず、愛する物から遠く離れてゐて、歸心は益々矢の如くになつた。丁度此頃、債權者のステロフスキイはドストイェフスキイに無斷で「罪と罰」の新版を發行し

た。ドストイェフスキイは之を廣告で知つて、自分を牢に入れると脅かした強慾非道なステロフスキイを此度は逆に利用してやらうと思つた。彼はマイコフを頼んでステロフスキイに「罪と罰」の原稿料を拂はしめんとしたが、ステロフスキイの應ぜぬのを見て止むを得ず損害賠償の訴訟を起さうと思つた。彼はグビインと言ふ辯護士を代理人として頼んで事件を取り扱つて貰つた。

此時に當つて、ペテルスブルグでは、親友のストラホフは批評家として立つてゐたが餘り成功しないので、文學を捨て、キエフに赴かんとしたが、ドストイェフスキイは切に之を止めて最初の失敗にこりないで何れまでも批評家と文壇に立たんことをすゝめてゐる。ストラホフは、稍もすればツルゲネエフやベリンスキイを賞揚せんとする傾向があるので、ドストイェフスキイは幾度となくストラホフの説を駁して、ツルゲネエフは外國にかぶれた爲に自分のいゝ天分を失ひ墮落したこと、ベリンスキイはキリストやブウシユキンやゴオゴルを悪く言つて、如何に自分の考への間違つてゐるか、如何に自分の説の醜いかを知らずに自惚れてゐたことかと言つてゐる。自分の祖國を輕蔑し、民衆を眞に、解しなかつた彼に對して、ドストイェフスキイは理此時更に猛烈に、「悪靈」の中に攻撃してゐる。「悪靈」は一八七一年の二月から翌年に渡つてルスキイ、并エストニク誌に連載された大作である。

マイコフは此作中にルウチンからバザロフまでツルゲネエフの古い作の主人公がゐると言つたが、其批評は正當ではなかつた。ドストイェフスキイはツルゲネエフの主人公と外見似通つた人物を描かないではなかつたが、後者より更に深く突込んで描いてゐた。彼は虚無主義者や社會主義者が自分と正反對の位置に立つてゐるにも係らず、ツルゲネエフよりも一層深い理解力を示した。ツルゲネエフの「父と子」はロシアの新舊兩時代を批難せんとして書かれたものであるが、其中に兩時代の深刻な理解もなければ、辛辣な觀察もなかつた。之に反してドストイェフスキイは、反對なる自由主義者の説を完膚なきまでに鋭い批評眼を以て解剖してゐると共に、神、祖國、民衆に對する愛を熱烈に溢るゝばかりに現はしてゐる。又彼はベリンスキイの徒をシャトフなる人物を籍りて批難し、「彼等は只指の又からロシアの民衆を覗いてみたのだ……特にベリンスキイに於てさうだ。其はゴオゴルにやつた手紙でも解る。あの男はクリロフの昔癖に出る穿索好きの爺さんのやうに、博物館へ行つても象を見ないで只佛蘭西の社會主義者の蝶にばかり氣を取られてゐたのだ。其以上には出ない」と言ひ、ツルゲネエフに對しては、カルマジノフなる人物の下に其虚榮に満ちた墮落を攻撃してゐる。「カルマジノフに就て、世間では、彼が貴族社會又は勢力ある人々との關係を、彼自身の魂よりも大切に思つてゐると

思ふ評判であつた。彼は人々に會ふと丁寧で心情を吐露して人を魅する。……噂によれば、彼は育ちもよく作法も十分心得てゐ乍ら、文學と言ふものに一番興味を持たない交際社會にあつてすら、作家としての虚榮心を隠し切れない程苛々してゐることである。誰でも彼の顔を知らぬ顔をして彼を驚かせば彼は狂人のやうに懊惱して必ず復讐せずにはおかない。『ツルゲネエフはかゝる猛烈な批評を浴せかけられて、ドストイェフスキイを卑劣であると怒つた。彼はミリウテイン夫人にやつた手紙の中で此不平を洩した。』私はドストイェフスキイのやり方には少しも驚かされなかつた。私は斯様な憎惡を叫び起すやうなことは何にもしなかつたけれども、我々が二人共若くて、文學の活動を始めた時から、彼が私を憎み始めた。然し、理由のない感情と言ふものは凡ての中で最も執着の強いものであると言はれてゐる。ドストイェフスキイは戯作よりも、もつとくだらないものを作つたのだ。彼はカルマジノフなる假面の下に、私をネチヤイエフ(殺人罪を犯せる政治犯人の名)の秘密な味方として表はした。私が嘗て彼の經營した雑誌に發表した唯一つの小説、——其に對して彼が私に手紙を書いて感謝と賞讃とで壓倒した小説をば、此戯作の中に選んだと言ふことは注目に價する。私は未だ彼の手紙を持つてゐる。其を今發表するのは慥かに面白いことだらう。然し、彼は私が決してそんなことを

するものぢやないと言ふことを知つてゐる。私は彼が斯様な厭な感情を満足させる爲に、疑ひなき大才を用ひたのを氣の毒に思ふ。彼は自分の才を黄表紙に墮落させて了つたから、全く彼は自分の才をば、非常に高く評價してはゐないのだ。』此手紙の中にはツルゲネフの巧妙なる辯解と比喻とが遺憾なく表はれてゐる。然し、其中におびたゞしい自尊と輕蔑の含んでゐることも伺はれる。ドストイェフスキイの上述の猛烈な攻撃を聞いて、或人はベリンスキイに對して忘恩の罪を犯してゐると言ひ、或人はツルゲネフの藝術に對する嫉妬であると言つてゐる。何れも眞に彼を理解した言と言ふことは出来ない。ドストイェフスキイは博い愛を胸に湛へてゐたものゝ、信仰をそしつて神を冒瀆するもの眞理に反對するもの、他人に害をなすものに對して厭くまでも攻撃するのを止めなかつたからである。

「惡靈」はロシアの若き時代の人々が西歐の虛無思想にかぶれて、恰も毒酒に魔酔したかの如く、惡靈に馮かれし人々となつた事件を詳細に取り扱ふと共に、ドストイェフスキイの心の遠心力をなす人間神の憧憬を遺憾なく表現した小説である。今迄の小説にも彼は馮かれし人々を幾度も描いた。例へば「罪と罰」に於ける人殺しのラスコルニコフ、強姦を犯さんとして後に自殺したスキドルガイロフ、「白痴」に於ける利慾に眼のくらんだガアニヤ、嫉妬から殺人の罪を犯したラゴジン等皆之れである。

然し、「惡靈」に於ては更にかゝる人々を辛辣に精細に描寫し、解剖してゐる。

主人公の一人スタフロギンは惡靈に馮かれた人間の一人であつた。彼は始め「無神論者はロシア人ではない、無神論者は直ちにロシア人でなくなるのだ」と言ひ、また、ロオマ舊教が地上の王國を掃つやうになつた爲に惡魔の第三の誘惑に服従し墮落して、歐洲全體に却つて反基督思想を宣言し、歐洲全體を腐敗せしめたのだと嘆いた程の信仰を持つてゐたが、彼は實は極端から極端に走る人であり、一朝にして彼の思想は一變し、全然昔と正反對になつた。彼は今や社會の虛無主義者よりも更に深刻なる宇宙の虛無主義者となつたのである。超人主義のキリロフは彼を「神を信ずるとしても、自分が神を信ずることが出来ず、又信じないとしても、自分が神を信じないと言ふことが出来ない」人間と言つてゐる。彼は佛蘭西のサアド公爵も三舎を避ける變態性慾の奴隸となり、シャトフの妻を誘惑したり、人の鼻を引き廻したり、耳を嚙んだり、秘密結社に這入つて欲望を縦しまにしたり、小兒を誘拐して墮落させたり、其他種々の犯罪を犯したと稱せられる。然し、彼の犯罪の中には殘忍の中に潜かに輝く眞珠の如きものがある。神を失ひ、偉大なる崇拜物を失つた彼は道德の標準をも認めることが出来なくなり、犯罪を犯罪と思ふことが出来なくなつた。然し、人間としての良心を失ひ切ること

が出来ず、煩悶に又煩悶を重ねる。終に彼は善良な氣の狂つた女マリアを憐んで秘密結婚をするに至る。又自分の妻のマリアを誘惑されたシャトフが彼に向つて、「それぢや、あなたが淫蕩な默的行爲と例へば人類の爲に生命を犠牲にするやうな偉大な功績との間に何等の區別を認めない、二つの極端の間に同一の美と享樂を見出すと言はれたのは本當ですね、」と言ひ、又、「あなたは何故あんな卑しい恥づべき結婚をしたか知つてゐますか、單に無恥と無感覺とが天才の極に達したからですよ。あゝ、あなたは淵に立つて躊躇する人ではなかつた。あなたは頭を逆にして飛び込んだ。あなたは殉教者の情熱と悔恨に對する慾望から、倫理的肉慾に従つて結婚したのだ。全く糜爛した神経のせいだ、」と攻撃した。敬虔なシャトフはスタフロギンに對して、「大地を接吻せよ、涙を其に注げ、そして宥恕を祈るがいゝ、」と切にすゝめるのである。社會主義者のピエエルはスタフロギンを以て偶像に祭り上げ、之を利用して自分の陰謀を遂げんとする。然し、スタフロギンは之に應じない。一切のものに幻滅を感じた彼は外國に逃れ、自分の破られた心を救はんとしたが、日夜苛まるゝ懊惱の爲に其も絶望に歸し、遂に自殺して了ふのである。

女主人リザベタは近代的な煩悶と戀愛との化身である。彼女のスタフロギンに對する憎惡は最も深

い過度な愛情から發してゐる。彼女の心には燃ゆるやうな愛と烈しい憎みとが並行してたぎつてゐる。最も深い病的な愛は又最も烈しい憎みを呼び起すものである。彼女がスタフロギンを憎み乍らも、愛することを止めることが出来ない致命的な戀は、心理解剖の鋭敏なひらめきの中に心の波の一靜一動によつて細かに描寫されてゐる。彼女は又許嫁のモオリス、ニコライエ井ツチを愛してゐる。然し、此愛はスタフロギンの憎惡から来る反動にすぎず、其中には愛以上の最も過度な烈しい憎惡が含まれてゐるのである。彼女は結婚の祭壇の上からでも愛する男の許に逃げる女だとモオリスが言つたのは眞理であつた。彼女は遂に世の中から血を吸ふ鬼として恐れられてゐるスタフロギンの下に一夜走つて行つて、戀の爲に自分の未來ある長い生涯を只一夜に縮めて了ふ、そして男が自分を愛してゐないことを知つて、スタフロギンの許を飛び出し、遂に火事場で人々の爲に殺されて了ふ。

また副主人公の一人なるキリロフに至つては人間神に憧れ、自ら超人たらんと努力した徹底した人間の思現を體現してゐる。ドストイェフスキイの敬虔な信仰の裏にひそむ人間神に對する渴望は、此人物の中に極度の深い思想となつて描かれてゐる。ニイチエがドストイェフスキイを稱して我師であると言つたのは、斯かる思想をさしたものであらう。キリロフは人生觀を述べて言ふ、「生は苦痛である、

人間は不幸である。今人が生を愛するのは、人間が苦痛や恐怖を愛するからである、とさう言ふことになつて了つた。こゝに虚偽がある。生は苦痛や恐怖の爲に與へられたと言ふのは虚偽である。人間は未だ達すべき所に達してゐない。今に幸福な衿を持つた新しい人間が出来ませう。さう言ふ人に取つては、生きてゐやうがゐなからうが同じことである。其人は新しい人ですよ。苦痛と恐怖とを征服する人は彼自身神になる。そして此所謂神は存在しなくなる。……彼は存在しない、けれども彼はある。石には苦痛がある。けれども石の恐怖には苦痛がある。神は死の恐怖の苦痛です。苦痛と恐怖とに打勝つ人は彼自身神になるのです。さうすれば新しい生がくる。新人が出る。何でも皆新しくなる……つまり歴史は新しい二つの部分に別れる、ゴリラから神の滅亡まで、神の滅亡から……此世及人間の物質的改造まで、人は神になる。そして物質的にも改造される。最高の自由を望むものは敢て自殺しなければならぬ。敢て自殺するものは虚偽の秘密を見破つたものです。其外に自由はない。其丈だ、其外に何もない。自殺を敢てするのは神ですよ。彼は斯くて進化論を否定して此の世の時間を絶した時間のない、現在の永遠を夢み、人間が不幸なのは自分が現在幸福であることを知らない所から起ることを指摘し、未來に於て人間が善であることを教へて此世をお終ひにする人間神の出現を預言

する。彼によれば、人間は自殺を免れて生きてゆく爲にいろんな形式に於て神を發明した。凡ての世界歴史は結局此一事に歸する。然し、彼一人は人類の歴史に於て神を發明しない只一人であつて、神がなければ、彼自神が神とならなければならぬ。即ち人間神たる彼に取つて自我意志を示すことが萬事である。然して自我意志の最高潮は自分の手で自分を殺すことにあるのである。半ば狂人のやうになつた彼は、自分の思想を徹底させる爲に、ピエエルがシャトフを殺した罪を我身に引き受けて自殺するのである。

もう一人の副主人シャトフはドストイェフスイの愛國的な敬虔な一方面的思想をよく表はしてゐる。彼は始めピエエルの企畫してゐる社會主義者と交つてゐたが、後には彼等の思想の誤つてゐることを自覺し、彼等と絶縁して、神の愛に生きる。彼は「世界を征服しやうと思つたら汝自身を征服せよ、」と言つて、社會主義者虚無主義を攻撃し、民衆及び神の愛を説き限りなき同情と憐憫の人となる。彼はスタフロギンと駆落して後に捨てられて歸つて來た自分の妻を心底から喜んで迎へ、勞はり慰める。不貞な妻はスタフロギンの子供を其夜産む。然し、妻の凡てを許したシャトフは恰も自分の子供が生れたかのやうに大騒ぎして深夜町中を走り歩いて産婆を叩き起す。赤坊が生れた時は姦夫の子を

自分の子だと稱して喜び乍ら、「二人しか無かつた所へ又第三の人間が生れて来た、人間の手で作つたものとは違つてすつかり仕上げのかゝつた新しい魂が、新しい思想が、新しい愛が……全く恐しい位だ……此世に之より崇嚴なものは何にもない」と言ふ。彼は、社會主義を攻撃し、虛無主義の根底の無神論から出發してゐるのを非難し、半眞理的な科學に誤まれ毒されてゐるのを猛烈に指摘する。遂に彼は虛無主義者の秘密を暴露すると言ふ嫌疑をうけてビエエル等に暗殺されて了ふ。社會主義者ビエエルは暗黒な時代の空氣に誤まれた人間で、陰謀の露顯を恐れて外國に逃げて了ふ。

斯かる新時代の過渡期の思想と、古いロシアの健全な思想との連鎖をなしてゐると思はれるステパン、トラフイモフツチは、ドストイェフスキイの最もユウモアを表はすに成功した人物で、彼の獨特の創造である。彼は「惡靈」の複雑せる思想を一括して結論を下してゐる副主人公の一人である。露西亞と言ふ大きな病人の中には惡靈が潛んでゐて、人々は此に取り憑かれて深淵の中に落ち、神を失ひ、愛を失ひ、民衆を失ひ、偉大の觀念を失つてゆくのを彼は嘆き、下の新約聖書にある文句は此處に實現されずにおかないと言ふ。「此處に多くの豚の群、山に草を食ひてゐたりしが、彼等其豚に入らんとを求めれば之を許せり。惡鬼其人より出で、豚に入りしかば、其群烈しく駆け下り、山坡より湖

に落ちて溺る。牧者共、其ありしことを見て逃げゆき、之を邑又村に告げたり。人々其ありしことを見んとて出で、イエスの許に至れば惡鬼の離れし人衣をつけ、たしかなる心にてイエスの足許に座せるを見て恐れ合へり。世の中に容れられず家出した彼は神のみが人間の愛し得る永遠のものであり、斯かる愛の生存より尊いことを説き、永遠無限の觀念を失つては人間は生存し難きことを説きつゝ旅の中に病死して了ふ。

「惡靈」は最も露骨にドストイェフスキイの思想態度を表はした小説である。其處には彼の深い信仰と烈しい解剖と火の如き愛と徹底した思想とがある。彼は顛へたる微妙な神經を以て、ロシアの病氣の大きな謎を解いた。此中にひそむ中心思想は神と人間神との葛藤たる人生の問題を解決せんとしたにある。彼は惡靈に憑かれた人々即ち反基督的の人物を借りて來て、最も烈しくキリストを否定せしめたが、基督は凡ての障碍の雲を排して聳然と立てゐることを示した。キリロフは人間は神を持つつか自分自身神とならずしては生きてゐることが出来ないと言つて、神を持たない彼は自分自身が神たらんとしたのである。彼は「白痴」の中のミュイシキン公爵と正反對の道歩いて神に到達せんとした。此超人の思想こそ、ドストイェフスキイの敬虔な信仰の背景を形づくるものであり、彼の天才

の蓋々として發動してゆく力の沮むべからざる勢を示すものである。彼の心には常に民衆に仕へんとする心と民衆を超越せんとする心と相拮抗し葛藤してゐたのである。此二重人格は、天才の精神にあつては常に烈しく火花を散らして戦ひ争ひ合つてゐなければならぬものである。其は偉大なる煩悶である。神人を崇拜する彼と、超人を憧憬する彼と何れが本當であらうか。自分は其何れもが本當であり、眞理であると言ひたい。愛他主義の極緻なる神の愛、個人主義の極緻なる超人の愛とは果して兩立すべきものであらうか。此二重人格を一致融合せしめ、其間に何等の矛盾衝突をなくする爲には、尋常一様の努力から出来るものではない。ドストイェフスキイは、即ち此二大思想の完全なる融合をはかる爲に、此小説に於て、過渡時代のあらゆる問題を研究し最高にして無邊なるの愛に達する道の種々の障碍を解決せんとしたのではあるまいか。「悪靈」一卷の中に表はれた神と悪靈との烈しき争闘は、實にドストイェフスキイの凡ての作に見られる悲劇であり、之が解決の爲に彼は一生の努力を費したものと見ることが出来る。時代の思潮と人心とを洞察する力と、恐しきまでに傑れた寫實の手腕を以て、ドストイェフスキイは、かゝる困難なる形而上の抽象的な問題を、最も具體的に描き出すと同時に最も熱烈に此小説の中に生々と表はしてゐるのは、さすがに天才の力である。「悪靈」は未

だドストイェフスキイの動搖せる苦しき努力のあらはれであつて、彼の根本の解決的思想を見ることが出来ないが、此最後の偉大なる解決は、晩年の傑作、「カラマゾフの兄弟」の中に見出すことが出来るであらう。此「悪靈」の原稿のある數章は、官憲の忌む所となつて、發表を許されず、今はモスコウのドストイェフスキイ博物館に他の禁止された文章の斷片と共に保存してあると言ふ。



## 十四 愛の光

祖國へ歸る——妻アンナの家政整理——「青年」——「一作者の日記」——青年男女と文通——「アンナ、カレニナ」の批評——基督教徒と共產主義者の區別——一生の記録

ドストイェフスキイの間斷なき生活の不安、障礙、苦痛は外國にゐて益々増してゆき、祖國に對する郷愁と憧憬とは苦しき程彼を悩ました。四年間の外國生涯は彼に酷たらしい印象を残した。そして、露西亞及び其民衆を愛する情を益々深からしめた。彼は十分に外人と露西亞人とを比較することが出來、露西亞人の最も大なる獨創の力を認むることが出來た。

ドストイェフスキイは、外國にゐて益々キリスト教に對する信仰は深くなり、病的な怒りを押し鎮めることを學び、愛は次第に増大して行つた。「彼の中に隠れてゐるキリスト的精神を發揮したのは、疑ひもなく、外國にゐて、長い默想にふけてゐる時であつた。」とストラホフは「追想」に物語つてゐる。「その事實は、彼がロシアに歸つた時に、はつきりと友達に解つた。彼は堪へず宗教的事柄に話

を持つて行つた。一方では、彼のやり方も變つた。彼は非常におとなしくなつた。時として、完全な寛厚にも近づいた。彼の顔付でさへ、そう言ふ精神状態をあらはした。彼の唇には、柔しい微笑があらはれてゐた。」

一八七一年七月八日、ドストイェフスキイはステロフスキイ等債權者達との間に、ある條件の下に和解が成り立つたと見えて、長らく離れてゐた露西亞に歸ることが出來た。此時の事情はアンナ、グリゴリエウナが物語つてゐる。彼はドンデンより歸る前に、質に入れた妻の貴重品、眞珠毛皮の着物などを取り戻さうと思つたけれども、それは流れて了つて不可能であつた。彼等夫婦は、負債を償却したり、旅行の準備を整へたりした後、數留しか残らない金を以てベテルスブルグに到着した。妻は既に妊娠して臨月になつてゐたが、ベテルスブルグに到着して六日目に、男の子フェドツカを生んだ。其時、妻のアンナが母から受取るべき遺産も、陰謀の爲めに人に取られて了つた。斯くして、彼等親子四人は相變らず貧窮を極め、友達の助力に仰がねばならなかつたが、長篇「惡魔」の稿を終へて、之を本屋に賣つたりして、少しづつ借金を返し乍ら、漸く生活を支へた。

ドストイェフスキイは、此時から家政を全く妻の手に渡して了つて自分は仕事に全力を傾注し、今

迄彼を苦しめてゐた家の暮し向きに直接當らないことになつた。此事は彼等四人の生活を幸福に向け  
た。今迄しんねり強く持ち耐へてゐた辛苦艱難は漸く消えて、平和の光は漸く指して來た。妻のアン  
ナは賢明で勇氣があつた。彼女は鋭意家政の整理につとめ、一家の經濟をうまく取つた。彼は後であ  
る女の手紙に答へて、『善良な妻となり、殊に善良な母親となることは、婦人に於ける最高目的である』  
と言つたが、此理想の最高模範は即ち彼の妻であつた。彼はロシアの女性を未來のロシアを負ふもの  
として、非常な希望を屬したので、徒らに舊式な賢母良妻主義を主張したのではなかつた。彼女は女  
としての義務を果した後始めて女性の權利を向上せしめることを確信した。妻の手腕によつて、此處  
に全く一生涯自分を脅かしてゐた物質上の缺乏から、彼は漸次逃るゝことが出来るやうになつた。ア  
ンナ、グリゴリエヴナは、一家の收入を増す計畫として、始めドストイェフスキイの著作の新版を發  
行した。其爲に一八七三年一月には「惡魔」が三千五百賣れ翌年一月には「白痴」が二千、又翌年十二月  
には「死人の家」が二千、一八七六年には「罪と罰」が二千、一八七九年十一月には「虐げられ踏みつけ  
られし人々」が二千四百賣れた。此後の賣れた有様は獨逸の傳記作者ホフマンが、ドストイェフスキ  
イの死後に發見せられた計算書によつて、詳細な表を掲げてゐる。一八七七年には彼の著作の收入全

部千八百七十一留餘であつたものが、毎年漸次増して行つて、一八八〇年の死ぬ前年に至つては七千  
八百十一留餘に上つてゐる。之で見れば、ドストイェフスキイの晩年十年間は、後にゆくに従つて收  
入を増し、負債を漸次償却して、物質上の困窮から全く逃れ得たことが證明される。彼の死後は、其  
遺族の年收は、六万五千ルブル以上の額に上つたさうである。

彼は外國から歸つた翌年、コンスタンチンノオブル、ギリシヤ、イエルサレムの等の東方諸國を旅  
行して、著作を書きたいと思つたが、其は實行されなかつたものと見える。翌一八七三年彼はメステ  
エルスキイ公爵に招聘せられグラスダニン誌の編輯人となつて、月給二百留及び書いたものに對して  
別に原稿料を受けることとなつた。ここに生活は安定を得て、彼はヴラジミル教會に迄き鍛冶屋町の  
小さい二室に住み、誠實な妻と愛する子供二人と共に、平和な都會の生涯を送つた。姉娘のリユウバ  
の身體が弱かつたり。又自分の持病の癩が起つたりしたので、此年から夏はストラヤ、ルサに子供と  
行つたり、エムスに行つたりして暑を避けて暮した。彼はグラスクニン誌に「作者の日記」の始めの  
六章と「外國事變の考察」と言ふ論文を掲載した。其翌年には長篇「青年」の創作を始めた。ドストイ  
ェフスキイは、今迄其神經質な怒りつばい性格と反對者を苛責しない攻撃の態度とで、人々から誤解を

うけた上に多くの敵をも作つたが、漸く名聲の高まるにつれて、彼の反對者までも、彼の天才の力を認むるに至つた。そして、此「青年」の出た時分に、最も大なる負債は償却されたのであつた。

「青年」は一八七五年久し振りで、彼の初期の作を掲載した雑誌オテチエストゴンニヤ、ザビスキ誌に連載された。ネクラソフの關係してゐた雑誌で、此時から、久しく途絶えがちであつた二人の民衆文學者の友情は復活した。此作は、「悪靈」と同じく基督教的愛の宗教に達せんとして達し得ないで苦しみ煩えてゐる過渡期の人々を描いた小説である。殊に若き時代の人々の心持を深い理解と愛とを以て描いたものである。「白痴」に於て一度廣い大きな愛に達した彼は、「悪靈」に於て最大の懷疑的見地より之を考へ、更に「青年」に至つては、否定より肯定に漸次推移せんとしつゝある歩みの跡を示してゐる。此作は露西亞の懷疑期に次げる過渡期の問題を解決せんとしたる試みに於て、「悪靈」に續ける作と稱することが出来る。

主人公ドルゴキイは偽りの父を父として育つた私生兒であつた。此爲に彼は小さい時から、多くの人々から輕蔑され迫害されたが、その爲めに、ひねくれた青年となつて、世の中の几ての人々と縁を絶ち、自分の考へにのみ閉ぢこもらうとする。彼は高潔な理想を抱いて、變つた人間になり、新ら

しい生活を始めやうとするけれども、ロシヤ的な惡の呪ひに苦しめられて、心の美は常に行爲の醜さの爲めに裏切られて了ふ。そして、自分の妹の戀人である意志の弱い若いソコルスキイ公爵と賭博をしたり、放縱な生活を送る。妹のリザは可憐な少女であつたが、心の中には強いあるものを藏して居り、常に、弱いソコルスキイ公爵を絶望と墮落から救つてゐるのである。此リザの輝いた若さと力なくしてはソコルスキイは一日も生きてゐることが出来ないであつた。彼等兄妹の眞の父はエルシロフと言ふ地主であつたが、法律上の父はエルシロフの農奴の信仰深いマケエル、イワノギツチで犠牲的な愛の深い、神に奉仕する巡禮であつた。妻のソオニヤは死んだ父の遺言によつて彼と形式的に結婚したのみで、實際に於ては地主のエルシロフを愛してゐること彼はを知り、妻の幸福を思つて、彼女をエルシロフに全然與へて了つた。妻はマケエルに對しては限りなき尊敬を抱いてゐるが、エルシロフを愛することは更に深く、几てのものを抛つても愛することを止めることが出来なかつた。彼女は外國に於て、娘のリザと共にエルシロフに遺棄されたことがあるが、其を少しも恨まず自分の身を犠牲にすることに満足してゐたこともある程である。ドルゴキイは此事を知つてゐたので、哀れた母や妹に對して同情の念に禁じ得なかつたが、始めエルシロフに對して強い憎惡と忿怒を感じる。彼

は幼年時代には、エルシロフを崇拜の對象として育つて来たが、エルシロフの肉慾的で、利己的で卑怯であると言ふ噂をきいて、却つてエルシロフを烈しく呪ひ、幾度となく喧嘩をする。然し、其は只噂文で、實際はエルシロフが高潔な行爲の爲あ却つて誤解されたものであることを知つて、こゝに實際の父子としての和解を生ずる。然し未だ、エルシロフの眞意を深く解することは出来ない。

此小説に於けるもう一人の主人公は、ドルゴルキイの眞の父エルシロフである。彼は完全にロシア苦を體現して迷路と難局にさ迷つてゐる、氣紛れな、狂ひじみた、然し人類の愛を解してゐる思想家であつた。けれども、彼は人類の爲に己の凡ての個性を犠牲にすることは出来なかつた。彼は自己の心の中にひそむ愛他的欲望と自我的欲望と一致するまでには達してゐなかつた。他人の妻を奪つたのも利己心からのみではなく、不幸な彼女に對する憐憫からでもあつた。彼女を捨てたことのあるのもロシア的な憂鬱の心の發作的からであつた。彼は憐憫から、白痴で私生兒を生んだ娘と結婚しやうともしたことがあつた。彼は他人を愛し憐まんとして幾度か自分の欲望の爲に妨げられ、又、他人から誤解される。彼は自分の私生兒ドルゴルキイをも愛してゐたのだが、ドルゴルキイが久しく自分を理解することが出来ないを苦しむ。二人の間に遂に理解の生じた時、エルシロフは己の此私生兒に遂に

眞情を吐露し、己れの美しい夢を語る。『俺は非常に奇妙な夢を見た。ドレスデンの畫廊には、ロオレンの畫いた畫がかけてある——目錄には「アシスにガラテ」とあるが、俺は其を常に「黄金の時代」と呼んでゐた。夢に現はれたのは此畫であつた、畫のやうなものとして現はれたのではなく、眞實の光景として現はれた。三千年前ギリシヤの多島海の一隅、青い穏かな波、島の花壇、遠方にある花の咲いた磯、夕日の下の魅するやうなパノラマ、其處は地上の樂園なのであつた。神々は人々と親しむ爲にオリンピヤを立ち出でた。……人々は歡喜と無邪氣の中に横はり、眠つてゐた。力の大過剩は愛と子供らしい喜びに變つて了つた。太陽は斯様な美しい子供達を讚美してゐた。俺が涙の滲み出た眼を開いた時も、尙其様がありありと見えるやうな氣がした。言ふべからざる幸福の感覺か、苦しい程俺の心突き透した。其は大なる人類の愛であつた。室の窓から、庭の繁みと花を通して、光が數條射して来て、俺を明るみで満たした。で、そこで、我友よ、そこでだ、俺が夢で見た歐洲人類の最初の日の没が、俺が眼覺むるや否や、歐洲人類の最後の日没と變つて了つたのだ。そこで歐洲全土に弔の鐘は響いて来た。俺は只戦争のことやチュイルイの火事に焼けたことを言ふのみではない、西歐の裝飾が遅かれ早かれ破壊して了ふと言ふことを知る爲には、そんなことは如何でもいゝのだ。然し、

古いロシアの歐洲人たる此俺は、其を承認することが出来ない。何故と言ふに、ロシアの思想には、其矛盾に相融合して了ふのである。斯様な思想を誰が了解することが出来るであらう。俺は只一人迷つてゐた。俺は個人としての俺を言ふのぢやない……ロシアの思想を言ふのだ。かしこには、恥辱と融和しない論理がある。かしこでは佛蘭西人は佛蘭西人に過ぎない、獨逸人は獨逸人にすぎない、其は彼等の歴史の如何なる時代よりもつと悪い頑固さでさうなのだ。されば、佛蘭西人は決して彼の佛蘭西にそれ丈の悪をなさず、獨逸人も彼の獨逸に對してさうだ。全歐洲を通じて、そこに只一人の歐洲人もないのだ。チュイルリーの火事は罪惡であると、その放火者に言ふことが出来る資格のあるものは只俺一人だ。此非惡がさうなるべきものであつたと、かの血なまぐさい保守黨に言ふ資格あるものは俺只一人だ。即ち俺は「只一人の歐洲人だ。」もう一度言ふが、俺は俺のことを言つて居るのではないのだ。其う言ふのは、ロシアの思想に就いてなのだ。即ち、ゾルシロフはかゝる愛を持つてゐた。國家通じて、更に其を超越した全歐洲、全人類の愛を有してゐた。彼がドルゴルキイの母の頬の凹んでゐるソオニヤを愛したのも、此爲であつた。彼がソオニヤ親子を捨て、セルゲイと言ふ公爵が誘惑し見捨てた哀れな氣狂の娘リデイヤと結婚しやうとしたのも此爲であつた。此娘の繼母の若い

アクマコフ夫人もゾルシロフを愛してゐたと言ふ噂もあり、またゾルシロフが其前にアクマコフ夫人に愛を申込んで拒絶せられたと言ふ噂もあつた。其爲か二人の結婚は繼母のアクマコフ夫人の激しい反對によつて妨げられ、遂に狂氣の繼娘は毒を飲んで悲惨な最後を遂げるに至つた。此時から、アクマコフ夫人とゾルシロフの間に烈しい憎惡は起つたのである。然し、此二人はお互に烈しく憎み乍ら、其底には最も強い愛を隠してゐた。ゾルシロフは彼女を愛し乍ら、愛すまいと心で努めた。そして、ソオコヤに憐憫を感じて、夫人に對する強い燃えるやうな強い狂熱を押へつけ、憎まう憎まうと欲したのであつた。

ドルゴルキイも亦アクマコフ夫人を熱烈に愛してゐた。彼はアクマコフ夫人の無邪氣な秘密の手紙即ち彼女が辯護士に自分の父ソコルスキイ公爵を精神病院に入れやうと書いた手紙を持つてゐたが、彼は此爲に彼女から悪い探偵と思はれて、ひどい侮辱をうける。それでも彼は彼女を崇拜し熱愛することを止めることが出来ない。彼は悪友の爲に誘惑されて、かのアクマコフ夫人の手紙を利用して戀を遂げると唆のかされるが、斷然として之をはねつける。彼の異母姉のアンナはアクマコフ夫人の父の金持の老いぼれたニコライ老公爵と勝氣な親切心から結婚せんとしてゐたが、アクマコフ夫人が之

を財産結婚であるとして反対してゐると見て取つて、此二人の女の間には暗々裡に激しい喧嘩が起る。アンナはドルゴルキイに哀願して、かのアクマコフ夫人の致命的な手紙を發表して父子の間を割き、自分を助けてくれと言ふ。然し、正義の爲には如何なることでもしやうとする。此生一本な青年は、アンナの言に少しも耳を傾けない。彼は一時アクマコフ夫人が他人を愛してゐるのを知つて嫉妬の發作に駆られ、彼女の手紙を利用して利己的戀愛を遂げやうと思つたことがあつたが、直ぐに後悔の念に襲はれて己の身を恥ぢる。そして彼は其手紙を綺麗さつぱりとアクマコフ夫人に何等の報酬なしに、渡さうと決心する。

女主人公アクマコフ夫人は悪い女ではなかつた。彼女はドルゴルキイに言はせれば、「太陽の如く」輝いてゐる女であつて、生を愛し、人々の幸福を愛してゐた。彼女は父の老公爵を氣狂病院に入れやうと書いたのは、悪い氣があつたのではなく、單に無邪氣な心から書いたものであつた。然し、其手紙が他人の手に渡つて自分が誤解されはしまいかと思つて、夜も眠れなかつた。彼女はドルシロフが之の手紙を利用して復讐しはしまいかと恐れてゐた。然し其恐怖の中にも深い愛を隠してゐた。彼女は膝き乍ら「乞食の如く、愛を求むるドルシロフの願ひを拒んで、後には彼の脅嚇を恐れずにはねつけて

了ふ。彼女は戀の爲に氣狂ひのやうになつたドルシロフに對して、今迄彼を尊い思想家として尊敬してゐた、そんなことをして自分の尊敬の念を亂してくるな。この尊敬をいまでも美しい夢として別れてくれと言ふ。ドルシロフが其では今迄自分を愛したことはないのかときくと、彼女は昔は彼を愛したことがあるけれども今は愛してゐないこと、今は一般の人類全體を愛するが如く彼を愛してゐるのだと言つて、男の脅迫から逃れてくる。

一方にドルゴルキイは、自分の愛するアクマコフ夫人が心中にはドルシロフを愛してゐるのを知つて、嫉妬の發作から彼女の秘密の手紙を利用して、自分と結婚せしめやうと思ふ。彼は酒に酔ひつづれて、悪人ランベルの家に宿り、遂に其手紙を盗れて了ふ。ランベルは、愛を拒絶せられた忿怒と煩悶の爲に狂人の如くになつたドルシロフと共謀して、アクマコフ夫人を脅迫し、三万留にて手紙を賣らんとする。然し氣の狂つたドルシロフはランベルをピストルで倒し、氣絶したアクマコフ夫人をも殺さんとする。そこへ嫉妬の發作から卑しいことをしやうとしたのを後悔したドルゴルキイは盗まれた手紙を取り返さん爲に駆けつけて來り、正に人殺しをせんとするドルシロフを必死となつて止める。遂にドルシロフは我と我肩を打つて其場に倒れて了ふ。斯くして、此悲劇の幕は閉ぢ、ドルシロフは

病氣から全快して、病的な情熱から醒め、ソオニヤと一所に幸福に暮すこととなり、ドルゴルキイも不純な慾望を去つて新生涯に入らんとした。

「青年」は渾沌とした懐疑の時代より、一道の光明を見出さんとした小説である。其は青年が未來の成長に達する爲に、經さるべからざる煩悶の時代である。かゝる暗黒の過渡期時代には、人々は愚かなことを繰り返したり、血氣にはやつたりする。然し、如何に彼等が馬鹿を盡したとしても、彼等の動作は眞面目な心から出てゐるのである。ドストイェフスキイは翌一八七六年クリスチナ、ダニロウナに逢つた手紙に「例へば私に取つて、此頃の最も重要な問題の一つは青年の時代でせう。其と同じ時に、二十年前の家庭とかけ隔つてゐる近代のロシアの家庭でせう。私はそう思つてゐます。然し、其と違つたものも未だ澤山あることと思ひます。……五十三歳になつては、先づ忘れては時世に後れて了ふと言ふことは雜作もないことです。即ちドストイェフスキイが「青年」を書いた動機もここにあつたらうと思はれる。彼は五十三歳に達したけれども、尙ロシアの新らしい青年を研究することに努めた爲に、かゝる深い理解を有するに至つたのである。此小説の中のリザの如き若々しい少女の愛を煩悶とを描いたことは、此青春に對する理解と同情がなくては出来ぬことである。彼は青年の暴風の

如き心の中に、未來を示す淡い一筋の光。他日の生長を約する小い芽生が隠れてゐることを看取し得た。此狂ひ易き一生の過渡期に、やがて大きな信仰となる小い心の谷川が、一步一步洋々たる未來の海を指して流れつゝあるのを認めたのである。

主人公ドルゴルキイが若い誤りから金持とならんと欲したのも、目的は金其物でなく、それから湧く力でもなく、力の平穩な孤獨と自由であつたのだ。彼は金持となつて此の世が自由になると言ふ意識丈で十分で、必しも自由に我儘に振舞ふ必要はなかつたのだ。彼は富を得たら最後の一錢まで之を社會に分配して了つたかも知れなかつた。彼の青年時代は生意氣で輕挑で狂ひ易かつたが、その中に未來の成長を約束する無限の光明があつたのである。この點から見て、この小説は纏まつた一つの小説とは見ることは出来ず、一つの未成品として價値のあるものである。

一八七六年より、「クラスダスン」誌を辭してドストイェフスキイは只一人の雜誌「作者の日記」を出し始めた。同じ題で數年前クラスダニン誌に出したものと同じ種類の文章をのせたのであつたが、今度は他人のものを載せず彼が只一人で書いて出したのである。彼はこゝに廣くロシアの青年を理解し、時代の思想を研究し、其が印象、感想、批評を洩らす所なく發表せんとした。クリスチナ、ダニ

ロウナに送つた手紙には、彼が此雜誌を發行するに至つた抱負と、彼が如何に若い時代の男女に興味を持つてゐたかが解かる。「二日前の朝、私の所へ各二十歳位の二人の少女がやつて來た。彼女達は入つて來て斯う言つた、「カレエム祭の日から私達はあなたと御知り合になりたく存じました。世間の人々は皆私達を笑ひまして、あなたが會つては下さるまい、會つて下つたとしても、何にも言つては下さるまいと申しました。然し、私達は、運をためさうと決心して、斯うして參つたので御座います。」私の妻が始め彼女達を引見した。其次に私が行つた。彼女は醫學校の學生であること、其學校には五百人も女學生がゐること、「彼女達は高等教育を受け直ちに有用な人物となる爲に學校に這入つたのです。」と言つた。私は斯う言ふ少女のタイプに未だ會つたことがなかつた。(古い虚無主義者のことは澤山知つてゐます。個人的に知つてもゐるし、研究もしました。)私は此少女と話した二時間程いゝ時を過したことがなかつた。何と言ふ單純で自然なことであらう、何と言ふ感情の爽かなことであらう。魂と心が何と言ふ純潔なことであらう。最も眞誠な眞面目さ、最も眞誠な歡喜! いゝですか、彼女達によつて、私は斯様な多くの他の人々を知ることが出來た。私はあなたに白狀しますが、其印象は非常に強く輝いたものであつた。然し、如何に其を書いたらよからう。青年に對する感謝の凡ての誠

凡ての喜びを以てしても其は不可能です。」

斯くの如く多くの青年男女と彼は廣き交通をなして、其思想を啓發し、時代を導き、眞理を發見し民衆を愛せんことをつとめた。殊に青春の動盪期の煩悶には非常に同情して、賢明な解決を與へてやつたことも屢々であつた。彼はロシアの未來の希望として、彼等に期待した。そして彼の時代の先驅者として及び指導者としての使命は世の中に始まつた。ドストイェフスキイを愛する人々は又彼が雜誌を發行して、天才を浪費し、以前のやうな失敗を繰り返しはしないかと恐れて、其れを止めるやうに忠告する人もあつた。然し、ドストイェフスキイは是等の人々に藝術は世の中のあらゆる事を觀察し理解しなければならぬからと答へてゐる。彼は怠らず露西亞及び世界の思潮を觀察し論及した。

「『作者の日記』は一八七六年より彼が死ぬ實際まで絶えず努力して書いた廣大なる印象と思想の集りである。凡ての人生の問題は此中に残りなく凡て反射されてゐる。一貫した思想として連続して發表したのではないが、折に觸 時に應じて書いた断片の中に、政治、歴史、哲學、社會、婦人、人種の問題を始め、彼の個人の經歷、社會と戰つた經驗、手紙を往復した不幸な人々に對す、同情、西歐とロシアの文明の比較、彼の人類に對すの愛、ロシア民衆に對する抱負に至るまで、ドストイェフ



スキイの耳に觸れ眼に觸れたものは盡く論じ盡し、眞に廣大無邊なる大思想家の心の底知れざる深さを示してゐる。彼の深淵の如き深い思想は如何程披瀝しても盡すことが出来ない。彼は尙多くの書くべきことを持つてゐたには違ひないが、彼には凡ての思想を残らず表はし盡すには、彼の六十年の一生涯にしては足りなかつた。然し、此日記にあらはした思想丈でも、如何に彼が人類の大同情者であり、大天才であり、大思想家であつたかは伺はれる。はかり知るべからざる力とは、眞に彼の如き力を言ふのである。此日記の中に、彼はベリンスキイやヘルツェンに對する批評、シベリア流刑の際に十二月黨人の妻達から聖書を貰つたこと、ロンドンで女の子の乞食に多くの金を與へたら、乞食は取りかへされはしまいかと思つて大急ぎで逃げて行つたこと、哀れな小い乞食に對してのロマンチックな空想、其外佛蘭西や獨逸の國民性を論じたり、信仰問題や婦人問題を研究したり戦争災禍を説いたり、ジョルジュ・サンを追想したり、トルストイの「アンナ・カレニナ」を批評したり、虐げられし人々に同情したり、プウシユキン、レルモンツフ、ネクラソフを論じたりして、數限りなく凡ての問題を提供してゐる。彼はまた多くの心を動す趣味ある物語を書いた。「ヨルカ日に基督の下にある少年」に虐げられた少年の死を描き、「百姓マレイ」に自己の経験と無智の百姓の愛を描き、「百歳の老婆」

に善良な老婆の死を描き、「戀人の夢」では、絶望した男が遂にその苦痛をも愛するに至つた經驗を描いた。一八七六年九月の日記には、彼は短篇「柔しき女」を出してゐる。此は哀れな貧しい女と結婚した質問の主人が、互に誤解し合つて烈しい衝突をし、同棲することを止める。終に主人が自分の悪るかつたことを悔いて、妻の前に膝づいて許しを乞ひ、二人の夫妻は再び生れ變つたやうに元の幸福な生涯にかへらんと思ふ際、妻は發作的に窓から身を投げて死んで了ふ悲しい美しい物語である。短い物語であるけれども、彼の藝術的なロマンチックな一面を表はした涙のこぼれるやうな哀れな物語である。彼は又自殺に就て論じた後に、「我論文は人生の最高觀念、即ち靈魂不滅を信することの必要かくべからざること」に觸れる。我は此信仰なくしては人生は解すべからざるものとなり、忍ぶべからざるものとなると言はんとする。」と言つて、自殺の智識階級に多くなつた原因は、科學が發達して信仰の無くなつたのに原因することが多く、人間が全く肉體と共に亡び、靈魂も滅亡するとすれば、世の中には人生の愛も人類の愛も無くなつて了ふと言つてゐる。

一八七七年の始めの日記には、世界の各民族は、人類の幸福を、出し、社會を更新すべきものは各我等であると考へなければならぬこと、民族の愛は人類の愛を基として起らなければならぬこと、か

る信仰によつた民族にのみ最高最貴の生活を望むべきことを説いてゐる。即ち、彼に於ては個人主義も民族主義も人類主義も、完全な調和に融合されて、其間に矛盾撞着が起り得ないのである。眞の愛によつて各民族が完全の調和に達すべきことが彼の理想であつた。彼が普通の盲目的な國家主義者でなかつたことは此言葉を以てしても解かるのである。又、ドストイェフスキイは、トルストイの「少年と青年」とを讀んで、「此は小さい小兒の心理の傑れたる研究である。」と賞めてゐる、然し、彼は「アンナ、カレニナ」には感心した所もあり、感心しない所もあつた。レフンが自分の主義の爲に財産を貧民に分け與へて、彼等と勞働を共にしやうかと考へる所を論じて、ドストイェフスキイは斯う言つてゐる、「君が狩し食し飲み怠けることに暇をつぶすのを不正なりと感じ、澤山の貧民を其程氣の毒に思ふならば、諸君の財産を返納して分け與へよ。凡ての人の爲に勞働せよ。神の仕事に働いて、熱心に力を盡したヴラスのやうにやれ。貧民の精神の教育をすることを考へよ。然し君の如く、凡ての人が自分の財産を民衆に分け與へたとしても、世界の全富人の凡ての富も、大海中の水滴に異らぬであらう。人間がお互に懷抱してゐる愛を成長せしめんと努めなければならぬのは、之が爲である。そこで、眞の富が大きくなるであらう。金や尊い飾りに宿つてゐる富ではない、我は人間の完全なる融合

と彼等及び彼等の家族が不幸に際して助けらるべきものであると言ふ確實とより生ずる富である。財産を返納するものは餘り多くないと言つてはいけない。君の如く振舞はんと欲する人は十分多くあるに違ひない。そして、仕事は進むだらう。眞實に言つても、大切なことは財産の分配にあるのではない。心の命する所を爲さなくてはいけないのである。心が民衆に財産を返せと命じたならば、返したがい。凡ての人の爲に勞働すべく命じたならば、急いで其を爲せ。然し、「俺は貴族たるを欲しない百姓の如く勞働せんと欲するのだ」と言つて、農具や車を直ちに握らんとする或夢想家の如く夢想してはいけない。若しも君が學者として貢献をなすことが出來ると感じたならば、大學に行くがい。多數者の爲に有益たり得ると認むる所の事をなし、人類の愛の爲に活動することが肝要なのである。」そして、「アンナ、カレニナ」の第八章に至つて、レフンが斯かる民衆に對する愛を有し乍ら、却つてロシアの民衆から離れ、孤獨を求めてゐるのを批難し、又レフンの如き人が如何程民衆と接觸しても決して民衆となることは出來ないと言つてゐる。然し、此批難はドストイェフスキイとトルストイの民衆を愛する方法の差から生ずるもので、根底に於て二人とも同じく熱烈に人類を愛してゐたことは疑ひを入れない事實である。只二人は愛の形式、方法、態度に多少の差を示したに過ぎない。此差を

除けば、其根底に於て此二大天才の思想の間に期せずして驚くべき多くの共通點があつたことは、彼等の作物を見れば容易く見出されるのである。例へば、「戦争と平和」のプラトン、カラタイエフの如き、アンドレイ公爵の妹マリヤの如きは、如何してもドストイェフスキイの作物にも表はれさうにも思へる。斯くの如き徹底な信仰と熱心な愛とあきらめ以上の徹底した自己犠牲の精神は、ドストイェフスキイの思想そのまゝと言つていゝ位に似通つてゐる。斯かる類似の點があるにも係らず、尙一致しない所ありとすれば、其は根底を離れた外形の問題にあつたのである。例へば、此頃露土戦争が起つて、トルストイが非戦論を唱へたのに反して、ドストイェフスキイはロシアが土耳其の虐政から同胞のスラヴ人を救はん爲に立つたのであるから、かゝる正義の戦争は差支へないと言つてゐる。彼は止むべからざる戦争を止めれば、戦争以上の大なる災禍が人類の上に及ぼすことを説き、罪なき子供や婦人を虐殺してゐる土耳其に對して、虐げられた人々を保護する爲に戦ふは、自ら復讐若しくは利慾の戦争と意味が異ると言つて、レヂンが徒らにかゝる不幸なる人々の有様を考へずに、非戦論を唱ふるの不可を説いてゐる。斯う言つたからとて、ドストイェフスキイがトルストイと反對なる主戦論者であると思ふことは出来ない。如何に彼がコンスタンチノオブルを取れと言つた所が、言葉のま

ゝに之を解釋して、彼が國家主義に屈し、主戦論者となつたと解釋することは出来ない。ドストイェフスキイも亦戦争を罪惡視し嫌つてゐたのはトルストイにゆづるものではないが、只彼は戦争以上の不幸の人類の上に及ぼさんことを恐れて、かゝる場合にのみ正義の戦争を是認した丈である。此ドストイェフスキイの批難は、彼がトルストイと思想が反對であると言ふ證明には少しもならない、却つて、二人の接觸點の多いことを明かに示すものではあるまいか。更に、神に對する徹底な信仰、民衆に對する熱烈な愛、眞理の探求の絶えざる渴望、人生を發展向上せしめんとする限りなき努力、此爲に悩み、煩え、苦みに努めた點に於て、此二大天才は完全に一致するものである。

「一作者の日記はドストイェフスキイの名聲を増大にし、世界的ならしめると共に、若き時代の崇拜の對象として彼を見るに至らしめた。此雑誌は一八七六年には一九八二人の豫約講讀者を得、二千五百部を別に賣つた。翌年は豫約者は三千に上り、同じ數位別に賣れた。一八八〇年即ち死ぬる前半のプウシユキンのことを書いた日記は、三日にして四千賣れ、再版の二千部も數日で賣切となつた。其翌年死んだ年には八千部を賣り盡し、再版の八千部をも亦賣れ切れた。斯く彼の成功は益々増加すると共に、彼は又多くの青年男女と手紙の交換をなし、人の煩悶苦痛等の問題の解決の爲に努力し、苦

しめる哀れな人々の爲に指導者となり、救助者となり、慰藉者となつた。最早彼に反對する人々は、彼の前に出ては、色青ざめて消えて了ふが如くに見えた。彼がある青年に對して送つた手紙に、眞正の共産教徒と共産主義者との別を説いて斯う言つた、『眞正のクリスチャン即ち完全崇高理想的なる共産教徒は、『自分は我最も幼い同胞と全財産を分けなければならぬ、そして彼等凡てに仕へねばならぬ、』と言ふ。然し、共産主義者は、『さうだ、最も若い哀れな自分と、お前の凡ての財産を分けなければならぬ。そしてお前は自分に仕へねばならぬ、』と斯う言ふ。クリスチャンの言ふことは尤であるが共産主義者の言ふことは間違つてゐる。』同じく財産を分けると言ふ同一事實を捉へて、心理に正邪の辨別をしたのは、何處までもドストイェフスキイらしい面白い深い見方である。其外結婚に就て、處世上の目的に就て、又試験に落第して絶望せる娘に對してまでも、彼は懇々と親切に説き勵ましてゐる。彼が此時如何に日記の爲に努力し、多くの手紙の交換に従事したかは、下の手紙を見て容易く想像することが出来るであらう。『此二年の間、私は日記に従事して疲れ、其原因の爲に休息したいと思つたにも係らず、社會が私の活動に同情してゐると知つたので、此日記は私に幸福なる時を與へた。私はロシアのあらゆる地方から幾百通の手紙を受け取つた。そして以前知らなかつた多くのものを、』

私は知つた。私が信じてゐる事に斯くまで多くの人々が興味を持つてゐるとは、今迄は想像することが出来なかつた。是等の凡ての手紙の中で、人々は殊に私の腹藏なきことと正直なことを賞めた。』彼の癲癩の發作は、此時も屢々起つて、彼の努力を妨げたが、病氣が治ると直ぐに、彼は働いた。彼は此年には、醫者の忠告に従つて、いつも行くエムスに避暑をするのを止め、クルスクへ行つて病を養つた。一八七七年十二月二十四日、彼は一生涯の記録として、下のやうな計畫を立てた。

- 一、ロシアの純粹な人を書くこと。
- 二、イエス、キリストに關する本を書くこと。
- 三、自分の思出を書くこと。
- 四、ソロキンなる詩を書くこと。

注意(最後の小説及び企てたる出版即ち日記を除いて、凡て最少限度に於いて十年の仕事要す。自分は、今然し、五十六歳なり。)

## 十五 天才の臨終

子供に對する愛——「カラマゾフの兄弟」——メルキオル、ド、デオギユエの印象——晩年三年間の言動——  
—プウシユキンの演説——光榮と死と葬式——ソロフイエフとトルストイの哀悼

一八七八年の夏に、彼は愈々、十年以前の長い間計畫してゐた晩年の大作を書き始めた。彼は此中で、今迄愛し研究してゐた子供の事をも描かうと思ふと手紙の中で云つてゐる。彼の子供を愛することは非常なものであつた。「小英雄」を書いた昔から、「カラマゾフの兄弟」の挿話に至るまで、彼の限りない熱愛が表はれてゐる。彼が自分の子供のソオニヤを「ちつぽけな奴」と言つて可愛がり、男の子のアリヨオシヤが時計を鳴らしてくれと言ふので絶えず鳴らしてやつて厭きなかつたことは、妻のアンナの物語る所である。彼は僧院や裁判所や圖書館へ行つて熱心に信仰や犯罪を研究した。又、彼は彼の心の中に反撥的に動いてゐた無神論を全く征服して、神に對する信仰は益々強く、生に對する愛は益々熱くなつた。

さうして。「地上に於て、凡ての有機體は生きる爲に存在するのであつて、自滅する爲のものではない」と彼は手紙の中で言つた。「科學は既に其を斯く定義し、其法則は此言葉を打ち建てただけ既に十分正確である。全體に於ける人類は勿論一箇の有機體に外ならぬ。此有機體は生存の法則を有し、此法則を求むるものが、人間の理性である。」斯くして、彼は更に靈魂の不滅、神の存在に説き及ぼしてゐる。彼は又モスコウの學生が騒動を引き起したのに際して、其輕率盲動を戒むる爲に、前年の冬ペテルスルグに於て、カザン寺院に騒動を起した學生に言つた言葉を引いてゐる。「傾聴し給へ、諸君は神を信じてゐない、其は諸君のことだ。此寺院を汚して諸君は何故に民衆を辱しめるのか。斯く、彼は多くの民衆に對して廣大な愛と信仰とを以て臨み、人類の向上の爲に努力し、また一方には創作に對する努力を止めなかつた。此時の彼の生涯は平和で輝いてゐたけれど、小波瀾がないでもなかつた。長男のフェドツカが病氣になつたり、自分は新に氣管支に病を得た。彼はストラヤ、ルサに轉地して、病を養ひ乍ら、最後の大作に全力を傾注した。

「カラマゾフの兄弟」は一八七九年から翌年にかけて、ルスキイ、ギエストニク誌に連載せられた。此小説は十年前の久しい間の計畫が酸酵したもので、始めは「大罪人の一生」なる名の下に五つの獨

立せる小説を作るつもりであつたが、後に此計畫は變更された。彼は信仰問題を研究する爲に、一八七九年六月、ヴラディミール、ソロフイヨフとオプテインに行つて實地を見聞し、此時「カラマゾフの兄弟」中に出てくる僧侶のモデルを研究したのである。實際此僧院の中にはゾシマの如き博愛な敬虔な人が居た。後年トルストイが家出した時も、此僧院を訪ねたことがあつた。

「カラマゾフの兄弟」は人生の崇高なる縮圖である。あらゆる人生の問題、思想、状態は、潑刺たる生命を以て、残りなく描き出されてゐる。ドストイエフスキイの心には、最も聖い神の精神と、最も卑しい罪人の精神は絶えず葛藤して止まなかつたが、遂に此神と悪魔の争闘に於て、遂に神は勝利を得、大なる信仰は大なる無神論を征服し、こゝに全人類の憎惡を征服し得たのである。此小説の中に表はれてくるあらゆる階級の人物、上は最も尊き聖人より、下は最も卑しき罪人に至るまで、即ち人類の善き者、悪しき者、美しき者、醜き者、大なる者、小なる者に至るまで、彼は一様の深い愛と、大きな理解とを以て、眞面目に、深酷に解剖して描寫してゐる。

カラマゾフの三人の兄弟、即ちドミトリ、イワン、アリョウシヤの父なるフィオドルは肉慾の蜘蛛とも言はれてゐる卑しい不倫な道化者であつた。彼は空想的な熱情に憧がれてゐる娘アデレタと墮落

をして結婚し、ドミトリを生んだが、彼女の持參金を奪ふ事に腐心し、始終喧嘩のみしてゐたので、終にアデレタは他の男と逃げて行つて哀れな最後をする。フィオドルは此度は無邪氣な孤兒の娘ソフィヤをそゝのかして結婚して、第二子第三子を生んだが、相變らず放蕩三昧にふけり、妻を虐待して、遂に彼女を發狂せしめて了ふ。此野卑な肉慾主義者は、ある晩酒の酔に乗じて、白痴の娘リザベタと關係して、私生兒スメルジャコフを生む。飽くなき肉慾の奴隸は現在の自分の子に向つてさへ言ふ、「俺の考によれば……いゝかね、俺は今迄一人の女だつて見苦しいと思つたとはない。其は俺の法則なのだ、其意味が解るか。如何して解るものか。お前の脈の中に流れてゐるのは、未だ血でなくて乳なのだ。お前達は未だ殻の中から出ないのだ。俺の法則はお前達の見出すその出来ない。お前達に言はせたら悪魔のやうな面白いものを、いろ／＼あらゆる女に見出すことが出来るんだよ。如何して見出すかと言ふことを人々は知らねばならぬ、其が大切な點だ、其が才能だ。俺の心には見苦しい女はない女であると言ふ事實が、既に驚くべき不可思議なものだ。お前達には如何して其が解るものか。」横柄な疑ひ深い眼の下に長い肉袋、太い顔には多くの皺、廣い厚い唇には抜けた齒と涎を持つた此老父は、斯くして、慾望の爲に盲目となつて、我子のドミトリと美しい一婦人を得んと争ふのである。

彼の長子ドミトリは、カラマゾフの一兄弟として、父より肉慾を遺傳されたもので、子供の時から父に見捨てられて忠僕の手によつて育てられ、大人になつて軍人となつて放蕩にふけた。彼は自分の上官たる大佐の娘カテリナが、彼を何とも思つてゐないやうな傲慢な態度を取つたのを憤慨して、大佐が聯隊の金を消費した弱點につけ入り、カテリナを誘惑しやうとする。然し、彼の態度は悪るかつたにもせよ、彼の心は眞面目で、信仰を有してゐた。彼は女の哀れな姿を見て、彼女を許してやる。カテリナは遂に彼を戀して、自分を愛してゐなくてもいゝから結婚してくれと言つて此二人は結婚の約を結ぶことになる。然し、此約婚には、不自然な相容れないものがあつた。俺は何時も裏路がすきだ。大通りの裏の小さい暗い裏路が好きだ、——そこには驚くべきことがある。泥の中に寶石が落ちてゐる。』と思つてゐる彼は、遂に自己犠牲の念の強い固苦しい道徳的な女を捨て、人生の裏通りに走り、世間で妖婦と言はれてゐる美しいグルウシエンカに猛烈な戀をして、身も魂も捧けて了ふ。そして、同じくグルウシエンカを戀してゐる父と争ひ、當然自分の相續すべき亡母の財産を父から取りかへさんとする。そして、二人の間には幾度か烈しい喧嘩が起り、ドミトリは父をば手痛き目に會はせて、殺すと脅かしたことも度々である。遂に彼は父が自分に少しの財産も返してくれないのを知つ

て、カテリナから委託された三千留の金を半金はグルウシエンカとモクロエに於て歡樂の一夜を送る爲に使ひ、他の半分は衣服の胸の所に縫ひつけておく。此金が後に彼の父殺しをしたと言ふ冤罪をうける一つの證據となつたのである。彼はある晩、グルウシエンカが父の許に忍んで行つたのではないかと疑つて、塀を越して父の邸に忍び入り、老僕のグリゴリイに見付けられて逃げんとし、塀を越す際に老僕に足を捕へられて、グリゴリイを止むなく持つて來た杵で半殺しの目に會はせて逃ける。此間にフイオドルは密かに自分の私生兒の物凄くスメルジャコフの爲に殺される。老僕を殺したと信じてゐるドウミトリは身につけた千五百留を以て又もモクロエに於てグルウシエンカと最後の歡樂の夜を送つて自殺せんとする。翌朝彼は宴會の中で警吏に捕へられ、終に冤罪の爲にシベリアへ送られることを宣告される。

フオドルの第二子イワンは、深酷なる無神論者である。然し、世の中に多くあるやうな狭い世界觀、鈍い惱力から來た無論神者とは深さに於て違ふ。彼は暴風の如き神經を以て、偉大な未決の問題に常に苦み悩んでゐた。彼が弟アリョウシヤに向つて語り聞かせた散文詩、「大訊問者」に於て、遺憾なく彼の徹底した深酷な懷疑的態度が表はれてゐる。「歐洲には是程強い無神論の表現は存在しない」と

ドストイェフスキイは言つた、「そして決して存在しなかつた。従つて自分は子供のやうに基督を信じ、其信仰を奉ずるのではない。自分の信仰は、自分の近作（「カラマゾフの兄弟」のこと）に於て、悪魔が自分に就て言つてゐるやうな大なる疑惑の煉獄を通つて來たのだ。」此言を見ても、ドストイェフスキイが、熱烈な信仰を有する迄には、心中に大なる懷疑の時代を通過したものであつて、決して狂信的な信仰ではなく、烈しい心中の惡戰苦闘の結果なるとが解かるのである。此イゾンの空想的の詩に於て、大訊問者がイエス、キリストを捉へて批難する言葉は、世界に於て表はされた最も深酷なる無神論である。大訊問者はキリストが惡魔に試みられて、石をパンとなせと言はれたる答へに、「人はパンのみにて生きるものに非ず、唯神の口より出づる凡ての言葉によると録されたり、」と言へるを難じて言ふ、「汝よ人はパンのみにて生きるものに非ずと言つたけれども、汝は知つてゐるか、其パンの爲に、人類が汝に叛いて汝と挑み、汝に打ち勝つてパンを讚美する時が來る。汝は知つてゐるか、時代は推移して、人類は聖人の口を通じて、世界には罪惡はない、だから神に對する罪惡もない、只あるものは飢饉ばかりだ。『人を養へ、而して道を説け、』とは人類が汝に反抗して擧げる叛旗に書く文字だ。そして其叛旗を翻して汝の教會を破壊するのだ。汝の教會の建つて居つた所には新しい建物が立

つであらう。即ち恐しいバベルの塔が再び立てられるのだ。」惡魔の第二問、「汝若し神の子ならば、己が身を下に投げよ、そは汝が爲に神其使等に命せん、彼等手にて支へ、汝が足の石に觸れざるやうにすべしと録されたり、」に對して、キリストが「主たる汝の神を試むべからず、」と言つて身を投げなかつたに對し、「汝は高慢にも神の如き振舞をしたのだ、汝が若し身を投げんと一步を踏み出したならば、汝は神を試みて信仰を失ひ、汝が救はんとした地の上で汝は微塵に碎かれることを知つてゐた、」と大訊問者は言つた。又惡魔の第三問、惡魔に俯伏して拜せば世界の王國と榮華とを與へんと言はれたのに對して、キリストが斷然之を退ぞけたのに、大訊問者は言ふ、「惡魔が全世界の王國を汝に捧げんとした賜物を吾等が得たのだ。吾等は彼から羅馬と劍とを得た。そして、今日まで吾等は其業を竣成してゐないが、世界の權利ある統御者として身を立てた。」斯かる見地からして、イゾンは此世の最極なる無神論を立てたが、彼の言葉はキリストを賞めたことになりこそすれ、決して非難したことになるはしなかつた。そして彼自身は自分の思想と實在との矛盾に苦しみ、常に煩悶に堪へなかつた。彼の思想はフィオドルの私生兒スメルジャコフの精神に影響して遂に彼をして親殺しの罪を犯さしむるに至つたのである。スメルジャコフはフィオドルが一夜酔に乗じて白痴の娘リサベタと關



係して生んだ私生児であるが、己が嫡子と同等の権利なきを恨み、イブンの感化をうけて極端なる虚無主義者と化し、父を殺し自分も自殺したが、其死ぬ前にイブンに犯罪を自白し彼がフィオドルを殺したのは、イブンの思想の傀儡となつたに過ぎず、實際はイブンが殺したも同様だと言ふ。イブンは之を聞いて良心の苛責に堪へず、神経と幻影とに悩まされ、遂に法廷にて凡てを自白する。然し、其言は容れられずに、ドミリイは有罪の宣告をうける。

フィオドルの第三子、アリヨオシヤに至つては世にもなつかしき人間の天使である。彼は眞理の爲には命をも捨て、神と靈魂の不滅を深く信じた。其人類に對する博き愛情は卑しき人間惡しき人間にまで及んでゐる。彼は年若くして、『自分は凡てを捨てないで、はした金を捨てる位な事で満足は出來ない、基督に従はないで、禮拜にばかり行つては居られない、』と考へて僧侶とならんとする。然し、彼は神を信じて僧院に閉ぢこもるべき人でなく、人類の愛を體現して俗世間の中に出て僧侶のやうな生活をなし、人類の罪と苦みを救ふべき人である。長老ゾシマは彼を祝福して言ふ、『お前は多くの敵を持つ。然し其敵でもお前を愛してくれる。人生はお前に多くの不幸を齎らしてくるだらう。けれどもお前は其不幸の中に幸福を見出すだらう。そして人生を祝し、人にもそうさせるだらう。』かゝる

尊い性質を持つてゐた爲に、彼は肉慾的なフィオドル、盲目的なドミトリイ、無神論者のイブン、高慢なカテリナ、淫亂と世に稱せられてゐたグルウシエカに至るまで、皆彼を愛し、彼等は又彼によりて愛と慰めをうける。彼は『白痴』に於けるミュイシキン公爵の少年時代とも稱すべきものである。彼が殊に自分を害した少年を愛する所や、神経質なヒステリックな少女リザと戀をする所は、實と純と愛との結晶とも言ふべき涙のこぼるゝ美しい物語である。淺薄な利己的な肉慾の道化者父フィオドルは未開のロシアを、利己的ではあるが未來の光明を抱いてゐる兄ドミトリイは現代のロシアを、反キリスト的で懷疑的なイブンは西歐を體現してゐると稱せられてゐるが、アリヨオシヤは全人類を包括すべき未來のロシアを體現すると言はれてゐる。『誠に爾曹に告げん、一粒の麥もし地に落ちて死なずば唯一つにて有らん。もし死なば多くの實を結ぶべし、』とドストイエフスキイが引いた巻頭の句は正に此アリヨオシヤを指したものと思はれる。此「カラマゾフの兄弟」は未完に終つたもので、ドストイエフスキイは、更にアリヨオシヤの青年時代を描き彼が信仰から深酷な懷疑の淵に沈み、更に懷疑から浮き上つて最大の信仰に到達することによつて、此小説を完結せしめる計畫であつたと傳へられるアリヨオシヤはイブンや、スタフロギン以上のあらゆる大罪惡を犯し、あらゆる苦痛を嘗め、それよ

り後に自覺を得て、ゾシマやミュイシユキン以上の最大の愛に到達する筈だつたさうである。

又アリヨオシヤの崇拜した長老ゾシマの長き挿話は、現代のキリストの一生を書いた聖書とも言はるべきものである。彼の一生は只青年時代の動搖期を除いて神に身を捧げたばかりでなく、「永遠から永遠に時代から時代を通じて神の創造した」物に仕へたのである。彼は言ふ、「聖書は不思議な書物で、奇蹟と力とが其によつて人間に與へられる。聖書は世界と人間と人間の性質の模型で、凡ての物が其中にあり、あらゆる時代のあらゆる物の法則が其に含まれてゐるのです」。青年時代に彼は戀の爲に決闘せんとしたが、一朝翻然と罪を悔いて、恥を忍び、決闘を擲ち、彼は言ふ、「我々の身の圍りにある神の賜物を見て御覽なさい、晴れた空、清い空氣、嫩い草、小鳥……自然は美しくして罪がない……罪あつて愚かなものは人間ばかりです。吾々人間は人生が天國であることを知らぬ。一度其を知つたならば、人生は美しいものばかりで、満されます。そして人は互に抱きあつて泣きたくなりません」。實際長老ゾシマの一生は現代のキリスト即ち崇高なる救世主の一生とも言ふべきものであり、彼の人格は愛と同情と憐憫の化身であり、全人類の信仰の最高なる表現である。彼は人類の罪を我が罪とし、人類の愛を我が愛とし、人類の苦みを我が苦みとした。人間の愚かな罪を愛の涙で洗ひ落し、

暖かい深い情を以て、全世界を埋め盡すのである。人間全體が神の子となり、互に愛し合ひ信じ合ひ神の王國を實現するのが、彼の理想である。鋭き直覺を以て、人々の心を洞察し、惱める心を解決し、正義を基督の上に打ち建て、現代の悪魔の第三の誘惑に陥つた教會を滅亡から救ひ、全世界の調和、世界改良の秘密、全宇宙の最高の教會をば打ち建てる事が彼の目的であつた。彼は豫言する、淋しい孤獨と沈黙の中から全世界を救ふ偉大なる人が現はれ、眞理を純なる基督の心の上に建て、人間を無智・愚鈍・怨恨・虚偽・罪惡から遠からせ、正義や神を信じてゐるけれども罪の汚れから逃れることの出来ない現代のロシアを、救ふべき救世主が今に必ず出現すべきこと、其時こそは人類未來の大結合が實現せられ、人間は光明と恩恵とを喜んで、残酷・貪慾・放縱・傲慢・怨恨等の争鬭を止める時である。血を以て血を洗ひ、劍を揮つて劍に亡ぶ愚劣や、奴隸の卑しい残忍な快樂を捨て、信仰と愛から全世界の統一は實現されるのである。長老ゾシマに取つて、我はあり、故に我は愛す、と言ふことが、凡ての人生の秘密の解釋であり、地獄とは愛することの出来ない苦痛を指すのである。彼から言へば、地上の物質的の苦痛は單に精神上の苦痛を紛ぎらしてくれり手段に過ぎない、實に悲痛の中に幸福を求むること、眞の幸福なのである。利己主義は、個人を成長せしむるのでなく、却つ

て個人を破壊するものである。自己犠牲の中こそ、却つて個人を成長發達せしむる秘密はあるのである。彼は言ふ、『夢想の愛に比ぶれば、生ける愛は苦しい痛はしいものです。』『あなたが如何程努力しても目的に近づくことが出来ないで、却つて遠かつて行くと云ふ恐怖と苦痛とを経験なさるならば、其瞬間にあなたは目的を達して居られるのです』と。即ち、長老ゾシマの信仰は、苦みを愛する苦痛の宗教の宣傳に外ならぬ。

ドストイェフスキイの『カラマゾフの兄弟』は、現代の聖書とも言ふべき高大無邊の精神の發現である。十九世紀に蔓延した科學文明は愚にも愛の宗教を葬り去りキリストの眞の精神を理解するものを少くした。此渾沌たる不信仰の濁流中にあつてドストイェフスキイこそ眞のキリストの後繼者であり、十九世紀の偏した物質文明に反抗した偉大の一人であつた。人間の魂をつかむことの深さ、宇宙の秘密を探ることの鋭さ、萬物に臨む愛の大きさ、人類の苦みに對する同情の廣さ、神に對する信仰の烈しさ、人生及び宇宙の物質と精神に對する彼の理解と同情は遺憾なく表現されてゐる。實際、『カラマゾフの兄弟』はドストイェフスキイの最後の大作なると共に最大の傑作であつて、彼が老年に達するに従ひ、肉體の力の益々衰へゆく反比例して、彼の精神の力は益々成長して行つたことを完全に證

明するものである。自然と人生との眞美と偉大と崇高とは此中に複雑若しくは單純なる形式にて凡て表はされ、生命は躍り、奇蹟は表はれ、歡喜と狂亂と悲痛と煩悶とは互に交錯して、偉大なる力と深酷なる考案の下に、完全に描かれ、我等は只作者の力の無盡藏なるに驚嘆する外はないのである。此作は後年トルストイが家出をした際、愛讀して手に携へて行つたと傳へられてゐる。

此大作を書く爲に、ドストイェフスキイは非常に健康を損じて瘦せ衰へ、唯神經のみで生きてゐるやうで、指一本で突いてもよろ／＼と倒れる程になつたと言はれてゐる。斯かる苦痛を忍んで彼は努力して來たのであつた。而して、更に此の小説の續きの、十三年後のアリヨオシヤを主人公として描く考案は、遂に健康の許さぬ爲め筆を染める暇がなかつたから、其は實現されずに了つた。此小説が完成したならば、彼の未だ明瞭に結論を下さなかつた神人と人間神との争闘とを更に力ある洞察を以て解決したことだらうと思はれる。

一八七九年の末、ネクラゾフは死んだ。ドストイェフスキイは、其報らせを聞いて、仕事を抛つて、終夜彼の詩集を讀いた。『ネクラゾフは詩人として、卅年中、私の生活の大部分を占めた。』と彼は作者の日記の中で言つてゐる。彼は處女作を始めて認めた此熱情的な民衆詩人の爲に、心から悲んで葬式の時

哀悼の辭を讀み、『日記』の中にも、民衆の苦悶を歌つた偉大な詩人として彼を極力賞揚してゐる。

ドストイェフスキイの最後の三年間のことはメルキオル、ド、チオギユエが親しく會つて詳細に記してゐる。ドストイェフスキイの姿は、彼の小説に現はれ人物の如く一度云へば決して忘れることが出来なかつたさうである。彼は小作りで瘦せて、全く神経質で、六十年の悪戦苦闘の爲に疲れて、腰が曲つてゐた。年を老つてゐると言ふよりは、寧ろ萎んでゐた。年齢の事は言はずとも、病人のやうな姿をして、長い髻と金髪とを持つてゐた。顔はロシアの百姓のやうな顔で、鼻は平たく、小さい眼は、眼瞼の中で、時としては暗く、時としては柔しく、火のやうに瞬きしてゐた。皺と突起とで曲つた大きな額、槌にうたれたやうに落ちくぼんだ顴骨、其凡ての表情は苦みに打たれ、悲しみに痙攣してゐた。彼を見れば彼の小説の中の虐げられた苦しめる多くの主人公を想起する事が出来、彼の六十年の困窮と苦痛との殉教生活を讀むことが出来たと言はれてゐる。彼の表情は時として聖人のやうな清さを表はすかと思へば、怒つて罪人のやうな顔ともなる。卑しさと氣高さと同時に混合してゐた。そして、彼の様子には猫のやうな素ばしこさが表はれて、凡ては神経にふるへてゐたと稱せられる。

チオギユエはまた斯う言ふ。通常彼は沈黙がちであつたが、一度口を開けば、低い、のろい、きつぱ

りした調子で語り、だん／＼と調子が高まつて誰に對しても遠慮なく自分の考へを吐露する。ロシアの民族の傑れてゐることを絶へず話して、彼が連れられて行つた交際社會の婦人に對しても、『あなたは最もわるい百姓にも價しない人だ、』と言ふやうなことがある。チオギユエと文學上の論をすれば、彼は憐憫を表はした調子で斯う言つて遮ぎつた、『私達は全民族の天才を持つてゐます。のみならず、ロシアの天才を持つてゐます。其で私達はあなたを了解することが出来るが、あなたは私達を了解することが出来ないのだ。』斯う言ふ言葉は如何にも尊大な言葉のやうに思へるけれども、深き天才の自覺と民衆の愛から來たものであつて普通の凡人の自惚や空威張と同一視することは出来ない。彼の天才を以てして、自分の力の傑れてゐることを説かず、其を民衆全體に歸せしめたのは、寧ろ謙遜すぎると言ふべきである。彼はまた佛蘭西の文明の亂れてゐるのを嘆じてチオギユエに預言した。『一人の預言者がカフエエ、アングレエにある晩現はれ、壁に焰で三つの文字を書く。そこから舊世界の終末の兆が現はれる。そして巴里は、其誇りともする凡ての物、芝居やカフエエ、アングレエと共に崩れて了ふだらう。』かゝる言葉は、文字通りに解釋するのは愚かなことであるが、深い内容的の言葉として見れば、面白い意味のある言葉である。

今やドストイェフスキイはロシアの青年の崇拜の的となつて、敵も味方も彼の力に征服せられ、民衆の擁護者としての彼の使命は次第に實現されて行つた。一八八〇年五月二十五日、ドストイェフスキイの爲に、モスコオの文學者は盛大な祝宴を開いた。

同年六月六日及び七日にはプウシュキン五十一年の誕生日に當つてその記念碑の除幕式の祝ひがあり、八日にはロシア文學愛好者協會の會に於て、ドストイェフスキイは有名なプウシュキンの演説をした。スラヴ民族主義のアクサコフは此演説を以てロシアの重大な事件と言つた。ドストイェフスキイは少年時代から崇拜し渴仰して來た此天才を説いて、ロシアの智識階級の民衆から懸離れ、土地から根こぎにされてゐた現象を如何にプウシュキンが理解してゐたかと言ふこと、多くの近代の作家は皆プウシュキンの流れを汲んだこと、ベートル大帝以後ロシアに根ざした病を治さうとしたのは彼であること、道徳の美を説いたのも彼が最初であり、他國の天才を突き通す丈の藝術の天才を表はしたのも最初であること、彼が全人類の魂を了解せるものなることを説いた『プウシュキンは凡ての民族の精神を驚くべき程自身に具體化する事を知つてゐた』と彼は叫んだ『其は彼に特有なる賜物である。其は我民族の向上を察せしむる豫言的の賜物と同じく、彼の外に存在しないものである。彼が全く

國民的詩人となるや否や、彼は我々に宿れる力を悟り、如何に大なる運命が此力に使へてゐるかを豫知した。彼が豫言的人の人であると言つたのは其處である。』斯く説いて、彼はスラヴ民族主義者と西歐主義者が互に争闘してゐるのは、大なる誤解の結果に基くもので、彼等ロシア人の使命は汎歐洲的世界的とならなければならぬこと、眞のロシア人となることは、凡ての人類の同胞となることで、決して民族主義と西歐主義の反馳すべからざるものなること、愛と信仰を以て凡ての民族は一致融合しなければならぬことを繰り返し、熱心に言ひ、最後に、プウシュキンが天才を抱いて失望し墓の中に大なる問題の解決を残して行つたこと、我等が爲すべきあらゆることは其問題を解決すべく努力するに他ならぬことを説いて結んだ。彼は此日即座に會の名譽會員に推された。

聴衆はドストイェフスキイの熱烈な演説を聞いて皆泣いた。今やスラヴ民族主義者も西歐主義者も、彼の博い深い愛を知つて、彼の前にひれ伏した。六十年の長い惡戰苦闘の後、始めて光榮ある勝利は彼の身に來り、ロシアの民族は高きものも低きものも、此天才的な豫言者の言葉に感動した。殊に若い學生は、もつと近くに行つて彼を見、彼に觸れたいと思つて、ドストイェフスキイの演説してゐる臺の上に押し寄せて行つた。ある青年は、彼の傍へ走つて行くと、興奮の餘り氣絶して了つた。

此演説のあつた翌年一八八一年一月二十九日は、ブウシユキンの死んだ記念祭で、彼は共に出席する約束をした。八年前から彼は氣管支炎と肺氣腫を病んでゐて、一月二十五日其爲めに鼻血を出したが、其には何等の注意もしなかつた。二十六日になつて醫者にかゝるやうにすゝめられても、氣分がいかからと言つて拒んだ、その日の午後四時に彼は卒倒した。プレツェルと言ふかゝりつけの醫師が來たが、一時間半の後再び出血して氣絶した。友達は彼の病氣を知つて鍛冶町の其住居を訪ねて來た。ドストイェフスキイは氣絶から覺めると、死の近いことを知り、僧を呼んで貰ひ神の前に懺悔し、聖餐式を受けた。二十七日と二十八日は氣分が冷つた。彼は一月三十一日の「一作者日記」の發行のことを妻や友達に頼んだ。二十八日の正午に三度目の出血が起つた。此時、親友のマイコフがやつて來て午後を家族と共に看護して過した。ストラホフはアンナ、グリゴリエヅナから斯うきいたと書いてゐる苦しい時には、彼は常に以前監獄で持つてゐたことのある聖書を手當り任せに開いて見て、其頁の一番上の方を読むのを常としてゐた。で今もさうやつて開いて、其處を読むやうに、妻に渡した。其は馬太傳の第三章第十四節であつた。「ヨハネ辭みて曰けるは、我は爾よりバプテスマを受くべきものなるに爾反つて我に來るか。イエス答へけるは暫く許せ、此如く凡ての義しき事は我濟盡す可なり」

アンナが之を読み終つた時に、ドストイェフスキイは言つた、「お前は聞いたか、アンナ、俺を止めるな、——あゝ、それは俺が死ぬと言ふことなのだ。」斯う言つて彼は眼を閉ぢた。死ぬ前二時間、彼は聖書を長男のフェチャに渡してくれるやうに頼んだ。六時半になつて最後の出血が起つた。彼は氣絶して苦しみ始めた。人々は第二の醫師チエレブキンを連れて來たが、その時は最後の心臓の鼓動を聞いた丈であつた。其は一月二十八日午後八時三十分であつた。年は五十九歳(歐式で)であつた。デオギユエはドストイェフスキイが死んだ後始めて、彼の苦痛のズエルの取られた平和な顔を見たと言つてゐる。此時彼の書齋には書類が散ばり、彼の棺の周圍は人で混雜してゐた。人々は彼の死骸の上に蓋を積み重ね、そして此蓋を片見として分けた。然し周圍の人々は益々殖えるばかりで、ドストイェフスキイの最後の顔を見んとして押し寄せ、女は泣き男は騒ぎ押し合ひへし合つた。寒い冬のことゝて、室内は閉ぢこめられ、空氣が息のつまるやうになり、多くの燃え輝いてゐた蠟燭は、瞬きして消えて了つた。只聖像の前の小さい洋燈しか點つてゐなかつた。此爲に人々は益々混雜して、波を作つて押し寄せ、前の方にゐた人々は、棺の上に押し重なり、棺はへし曲つて了つた。哀れなドストイェフスキイ夫人は子供を抱いて卓子と壁に押しつけられ、夫の死骸の上に倒れて悲鳴の聲をあげた。死骸

は此人波によつて、動かされ、人々は其が踏まれはしなかつたかと氣遣つた。

一月三十日、ペテルスブルグの聖アレクサンドル、ネフスキイ寺院に於て公葬されることゝなつた。群衆は朝早くから葬式の行列を見やうとして、寺院に行く道通りに黒い垣を作つてゐた。葬式に列したものは二万人以上あつて、之程盛大な葬式は其頃餘りなかつたと言はれてゐる。學生はシベリアの罪人の柵を棺の車の後の方に持つて行かうとした。然し、臆病な人々は、かゝる革命に類する所業を拒んだ。政府は何か示威運動でも起りはしまいかと思つて恐れて警戒してゐた。行列の中には敵も味方も入り交つて居り、一里も長く續いて、僧侶、大學生、體操學校の小さい生徒、醫學校の女學生、虚無主義者、學者、代議士、商人、百姓、下男、乞食等のあらゆる階級の人が來り、教會には官吏、大臣、皇族が參列し、式場では、僧侶は祈りを上げ、生前の思想の賛成者も反對者も、あらゆる人々は、ドストイェフスキイの理想を述べ立て賞揚したが、冬の寒いからつ風は、此賞讃の辭をば落葉と紛雪と共に吹き去つて了つた。然し、此多くの群衆の中に、彼を眞に理解したものが幾人ゐたかは疑問である。ドストイェフスキイは生前屢々、『自分の死後でなければ人々は了解しないだらう』と言ひ、また、プウシユキンのあの華かな演説に於て、賞讃の花環をうけ、拍手喝采された後でも、『宣しい、宣

しい、だが一番大切なことは彼等には悟れないのだ、』と繰り返しく言つたさうである。ロシアの哲學者ソロフイェフは、墓前で此時言つた『ドストイェフスキイの如き人々の功績と重大とは、彼らが事實の前に膝まづかず、それに仕へなかつた所から生ずる。彼らは、暴力に對して、正義と善との信仰から汲んだ道德の力、あらねばならぬものゝ信仰から汲み取つた道德の力を對抗せしめたのである。惡の明かな支配から誘惑されないこと、その爲めに目に見えぬ善を捨てないこと、それが信仰の行爲である。その中にこそ、人間の凡ての力はひそんでゐるのである。人生は、信仰の人によつて創造される。人の呼んで夢想家、妄想家、狂人とする所のもの、これこそ人類の豫言者であり、選民であり、指導者なのである。今日、我々の泣くのは、かゝる性質の人だからである』と。彼は眞にドストイェフスキイの偉大さを知つてゐた。又、彼と同時代の天才にして、後年偉大な煩悶を抱いで彼の最後の傑作、『カラマゾフの兄弟』を携へて家出して死んだレオ、トルストイがある書簡の中に言つた下のやうな言葉も、短い乍らも眞に天才を理解したものと云ふことは出来ないであらうか、『私はドストイェフスキイに就て考へてゐる事を凡て言ふ力を持ちたいと思ひます。あなたが御自分の思想をお書きになつた時は、幾分かあなたは私の思想を表はしてゐるのです。私は此人を一度も見つたこともなければ

ば、直接に交際し、やうなこともありませぬ。然し、彼が死んだ時、私は突然彼があらゆるもの、中で最も親しい最もなくてならない人だつたと自覚しました。私と彼とを比較しやうなど、私は一度も思つたことはありませんでした。彼の書いたあらゆるものは（私は唯一、眞實なもの、みのことを言ひますが）、彼は其を書くことが好きであればあつた程、私も喜んで程でした。藝術的の完成と智識とは私の羨望を起すかも知れませんが、心から出た作物は唯喜びを起す丈です、私は常に彼を親友として認め、時として彼に會ひたいと非常に心から思ひました、そして今突然彼が死んだと言ふことを讀みました。初めは私は全く動揺して了ひました。そして、後になつて、私がどれ程彼を尊敬してゐるかを自覚した時に、私は泣き始めました。——私は今でも矢張り泣いてゐます。彼の死ぬ数日前、私は彼の「虐けられ辱められし人々」を感動と歡喜とを以て、讀みました。その後トルストイは、自分及び凡ての文學者のあらゆる傑作をば、くだらぬ作と自ら宣告したが、ドストイェフスキイの作のみを價値あるものと推賞した。

思へばドストイェフスキイの生涯は變化が多かつた。彼は肉體的にも精神的にも、常人の想像の出來ない程烈しく苦しんだが、彼が苦しめば苦しむ程、彼の力は偉大を増して行つて、決して絶望に倒

れることはなかつた。實に彼の六十半の生涯は、全人類の苦痛の爲に苦んだ殉教者のそれであつた。彼の一生は此世の最も暗い深淵のどん底から、光輝く最高峯の絶頂に攀つた天才の一生である。熱い地獄の火の苦みを嘗め乍ら、清い純な天國の光りを味つた豫言者の一生である。今や彼の苦しい戦は終り、人生の波瀾は静まり、穩かな平和と愛の光のみが、彼の墓の上に永久に射してゐるのである。



## 十六 悲痛なる信仰

ドストイェフスキイの人格——病的な神経と過剰な天才——生死を賭せる信仰——萬人の爲めの罪——  
苦痛を通して得たる愛——民衆に對する同情——神人と人間神と放浪者——個人主義と愛他主義の葛藤  
——永遠の調和——人類の王國

ドストイェフスキイの小説の主人公は皆神経のいら／＼した陰鬱な人間ばかりである。狂人、白痴、癲癇その他のいろ／＼の病者の惱ましい神経を、彼はいやが上にも描いてゐるのだ。ドストイェフスキイの小説を見れば、其中はあらゆる精神病者の行列』であるとロンプロゾオは言つた。

此言葉は勿論誇張されたものには違ひないが、又、ドストイェフスキイは、人間のあらゆる靈魂の顛動、神経の深酷さを描くに長じてゐたことを立證するものである。實際彼の作を讀むと、其神経の鋭い寫實と相俟つて、精神の病的な強さに打たれて、物凄く恐しくなることがある。

ロンプロゾオが言つた如く、天才と狂人とは同じものであるとは、自分は思はない。然し、天才は

常に傑れた鋭い過剰なる神経の持主であることは争はれない事實である。トルストイもさうであつた。ミケランジェロもさうであつた。ベトオベンもさうであつた。ルウソオもさうであつた。ドストイェフスキイに至つては中にも是等に劣らない人並外れて病的な鋭い神経の持主であつたことは、彼の小説や書簡集を見れば、容易く看取される所である。

神経は我等の精神の外部と交通する所であるから、神経が鋭くなければ、十分に外物を透視することが出来ない。精神が大ければ、神経も亦鋭く深くなければならない。是故にドストイェフスキイが病的に鋭いデリケートな過剰の神経を持つてゐたことは、彼に取つて寧ろ幸福だつたのである。人々はドストイェフスキイが病的な人であつたのを哀れみ、彼の唯一の缺點のやうに思つてゐる。然し、自分はさうは思はない。彼はなる程始終悩まされて居つた。然し、それは過剰な天才によつて悩まされてゐたのだ。彼の病的な神経は白熱せる天才と通じてゐた。そして、この爲めに創造の悩ましさに、苦しさに、始終脅かされてゐたのだ。

然し、之程、ヒポコン德里イや癲癇に悩んでゐた人が、あらゆる此世の迫害と戦ひ、斷頭臺に上つて、死と面々、相向つた時、何故に發狂しなかつたであらうか。癲癇の發作と極度の貧窮に苦しんだ

時、何故に彼の精神は狂はなかつたであらうか、其は寧ろ奇蹟の如きものであつた。彼の精神が神経以上に強かつたことは、我々の感謝しなければならぬ所である。

ドストイェフスキイが牢獄に投ぜられ、西比利亞に流された時、彼は極度の絶望に陥り、神経の病氣は増し、癲癇の發作は頻繁に起つた。然し、彼を狂氣と自殺から救つたものは、實に熱烈なる信仰と忍耐と生に對する慾望とであつた。「人間に信することの出来ない程の忍耐と生存意志があるとは思ひませんでした。」と彼は獄中から兄に手紙で言つてゐる。

彼は實際狂氣か自殺の二途を選ぶしかない程苦しんだことは幾度もある。「罪と罰」の中で、ラスコルニコフは、虐げられ踏みつけられ貧の爲淫をひさいでゐる少女ソオニヤに、如何して、是程の恥辱を引すり乍ら生き得られるかと言つた。是に對して、ソオニヤは、「神は私の爲に何事もして下さいます。」と答へた。ラスコルニコフは彼女が宗教狂なのだ、其處に逃げ路があるのだと考へたといふことが書いてゐる。彼自身も盲目的ではない所の熱烈な宗教に逃げこんだのだ。

ドストイェフスキイは、「一作者の日記」の中で、自ら自己を批評してゐる、「自分は匿すべからざる理想主義者なのだ。自分は神聖なものを探求する。自分の心はその爲に一變した。自分は神聖なも

のなくしては、生きてゐられないやうに作られた人間なのだ」と。斯かる烈しい止むに止まれない生死を賭した信仰、これが彼の生命であつたのだ。

ドストフエフスキイは、實に斯かす信仰を待つてゐた爲めにあらゆる迫害をば耐へ忍んだのであつた。彼の神経は病的で強かつた。然し、彼の精神は強く大きかつた爲めに、よく此病的な神経を征服し、自分の物としてゐた。否、彼の精神は却つて此病的に鋭い神経をば、よく生かし、利用したものと云へる。「概して懲治監は私の中の多くのものを破壊し、又多くの他の物を解化しました。」と彼は手紙の中で言つてゐる。實際、ドストイェフスキイは惨めな自分の境遇から害を受けただけで、之に負けなかつた。到底人力を以て堪へ忍ぶことが出来ない苦痛に會つても、彼は異常の忍耐力を以て此苦痛に勝つたばかりでなく、此苦痛を利用したのである。彼の精神はあらゆる試練をうけ、鍛へられて益々強くなつた。「私は十字架に傾した。」と彼は又手紙の中で雄々しく言つてゐる。彼は何故に斯う言つたのか。自ら昔危険な社會主義者であつたことを認めて、自ら罪ありとしたのか。否さうではない。彼は社會主義に同情はしたが、根本に於いて共會主義と相反してゐたのだ。彼が罪ありとしたのは「人間は、あらゆる人々に對して、あらゆることに就いて罪あり、」と言ふ彼の深い信仰から來たの

である。「カラマツフの兄弟」のドミトリーをして、無冤の罪に潔く服せしめたものは、即ち、自ら全人類に對して罪あることを自覺したからである。多くの罪なきものが此世に於いて刑罰をうける。それは罪なき人も人類に對しては罪あるからである。彼は個人的の罪に服したのではない、あらゆる人々に對して今迄行つたあらゆる利己主義の罪の爲めにシベリアに行くことを正當なりとした。彼は自分のペトラシエフスキイ事件に罪あるものと認めたのではないのだ、かゝる見地から、彼は全人類の罪を背負ふて、苦痛の十字架に服したのみならず、美しい精神の復活を以て、其十字架を燦然たる榮光を以て輝かしたのである。故に彼は決して自ら絶望しなかつた。寧ろ喜んで西比利亞流罪の途に就いた。「死人の家」の中の、下の一節を讀めば、如何なる心を以て獄中に暮してゐたか、直ちに了解されるのである。

「それから私はまた其墓場から復活を望む強い憧れに満たされたことも覺えてゐる。其が氣を屈せず待ち且つ望む力を私に與へたのである。さう言ふ風にして私は堅固になり、忍耐強くなつた。私は期待によつて生きてゐた。私は過ぎゆく一日一日を算へた、もし監獄に過すべき日が此上千日あつたにもしても、其中の一日が過ぐればもう九百九十九日しかないと思つて満足を得たのである。それか

ら私の周圍に同じやうな境遇の人間が百人もゐたけれども、私は愈々孤獨を感じるやうになつたことを覺えてゐる。其孤獨は恐るべきものであつた。然し、私は其を愛するやうになつた。」と。是程忍耐をば絶望を轉ずることを知つてゐた彼も、時には病的な過剰な神経の發作を爆發させて忍び切れなくなるがあつた。彼がツルゲネエフと喧嘩をしたり、愛してゐたアンナ、コヴレスカヤの前で其惡口を言つて機嫌を損じたり、アンナの母に向つて宴會の席上で、愛なくして娘を結婚させるのは罪惡だとぶしつけに言つたり、佛蘭西から瑞西に行く時、旅行券の裏書をしてもらふ爲にヌンキオ領事を訪ね、三度も留守を食つたので、朝飯のコオヒを飲んでゐるヌンキオの茶椀に唾してやると叫んだり、其奇行は數へ切れな程ある。然し、彼の不法なことは、彼の正直な直情逕行の性情と病的な神経から來てゐるので、後で彼は自分のやつた向う見ずの行爲を痛切に意識して苦しんでゐた。

此抑へようとしても抑へきれない病的な神経と、人並すぐれた異常の忍耐力とが、ドストイェフスキイの心に、互に遠心力の如くに常に離れては接し、探しては離れしてゐたのである。彼の精神は、斯かる絶え間のない苦痛との戦ひであつた。

彼の小説の主人公も亦此病的な神経に悩まされてゐる。「貧しき人々」のデヴシニキンも悪い氣分に

驅られて泥酔する。「二重人格」のゴリアドキンは遂に神経の犠牲となつて發狂して了ふ。「ステパンチ  
コヂ村」のフオマ、フオミツチは恩人を罵り、哀れな女を虐げる。「地下室」の主人公は友と喧嘩して  
自暴な氣分に驅られ淫賣婦と關係する。「罪と罰」のラスコルニコフは厭世と僧人の情に悩まされる。  
スキドリガイロフは幽霊の幻影に襲はれる。「白痴」のラゴオジンは恐しい程凄しい神経の持主で無人を  
殺して了ふ。其主人公ミユイシユキン公爵は虐げられた女に對する同情の念に驅られ、愛してゐた許  
嫁を捨てる。「賭博者」の主人公は神経の悩みと好氣心とに驅られ有りつた金の賭博に使つて了ふ。  
『永久の良人』のエルチャニコフは過去の罪の幻覺に悩み、バゼル、バヴロヰツチは一瞬間前に親切  
に看護してゐた病人の友を殺さんとする。「悪魔」のスタフロギンは人の鼻を引張つたり、耳を噛んだ  
りする。シャトフ、キリロフも病的な神経の犠牲者である。「カラマゾフの兄弟」のドミトリイは人生  
の裏路のみを好んで行かうとし、イザンとアリヨウシヤは烈しい神経の打撃をうける。「青年」のドル  
ゴルキイは出來心と無分別の犠牲となつてゐる。

斯う數へ立てれば殆どはてしがない。彼の小説の女主人公も矢張り神経の過敏ないら／＼した女が  
多い。殊に彼が同情と熱心を以て描いたのは、精神上先天的に缺陷を持つた不幸な女である。「虐げら

れ辱められし人々』の熱情、犠牲者たるナタアシヤ。「罪と罰」の熱狂的の信仰者ソオニヤ、「白痴」  
の傲岸なねんねえのグラアヤ及び虐げられて半分狂氣となつたナスタアシヤ、「悪魔」の愛情の化  
身リザベタ、「カラマゾフの兄弟」の誇りを傷けられた爲に病氣になつたカテリナ及び復讐の爲に戀人  
を苦しめるグルウシエンカに至るまで皆さう言ふ人々ばかりである。

斯う言ふことは、ドストイェフスキイ自身の精神が病的に鋭敏であつたその反映である。そして、  
彼が其爲に種々の奇行を演じたので、或人々は彼の人格に疑をさしはさんでゐる。此等の人々は、自分  
がドストイェフスキイを十九世紀の物質主義時代に現はれた大なる豫言者であり、救世主であつたと  
言つたことに反對するかも知れない、然し、ドストイェフスキイが我を忘れて出來心や氣紛れの犠牲  
となつたのは、事實であるが、之を批難する人は、彼の病的に鋭い過剰な神経の働きの、彼の本來の  
精神とを區別することを忘れてゐるのだ。彼は氣分や神経の爲に押しつけられて如何しても其力から  
逃れられず、一時其氣分や神経を満足させる外はなかつたのである。彼の根本の精神は其爲に少しも  
傷けられなかつたのである。彼は「罪と罰」の中で貧困の爲に繼母から強ひられて淫賣婦となつたソ  
オニヤを評して、彼女が是程まで汚辱を引すり乍ら少しも純潔な信仰の心を失はずにゐるのは、賣淫

と言ふ恥辱に機械的に觸れてゐるに過ぎず、眞の賣淫や恥辱は一滴も彼女の胸を犯してゐないと主人公をして言はしめてゐる。此同じことがドストイエフスキイ自身をも説明出来るものではあるまいか。あれ丈の極度の迫害と貧窮と苦痛と障碍とを以てしても、彼ら自分の病的な神経の犠牲とならずに、此野獸のやうに荒れ狂ふ神経を、最終には常に制御し得たのは、彼の精神が力強い爲めであつた。

ドストイエフスキイは、なる程、忿怒や氣紛れや出來心の奴隸となり、暴虐な神経に左右されたことがあつた。彼はあらゆる世の中の汚辱にまきこまれ、卑しい醜い人々と入り交つて生活してゐた。然し、彼の醜い外面を皮剥いて了へば、其處には玉のやうに清らかな一點の曇りない精神が残るばかりである。彼はあらゆる汚辱と恥劣の世界に、俗人や悪人と一緒に棲み、共に同じやうな行爲をしたとしても、其一點の濁りも彼の精神にはしみ込まなかつたのである。

彼は無信仰な社會主義者と交りをつんだ中であつても、社會主義の缺點をば攻撃してゐた。冤罪をうけて死刑に處せられんとして西比利亞に流刑されても政府を恨まなかつた。彼はシベリアで極悪非道の罪人と交つて苦役をしてゐても信仰の心を失はなかつた。彼は一生涯執拗な癲癩に苦しんでも自己を咀ふことなく、却つて病氣の爲に人の見ぬ世界を見ることが出来たと思つて讚美した。彼は一生

涯貧困と戦つたが、熱烈な人類を救ふ心を止めることが出来なかつた。彼は一生涯あらゆる迫害を受けたが、決して厭世の心を起すことなく、生を愛する念は益々強くなつた。彼の行爲と精神は矛盾してゐることも多かつた。然し彼はそれを一致させようとする努力と意志はいつも忘れなかつたと言ふことが出来る。彼が人を憎み乍らも愛したのは、餘りに過剰な愛を示すものに外ならない。

斯くの如き苦痛や迫害や憎悪から得た愛ほど清く尊いものが世にあるであらうか。彼は古の聖賢に劣らぬ大きな深い高い人類の愛を有してゐた。然し、其愛は所謂聖人の愛とは違ふ。彼は聖人たる高い地位から、人類を俯瞰して愛を垂れたのではない。彼は罪人や悪人や凡人と同じ地平線の上に立つて、此等の人々と共に喜び共に苦み、感情を同じくした。彼は罪人や悪人の共犯者の如き心持を以て罪人や悪人を憐み、同情したのである。彼は實に罪人や悪人と同じやうな心持を感ずることが出来、普通人と同じやうな外面の弱點や醜さをさへ有してゐたやうに思はれる。然し、此弱き醜さの中を溯つて行けば、奥底には何物にも換へ難い尊き聖さがあつた。彼は人と喧嘩し、賭博をし、負債の爲に不義理をし、女にも迷ひもした。然し、彼は不眞面目な不純な心を以てしたことは一度も無かつた。彼は自分でも言つてゐるやうに、聖者パルフェニ僧の如く、市井の間に伍して、俗人と同じ生活

をしてゐたのだ。其彼は清淨潔白を以て終始一貫した古よりの聖賢とは此點に於て非常に異つてゐる。然し、眞の聖人は必しも濁つた浮世から隱遁して、仙人の如き生活をするものではない。

ドストイェフスキイの足は、俗人や悪人と同じ、土地の上にあつた。其處にあつたが爲に、彼はあのやうな辛辣な透徹と理解ある同情を以て俗人罪人の心持を理解することが出来たのである。自分は彼は悪人や俗人と同じ地盤の上に立つてゐても、頭は遙かに彼等を抽き上げてゐたと先きに言つたのは、之が爲めである。

人殺しをしたラスコルニコフの深酷な心裡解剖は彼自身かゝる経験があるのではあるまいかと疑はしめる程に發洩精細を極めてゐる。そして聖者ゾシマの如き暖かい深い救世主の化身たる人々をば、如何してラスコルニコフの描寫者たる同じ人が描くことが出来たかは、驚嘆すべきものとしなければならぬ。これは、彼が罪人にも、聖人にも低いものにも高いものにも、あらゆるものに同情を有してゐた證據である。

モオリス、バレスはカントの廣大なる人類の愛を非難して、抽象的で役に立たないと言ひ、自ら民族主義を宣告した。然し、此モオリス、バレスの非難はドストイェフスキイの愛に對しては少しも當

つて居らぬ。ドストイェフスキイは熱心な民族主義者である。共に、又、熱烈な人類主義者であつた。彼は個人、民族、人類の何れをも矛盾撞着するものとせず、之をよく融合して體現してゐた。『白痴』の中で、彼は女主人公ナスタシヤをして、『抽象的な人類の彼は利己主義に外ならぬと言はしめてゐる。世の中の多くの俗人や罪人や悪人と心持を同じうし、同じ生活を營んだ彼に取つて、其愛が抽象的であるべきいはれはなかつた。彼の民衆に對する愛は、最も熱烈な具象性を現はしてゐるものであつて、空想的な抽象的な所は少しもなかつた。彼は民衆の永遠の苦痛は何處から來るかと思へず探してゐた。それは、あらゆる人類の利己心にあるものであつた。之故に、彼は利己心を減する信仰を以てしなければ、民衆の愛は實現し得られぬものであることを自覺した。彼があらゆる人が皆罪ありとなしたのは此の爲めであるのだ。『自分はロシア民衆の愛の限りなき渴望を言ふのだ、』とドストイェフスキイは言ふ、『キリストの名に於いて、一般の完全な結合の必要を言ふのだ。此結合の實現せられざる限り、教會は、祈禱に於いても現實に於いても、完全に打ち建てられることはないものである。』彼の民衆の愛は理論的でなく、寧ろ本能的と言ふべきであつた。

人類の愛と言ふことは廣漠として抽象的になり易い。然し、ドストイェフスキイ程此廣漠たらんと

する愛を、熱烈たるものたらしめ、具體的ならしめた人は少い。そして、彼は此具體的の愛に到達する爲に多くの苦みを経、煩悶を重ねて來たと言つても差支へがないのである。彼は此苦みを、『ステパンチコチ村』のフオマ、フオミツチをして語らしめてゐる。又、『カラマゾフの兄弟』の中の醫者の言として、『私は一般に人類を愛します。でも其を愛すれば、愛する程、特別に一人を愛することが出来なくなります』と物語らしめてゐる。又、同じ小説の中でイブンの詩の大審判者をしてキリストの愛を反駁せしめ、『汝は天のパンを與ふることを約したが、其パンは弱き人間の肉を養ふ地上のパンに及ぶものか。若し、天のパンの爲に、一千人一萬人の人間が汝に従つたならば、天のパンのかはりに地のパンを捨てることの出来ない數百萬、數億萬の人間は如何なるのか』と言はしめてゐる。この言葉こそ、彼の愛し得ぬ苦みを通して漸く自分のものとした態現してゐるのだ。

此道程より、辛辣な無神論はないと彼は言つてゐる。ドストイエフスキイは、當時、人々から神の熱狂信者である、盲目的な信仰者であるとの非難をうけたが、彼は之を辯解して、自分が此イブンの無神論にも劣らぬ疑惑の煉獄を通つた後、始めて、神の信仰に達したことは誰も知らないと言ふやうな意味を言つた。彼は物質的の迫害のどん底まで極めたと同じく、精神的にも苦悶のありつたけを嘗

めつくしたのであつた。そして、此苦悶と疑惑の煉獄を通つて彼は悲痛な愛と信仰とを得たのであつた。神を信じないで如何して人間は生きてゐられるかと、ドストイエフスキイは叫んでゐる。彼を宗教狂と呼ぶ人は、彼の精神の氣高い苦痛を知らない人であつて、彼の民衆の愛をも、狂氣と呼ぶ人である。何故となれば、彼の熱烈な民衆の愛は、實に彼の切實な經驗とキリスト教的信仰から生じたものだからである。彼は一見粗野な無智な民衆から、此世の最も正しきもの、美しきものを探し出した。その正しきもの、美しきものこそ民衆の未來の發達に一層完全な基礎となるべきことを確信した。是以上の民衆の愛は嘗て今迄なかつた所である。

ドストイエフスキイの描いた小説の主人公を便宜の爲見分け易く三大別して、人間神に渴望した人々と神人に渴望した人々と此二つの道に迷ひ疑ひたる人々とに區別することが出来る。第一は天才たり得なかつたエフイモフ、現代の人類の立法者たらんとしたラスコルニコフ、超人たらんとしたキリロフ、宇宙的虛無主義者のスタフロギン、無神論者のイブン等であつて、第二は憐憫の深いヴァニヤ、同情の化身たるミュイシユキン公爵、信仰深き民族主義者シャトフ、敬虔な巡禮マケエル・ドルゴルキイ、純潔な小天使アリヨオシヤ、完全な聖人ゾシマの如き人々である。然して、此外の多くの主

人公、例へばフオオマ・フオミツチにしても、エルシロフにしても、小ドルゴルキイにしても、ゼリチャ  
ニノフにしても、此人間神と神人との二つの道の何れに走るべきかに迷ひ彷徨したる苦悶の人々に他  
ならぬ。然し、此第三のカテゴリイの中に入るドストイエフスキイの主人公は、單なる懷疑の人では  
なくして、實に人類的な苦痛と世界的な煩悶を抱いて放浪した人々である。是等の人々を弱い卑屈な  
放浪者とのみ見做すことは出来ぬ。眼を更に最近の作から轉じて處女作に遡つて見ても、其作には人  
類の愛の苦み、信仰の爲に悶へた人々を見出すことが出来る。ドストイエフスキイの六十年の長き苦  
悶も、外的に見れば物質上の苦みのみに見えるけれども、内的に見れば、此矛盾せる二大思想の絶え  
ざる争闘ではあるまいか。「神と悪魔と戦ふが、此戦場は人の心だ」と「カラマゾフの兄弟」でドミトリ  
イは言つた。ドストイエフスキイの心も亦此神と悪魔の戦ひであつたのだ。「人間の生存の一番大切な  
條件は人間が絶へず偉大た或者の前に頭を下げる事が出来ると言ふことである。人間から無限に偉  
大なものを奪はれたら、其まゝ生きてゆくことは出来まい。屹度希望のあまり死んで了ふだらう。無  
限なるもの偉大たるものは人間に取つて彼等の住んである遊星の如く缺くべからざるものである」と  
「悪魔」の中でステパン・エルホゼンスキイは言つた。即ち、此偉大なるものとは神人である。斯かる

神人の憧憬からして、ドストイエフスキイは、民衆の愛を體現し、人類の苦痛の大同情者となり、聖  
人となつた。然し、ドストイエフスキイの心には、かゝる神人に對する渴望の外に、更に人間神に對  
する渴望があつた。彼は絶えず自分の此二重生活の爲に苦しめられてゐた。其は多くの天才に見る所  
強い人間の力から發するものであつた。人類を愛せんとして得ざる苦み、神を信仰せんとして得ざる  
悶へは、ドストイエフスキイの精神の奥に、絶えず潜んでゐたのである。イブンは言ふ「十八世紀に  
ある老罪人が居て、『神様が存在しなければ、自分で創造する』と言つたことがある。人間は實際神  
様を發明したのだ。そして、不可思議なことには、神は眞に存在するものではないと言ふのではなく  
して、人間のやうな殘虐な惡辣な獸の頭に神は必要だと言ふ考の起つてくることだよ。」「悪魔」のキ  
リロフも亦言つてゐる、『世に神がなければ、其時は俺が神だ、』と。ドストイエフスキイの心は絶え  
ず、神に憧れてゐたけれども、彼自身から湧き、其力から發する人間神に達せんとする働きを如何し  
ても止めることが出来なかつた。斯くして、一方に本能的な人間神に渴仰する結果、彼は又人類の大  
訊問者となり、最も辛辣な告白者となり、又大罪人の心持を理解することが出来るやうになつたので  
ある。かゝる見地からして、自分は、ドストイエフスキイの六十年の一生を苦しめたものは、外的の物



質的缺乏よりも、精神的の苦みが一層ひどかつたと思ふ。物質的の缺乏は、只彼の精神の苦みの刺戟となつたに過ぎなかつたとさへ思はれる。

斯く、ドストイエスキフイの心には、信仰と愛が凝集せんと働くと共に、懷疑と憎悪が之を放散せしめやうとし、此矛盾葛藤から彼の偉大なる思想は醸酵して來たものであつた。彼の深酷なる寫實、其藝術品としての完成も、かゝる争闘より生れるものでなければ、決して大きなものとはなり得なかつたであらう。彼が一方に大聖人の心を有し乍ら、他方に大罪人の心を忘れなかつたのも之が爲であつた。彼は神に對する敬虔な信仰を有すると共に、惡魔に誘惑された人の心をも解した。無邪氣な小兒の心を有するかと思へば、大なる天才の心持を失はなかつた。虐けられ苦しめる人に同情すると共に、傲慢な惡人の行爲をも理解した。彼は文學者であり、哲學者であり、政論家であり、心理家であり、同情をうける人であり、慰問者であり、精神の病者であり、精神の醫者であつた。彼は人間のあらゆるものであつた。上は最も此世の潔い聖人から、最も卑しい罪人に至るまで、凡てを愛し凡てを理解してゐた。彼は一生生涯貧乏に苦しんでも、貧乏をも愛した。諷解されて十字架に磔殺せられんとした時も、十字架を愛した。烈しい病氣に苦しめられた時でも猶病氣を愛した。彼は一生を地獄の中に苦

むやうな思をして送つたが、其でも人生を熱烈に愛した。かゝる恐しきまで大なる愛の湧いたのは、人生に對する本能的な執着と深い理解から來たのみでなく、天才の力から來たものであることは疑ひを入れない事實である。

長い間、此人間神と神人との矛盾とに苦しんでゐたドストイエスキイは、遂に、人間神の心を神人の心の中に融かし込み、其二重人格の間に調和を見出さんとした。幾度かはかり知れざる程の深淵に沈まんとした彼の心は、遂に再び青空に聳えたる最高峯に上らんとした。彼の如き偉大な透視力を以てしても、幾度か此人生の迷路に迷ひ、彷徨したことであらう。然して、遂に永い烈しい苦闘の後、始めて理想なる神の王國に達せんとした。イヅンの大訊問者や宇宙の虛無主義者スタフロギンでさへも無意識には神人を拒むことが出来なかつた。長い苦い精神の争闘の結果其愛が意識的に完全となつて、始めてゾシマやアリヨオシヤやミニシユキン公爵の大なる愛が實現するのである。

此世に生きることが苦しければ苦しい程、益々深く彼等は人生に執着を感じ、愛を感じるやうになる。彼等主人公の虛無主義も無神論も人生を餘りに深く愛し、人間から餘り多くの完全を求め過ぎる所から起るのであつた。ドストイエスキイの凡ての苦闘も、此極端すぎる愛から迸り出たのだ。

愛の深みの極級は、勢ひ宗教的信仰に赴かねばならぬ。キリストの愛即ち大救世主の愛に至つて、始めて偉大となり完全となるのである。然し、そこまで達するには多くの煩悶と苦難とを嘗めなければならぬ。ドストイェフスキイは、自分の一時の情を制する事が出来ず、自らキリストの如き大きな愛に達する事が出来ないと嘆じた事は幾度あつたであらう。苦しいつらい自己解剖、自己苛責の結果、彼は始めて、ミュイシキン公爵、ゾシマ長老、アリヨオシヤの如き廣い深い愛に到達し得たのである。

此處に於て、人間の惱めるあらゆる問題は解決する。民族主義と西歐主義との争も、個人主義と愛他主義との争も、ドストイェフスキイに取つては、小い／＼人間の蠢動に外ならぬ。是等の一見相矛盾し撞着してゐるやうに見える主義は、彼に取つては決して互に反対し衝突するものではなかつた。個人の發達は民族の發達であり、民族の發達は人類の發達である。個人を無視し、民族を無視して、人類の發達をはかり得ない如く、人類の愛を無視して、民族の發達や個人の發達を圖ることは出来ないのである。ドストイェフスキイが利己的の愛を口を極めて非難したのは是が爲であり、また、抽象的な愛他主義を利己主義に他ならぬと言つたのも之が爲である。

利己主義は深く／＼人間の心の中に食ひ入つた目に見えない黴菌の如きものである。自分を眞に愛

するのではなく、自分の肉體に迷はされ、其奴隷と化せんとする思想である。斯かる人は人生を物質的にしか見ることの出来ない迷へる哀れな羊である。斯かる罪は、屢々愛他主義を説く人の心の中にも深く食ひ入つてゐる。ドストイェフスキイは此事實を異常の力を以て洞察した。此爲めに彼は自己犠牲の必要を説いたのであつて、決して眞正の個人主義を排した譯ではない。何故と言ふに、彼の人間神に對する憧憬即ち超人の思想は、最高の個人主義の發現であつて、彼の神人に對する崇拜、即ち自己犠牲と、最終に於て一致調和すべきものである。「悲痛の中に幸福を求めよ」と「カラマゾフの兄弟」のゾシマが言ひ「世界を征服しやうと思つたら、汝自身を征服せよ」と「悪靈」のシャトフが言ひ、いろ／＼の所で、自己を捨てる事が、却つて自身を生かす道であると説いてゐるのは、此意味である。實際彼に於ては個人主義は完全に愛他主義と一致融合してゐるのである。彼は決して消極的の卑劣なきらめから自己犠牲を説いたのではなく、積極的に突込んで説いて行つたことは深く注意しなければならぬ所である。他人の不幸の上に形づくられた自己の幸福は、彼に取つて許すべからざることで、他人と自己とは根本から言へば互に戦ふべきものではなく、他人の幸福は自分の幸福であり、自分の幸福は他人の幸福とならなければならぬからである。彼はプウシユキンの演説の中でプ

ウシュキンの詩を解釋して言つた、「傲れる者よ、身をへり下つて、第一に、汝の傲慢に打ち勝たねばならぬ。怠惰なる者よ、身をへり下つて、汝の土地を耕さねばならぬ。」是が民衆による解釋である。眞理は汝の外にあるのではない。其は汝自身の中にあるのである。汝は汝自身に服せしめよ。汝自身を征服せよ、然らば汝は眞理を發見するであらう。眞理は、知られたる虚偽に反抗する汝自身の努力の中にある。」と、彼は斯様な謙遜と犠牲の中に眞理を見出した。

人類のあらゆる思想の融合、之がドストイェフキイの一生の努力であつた。自然と人類の宇宙的調和、之が彼の希望であつた。全人類の苦痛に對する同情、之が彼の使命であつた。世界苦を抱く放浪者に對する憐憫、之が彼の仕事であつた。彼が神に仕へんとした一生の努力は、取りもなほさず、彼自身の中に神秘に光を放つ超人の努力であつたのだ。此二つの大なる力の調和は、昔から天才、豫言者たるに缺くべからざるものである。救世主の没我的精神の裏には、主我的精神が鬱勃として動いてゐなければならぬ。然し、此兩精神の間には少しの不調和もあつてはならない。かゝる精神こそ眞の偉大なる天才の心である。彼の小説を読んで、神に憧るゝものと超人に憧るゝものとの切なる努力を見れば、ドストイェフスキイが如何に此二つの力の調和に苦心したか、察せられるであらう。判

棘の道を通り、とげに刺されて傷き、塵埃にまみれ、眼から涙が流れるけれど決して絶望することなく倒れては起き上り、倒れては起き上り、苦しい障碍多き道を突き切つて進んで、始めて永劫調和の道を發見したのである。實に彼の思想は涙と血を以て得たる寶玉の如きものである。

換言すれば、大ドストイェフスキイの一生は、神の子たらんとする努力に外ならなかつた。彼は永遠の問題に憧れ、神を求め、眞理を究め、人間を肉の奴隷の状態から救はんとし、不幸な人々に同情し、此世の最も深い罪人や白痴や狂人をも愛した。彼は愛と自由と信仰とで、世界の人類を調和し、人類の王國を打ち建てんと乞ひ願つた。そして、人類の幸福の爲には如何なる苦痛も厭はず、自分の身をすら抛つて省みなかつた。彼が宇宙の下に打ち建てたものは、實に苦痛の宗教の大伽藍であつたのだ。眞理を王として奉仕する憐憫と同情の一大王國であつたのだ。

人生は無窮から無窮と續き、宇宙は無限に廣がつてゐる。限り知られざる秘密は其中に隠れて見えない。此多くの隠れたる眞理を發見しやうと試み、唯永遠の問題を解決せんとする渴望にのみ惱み、不朽の眞を發見せんと苦心慘憺したのは、實にドストイェフスキイの一生である。『年寄連中は只實際問題に没頭してゐるのに、若きロシアは只永遠の問題ばかりを論じてゐるのだよ、』と言つたイザン

の言葉は、何と言ふ勇ましい悲痛の呼びであらう。宇宙萬物の進めるロゴスを發見するためにのみ、彼はあれ程の苦惱を嘗め盡したのである。

我々は文學者の使命は豫言者の使命と同じく、眞理に向つて永久に努力すべきものなることを信じて固く疑はない。神我力とも言ふべき洞察と透見と力とを以て、人生を直觀し、宇宙の秘密をゆり動かし、隠れたる眞理を發見してゆくこそ、眞の天才の使命である。大ドストイェフスキイの辿つた道は其であつた。否其以上、彼は信仰と愛との極度の熱烈さを以て、人類の運命に肉薄し、救世主の如き精神を以て、人類の苦痛を救はんとした。更に彼は全人類の苦しみの爲に苦々、全人類の愛の爲に愛した人である。彼は人類の幸福の爲には何時でも身を捨て、惜まなかつた。彼の如く人間の運命を掛念し焦慮した人はなかつた。彼の辿れる道は命がけであつたから是上なく悲痛極りなきものであつた。彼の使命は過去現在に止らず、更に未來に於て果さるべき清勢力を有してゐるのである。彼の努力は果しなく苦々かつた。何となれば彼の使命は墮落せる人類を救はんとするのであつたからである。彼の苦みは永久の人類の苦である。彼が古今を通じて最も深奥な悲劇作家の一人と稱せられるのは是が爲である。人生の烈しい暴風や雷鳴や騷擾をば、『慘酷の天才』と稱せられるまで辛辣に描き、其

深淵の最極の墮落からも、白熱せる純粹の光明を發見した。病的な人間の碎かれた精神からも、彼は充溢した生命を見出した。彼は前人の未だ發見せざる眞理を一つづつ見出して行つた。而して之を取り扱ふに、悲痛なる信仰を以てした。彼は此點で單なる文學者ではない、古の救世主や聖賢の達すべき位置に達してゐるのである。かゝる位置に達してこそ、始めて文學者は眞正の文學者と言ふことが出来る。實際、文學は人間の皮相な感覺や來、戯作者と言ふ卑しい名前から逃れることが出来るものである。實際、文學は人間の皮相な感覺や感情を喜ばず爲に生れて來たものでなく、偉大なる欲求から生じて來たものである。此偉大なる觀念を理解せず、體現しやうとしないものは、文學者としての恥辱のみでなく、人間としての恥辱である。而して、過去現在未來を通じて、如何なる文學者が眞正であるかと問ふ場合に、其試金石となるものは必ず大ドストイェフスキイでなければならぬと自分は思ふ。彼は實に時代の先驅者であつたのみならず、未來の文學者に對する最高なる思想として嚴然として存するものなることを固く信じて疑はない。

お、大ドストイェフスキイ、彼こそは深淵中の深淵を極め、高峯中の高峯を極め盡したものである。彼こそは偉大なるものゝ中の偉大なるものである。彼の使命は單にスラヴ民族を世界大にしたに

止らず、神と人とを結びつけ、天と地とを相近げんとするにあつたのである。彼の我々の前に開いてくれた新しい世界は、眞に驚嘆すべき壮大なる世界である。そこには暴風荒び、電光はためき、驟雨降り、暗黒覆ひ、光明閃く。ありとあらゆる人間の靈魂の秘密、深奥なる生命は彼の中に燦然と光を放つて輝いてゐる。激烈悲痛なる情緒も、崇高なる靜寂平和の感情も、一樣に神秘的な愛の光を放つて、我等の眼前には、今迄見られなかつた壯觀が展開されてゐる。彼は、暗の中より光明を見出し、苦痛の中より幸福を求め、卑賤の中より崇高を探し、一時的のものより永遠のものを發見せんとする彼の作物は、愚かな罪深き我々を、惡魔の誘惑より逃れしめ、そして天國に導かしむる宇宙の一大橋梁である。限りなき彼の愛、底知れぬ彼の力、實に彼の思想は世界のあらゆる思想の綜合であり、彼の使命は眞理を宣傳する使徒のそれである。又彼の人格は全人類の愛を體現せる救世主のそれに比較すべきものである。(終)

### ドストイェフスキイ年表

- 一八二一年。 露曆十月三十日(新曆十一月十二日)モスコウのペテル、ポオル教區のマリンスカヤ慈善病院に生る。  
司祭ワシリイ、イリイン祈禱し、助祭ゲラシム、イヴァフ之に與る。父代母は醫師佐官相當官グリゴ  
チイ、パウロフ、マスロギツチ、公爵夫人プラスコリヤ、チモフェエヴナ、コズロフスカヤ、モスコ  
オの商人フィオドル、チモフェエフネチャイエフ、及び妻アレクサンドラ、クイオドロヴナ、クマニ  
ナナリ。同年十一月四日イソインの手より洗禮を受く。
- 一八三一年。 ドストイェフスキイの父トウラ州に別荘を買ひ、夏はそこに日を過す。
- 一八三四年。 ドストイェフスキイ、モスコウのチエルマツクの寄宿學校に入る。
- 一八三七年。 二月二十七日、彼の母、マリア、フィオドロヴナ、ドストイェフスカヤ死す。兄ミハイルと共にペテ  
ルスブルグに至り、コストマロフの豫備校に入り、秋、彼のみ陸軍工科學校に入學許可せらる。
- 一八三九年。 彼の父、ミハイル、アンドレイエギツチ、ドストイェフスキイ死す。
- 一八四〇年。 十一月二十九日、見習士官となり、十二月二十七日少尉となる。
- 一八四一年。 『マリア、ステュアルト』及び、『ボリス、ゴドノフ』等の脚本を書きたれど傳らず。

- 一八四二年。中尉に進級す。
- 一八四三年。工科學校卒業。技師として奉職。
- 一八四四年。バルザックの『ウウジエニイ、グランデージョルジ、サン、及びウ、ジエヌ、シユウ』を翻譯す。  
處女作『貧しき人々』を書く。脚本を計畫す。陸軍技師の職を辭し、文學者とならんと志す。
- 一八四五年。『貧しき人々』完成し、ネクラゾフ及びグリゴロフツチに認められ、ペリンスキイに紹介さる。『嘲笑ふ女』『九通の手紙の小説』を書き始む。
- 一八四六年。『貧しき人々』をネクラゾフの經營せるペテルスブルグ、アルマナツク誌に發表し、ペリンスキイ大に之が賞揚につとむ。又、『二重格』及び『プロマルチン』をオテチエストエンニヤ、ザビスキ誌に發表。此年の終ペリンスキイ、及びソブレメンニク誌社と衝突す。
- 一八四七年。『九通の手紙の小説』をソブレメンニク誌に、『主婦』をオテチエストエンニヤ、ザビスキ誌に發表。
- 一八四八年。巴里に二月革命起り、ペテルスブルグにペトラシエフスキイ結社組織せられドストイェフスキイ之と接近す。『弱き心』クリスマストリイと結婚。『白夜』『他人の妻』『過去の人の物語』『嫉妬深き夫』を書く。
- 一八四九年。『ネトツチカ、ネズノゾ』を書く。三月、ペリンスキイの革命の手紙をペトラシエフスキイの室にて讀む。四月二十三日捕へられ、ペトロポオロウスキイの牢獄につながる。『小英雄』を書く十二月十九

- 日軍職を剝奪せられ、二十二日死刑の宣告を受けしが減刑せられて、シベリアに流刑せられ、懲役をすることとなる。同二十四日二十五日中に護送シベリアにゆく。
- 一八五〇年。一月十一日、トボルスクに着し十二月黨の夫人達と會ふ。同十七日、オムスクに送らる。
- 一八五四年。二月十五日刑期終る。三月二日シベリア第七常備聯隊に一兵卒として兵役に服す。三月の終、セミバラチンスクに到着す。五月歐洲事變の詩を書く。十一月二十一日ウランゲル男爵來り、親交を結ぶ。
- 一八五五年。二月十九日。アレクサンドル二世登極す。ニコラス一世の死。及びアレクサンドル二世の即位に関する詩を書く。『死人の家』を書き始む。
- 一八五六年。一月十五日見習士官となる。三月二十四日、トテレベン將軍に手紙を書く。十月一日、勅命により少尉となる。
- 一八五七年。二月六日。マリア、ドミトリエヴナ、イサイエフとグスネズクに於て結婚式を擧ぐ。四月十八日、勅命により、剝奪せられたる貴族の稱號を恢復す。辭職及びモスコウに住居するの請願書を書く。『小英雄』を發表す。
- 一八五九年。三月十八日、辭職聽許せられ、トエエルの町に住居するを許さる。『叔父の夢』をルスキイ、ザエストコク誌に、『ステパンチコデ村』をオテチエストエニヤ、ザビスキ誌に發表。十一月の終、愈々歐洲に住居す

るの自由を許可せられベテルスブルグに赴く。

一八六〇年。著作を集めて二冊とし、オスノヴスキイより出す。

一八六一年。兄と共にヴレミヤ誌を發行す。『虐げられ辱められし人々』及び『死人の家』をヴレミヤ誌に發表。

一八六二年。『穢はしき話』をヴレミヤ誌に發表。六月七日、外國に行く。巴里、倫敦、ジエネヅに逗留す。

一八六三年。『夏の印象の冬の記録』をヴレミヤに發表。ストラホフの論文の爲、ヴレミヤ誌發行禁止さる。夏の間外國に旅行羅馬に滞留す。『賭博者』を計畫。冬、妻の病氣。

一八六四年。エボカ誌を兄と共に發行す。『地下室』をエボカ誌に發表。四月十六日、死妻す。六月十日、兄ミハイル死す。十二月二十五日、共同經營者アポロン、グリゴリエフ死す。

一八六五年。『非常事件』をエボカ誌に發表。七月の終り、外國に行く。『罪と罰』を書き始む。秋、キエスバアデンにゆく。十月、コオベンハアゲンにヴランゲル男爵を訪問す。十一月ロシアに歸り、出版者ステロフスキイに著作権を賣る。『罪と罰』をルスキイ、ギエストニク誌に發表、翌年まで連載。

一八六六年。モスコウの近傍ルプリンに夏を送る。此年の終り、『賭博者』を書き、女速記者、アンナ、グリゴリエフナ、スニトキナと交際を始む。

一八六七年。二月十五日、アンナ、グリゴリエフナと結婚。四月十四日、借金の爲め外國に逃る。ドレスデンに二ヶ

月滞在。ベリンスキイに關する論文。八月十六日、アポロン、マイコフに手紙を書き、ツルゲネエフと喧嘩したること、賭博に大失敗したることを報らす。一作者の日記を計畫す。此年の終り『白痴』を書き始む。

一八六八年。『白痴』をルスキイ、ギエストニク誌に連載。夏、スイツツルと伊太利とに行く。無神論に關する小説

即ち、『カラマゾフの兄弟』を計畫。

一八六九年。此年の始、フロレンスに行く。新刊雑誌ザリヤと關係。ダニレフスキイの『ロシア及び歐洲』なる論文に興味を感ず。

一八七〇年。『永久の良人』をザリヤ誌に掲載。『悪靈』にとりかゝる。

一八七一年。悪靈をルスキイ、ギエストニク誌に發表。七月八日外國よりベテルスブルグに歸る。

一八七二年。東方諸國に遊ばんと計畫。

一八七三年。グРАЗダニン誌の編輯主任となり、『一作者の日記』の始めの六章及び『外國事變の考察』を同誌に發表。

一八七四年。三月の終り。檢閲規則にふれて檢束せらる。秋と冬はストラヤ、ルサに過ごす。『青年』を書き始む。

一八七五年。『青年』をオテチエスト、エニヤ誌に發表。夏エムスに赴く。

ドストエフスキ全集

第五十卷

不許  
複製

大正十年十一月十日印刷  
大正十年十一月十五日發行

非賣品

編輯兼發行人

ドストエフスキ全集刊行會

右代表者

鷺尾 浩

印刷者

川崎 佐吉

印刷所

川崎活版所  
東京市京橋區榮地二丁目三十番地

發行所

東京市日本橋區  
本町二丁目八番地

株式會社

冬夏社

東京市京橋區榮地二丁目三十番地  
電話 本局三一四一六番

一八七六年。『一作者の日記』を發行し始む。夏はエムスに行く。

一八七七年。『柔しき女』を書く。夏はクルクス州に赴く。十二月二十四日、『我一生の記録』を書く。又『プロトカヤ』をも書く。

一八七八年。夏、『カラマゾフの兄弟』を書き始む。

一八七九年。『カラマゾフの兄弟』をルスキイ、ゼエストスク誌に發表。六月、ウラヂミル、ソロフイヨフとオプチン僧院に赴く。

一八八〇年。五月二十五日、モスコウの文學者新聞記者等、ドストエフスキイの爲に祝宴を開く。六月六日七日、プウシユキンの銅像の除幕式あり。八日、ドストエフスキイ、ロシア文學愛好者會の爲に有名なるプウシユキンに關する演説をなす。

一八八一年。一月二十八日。午後八時三十八分ドストエフスキイ死す、一月三十一日、ペテルブルグのアレクサンドル、ネフスキイ寺院に公葬せらる。一月二十九日、プウシユキンの死せる紀念祭あり、ドストエフスキイ之に出席演説せんとシルレルに約したれど約束を果たす能はずして死せり。



72831

---

21

375

47

25 8 19

終

